足薪翁百話

下

止

859
3
83

イ
三千九

859-83

玉川主膳 一ォ
鳥竹龍首標子 七
酸の肴版 十
蝿取蜘 十八
外良布近 廿三
毛雪蹈 三二
楼屋の楊枝 四二
笠の名種く 五五
入間様 八十

銭獨楽
雛の様ニ蛤貝を用る事 九
十六むさし 十三
杓子拍子 十九
隆達 廿六
やくよふ語 三三
男の髪 四五
稲荷図
蚊帳白鷺 八二

別春造花 三
町雛
縫箔屋の松 十四
梵天図
子日燈心 廿七
よめ君 三七
けちぎり（弓あり 九嶋羽色） 四九
右近源左衛門 六一
扇の名種く 八三

犬のさんく 五
奴雛
浄瑠璃 十六
篷竿 二十
与望都 三一
小六の宮 三九
頭巾種く 女霞面 六七
宗祇敎屋 九三

玉川主膳

玉川主膳は玉川千之丞と時をおなじうせしかぶき役者にて舞の上手なり何なる事にや若うして出家せしかど竹之丞が出家せし事を知て主膳が道を知る者なれば主膳は原（モト）京都の産にて寛文三年市村座にくだり僧となりさるに寛文の末か延宝の初なるべし

剣野老（寛文二年印本）

新傳内座
玉川主膳

よるの錦とこそむろの紅葉ふるさとのたもとをかへさし風
のさよりを扇の手になよくとせし舞の姿はなすめに
何ぞでゑまくおしよいひふけそぎておもいしらるぞ
なけこうふはそりてなし、ふうさとさりなこるあり

帝國圖書館藏

玉貌ハ世人歎（ナゲキ）　川ハ流ス瓢簟機（タン）　主ニハ無（トヾメテ）分別ノ意ヲ　膳ニハ破笠蓑衣ヲ

さへもや如意の玉川うつくしききの世ふるすゑめ

ぜんなるらし

垣下徒然草

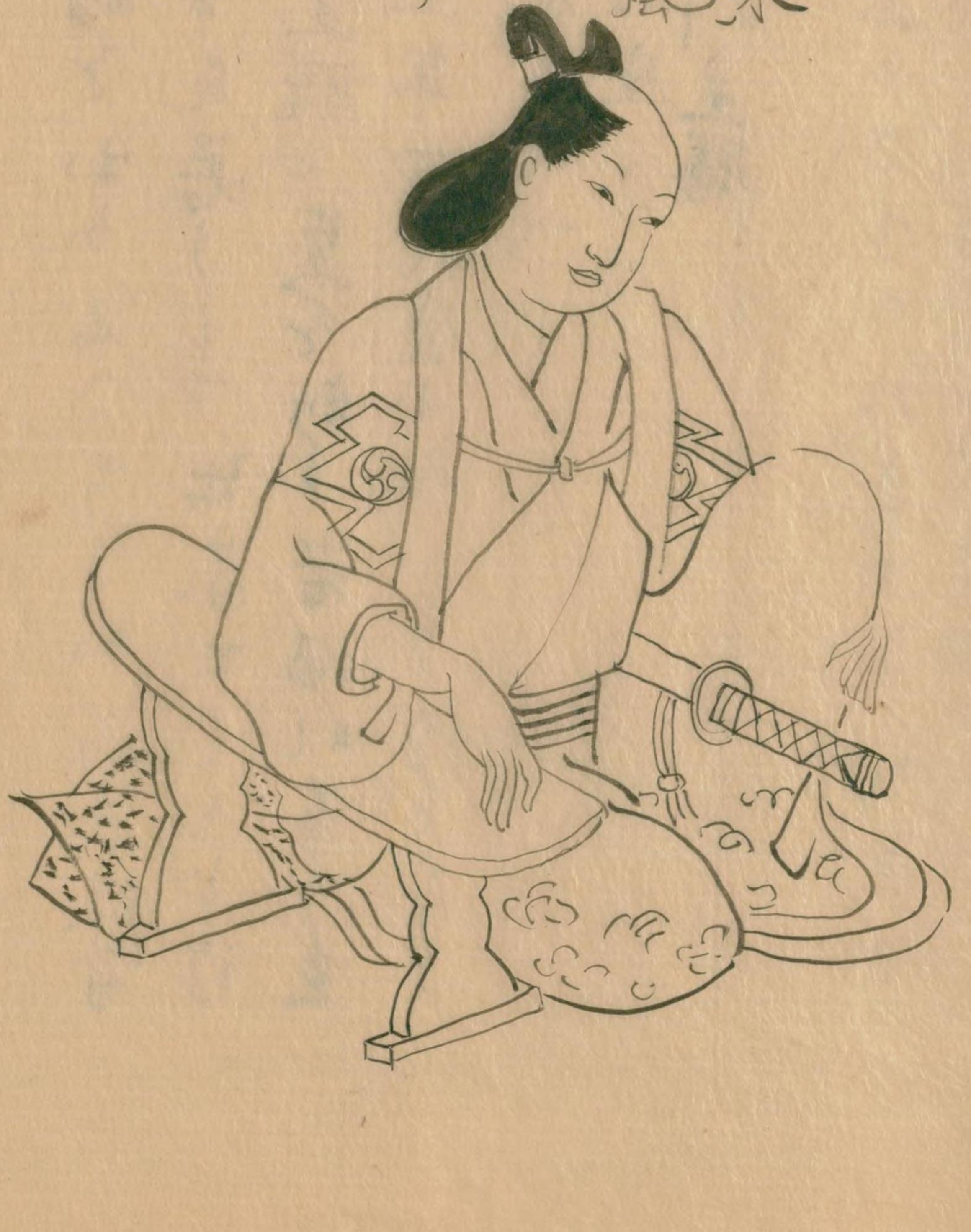
玉見満豊嶋ニ（ツカサトル）　河流渉ニ坂東

主歌舞扇曲　膳在（チナハツテアリ）大夫風

ふごうしなその玉河の

ながれとそ主膳の君の

かざえすりける



野老歌仙 寛文十一二年ノ頃（作者千之丞が條にあり）

車ゑうけし玉川の水（玉川主膳）

判詞 卯の花の面影さへ晩と詠し玉川の里が舞の乱曲

扇くるまふかこりや滴から揉ばならぬ気ざし

延寶廿歌仙（延寶五年桃青撰にあり）

前句 若勘三引もてびらる萩ニ揃　縁糸子

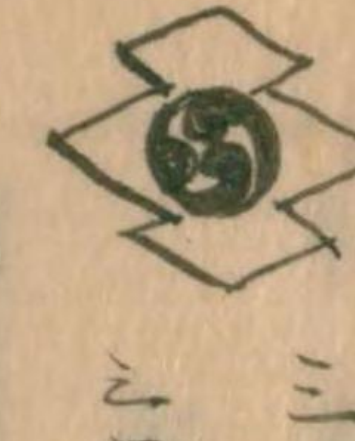
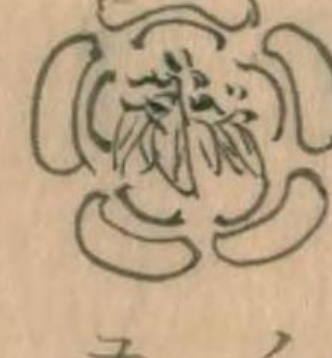
附 菴淋しき主膳道心　仝

足薪翁云野老歌仙を主膳いまだ法体ならざる以前の吟にて廿歌仙を法体にして後なり是を以て時代を考べし

又**古今役者物語**（延寶六年の印本）に曰「さてそれよりもおつゝき流れも清き玉川のせんのぞようづに主膳とて野老若衆のなり上りさて又瀧井の河これぞもきえてそうなき山

玉川千之丞と共に上手といひけるなり

ガラス使用

三郎玉川主膳も善に入諸国修行の身となり然是にて昔
りさりとなりし」とあり是に二十歌仙を合て法体なしける
證とすべし　寛文七年印本吉原讃嘲記に京町三浦屋四
郎右衛門内吉野といふ遊女を評せる詞に「此君舞あれと
りひとさし舞ふ姿は古への静が志つのをたまき繰かへ
して見るへくもなく今なと境町にて名をよぶ玉川主膳
が舞の手も見さくなれこそ」此詞に野老歌仙の判の詞を合
て舞の上手といふ證とすへし　又近年刊行なしける戯場
一覧に「玉川主膳といふも別而貴男にくまれて名高し紋所

三らいびしに三つ巴

丸の内に五三の桐　等をつくる　其頃の狂歌に
ふこらじな其玉川の流れこそ主膳の君の情なりけれ」

といふ事を載たり其頃より寛文をさしていふなるべし
主膳が事むかし〳〵物語に見えたるは千之丞の像に絶り
舞曲扇林（河原崎権之助作　元禄辛卯本）「玉川主膳　法名頼信　主膳は
過去し者なれども六態（りくたい）の鏡なればやすなり主膳は実景の
二つを得たり實は其聲雅（せいが）をよくおもひ入て喜ぶべきをよ
ろこびうなしむへきをうなしむなりされがこそ横笛夕
がなるなどせしに哀（あい）れに感ありて見物の老若袖をしぼら
ぬといふ事なし景はけしきを舞ふ右にいふ風吟道行等
他方角よく工風して舞し道行抔上手なりその頃までは
道行まふ人まれなりしが今は人ごとにならも長き道行
をまふ如何（いかゞ）
錢猫楽　同ノ下十四オ

瀧井山三郎ハ用捨箱下十一オ

別春が造花

造花師別春ハ京師の者なり後江戸に来りて上野廣小路に住す寛永の頃とやらんやんごとなき方に花を造りて奉りければ深く感し給ひ海が家にハ別に春の称をさづくされバ是より別春と名のるべしとおほせごとありてよりかく名のるとぞ古老の傳へてかたりける（其以前の名未考）

蓋ハ花見かへるさ又つくり花を見ること

延宝廿歌仙　延宝五年ト云印本未見　桃青オ

別春や上野帰りの道すがら　緑糸子

句意ハ咲えし如く上野の花のかへるさに廣小路の別春が覚の花を見れるハべつの春ともいふべしといふ吟也

江戸廣小路　延宝六年　不卜撰

花や雲別春が園に吉野紙　吟市

吉野の山の櫻ハ人丸が心（ノ目）にハ雲かとなんおぼえける古今の序の詞をかりて句なり當時はや吉野紙を造花に用ひしをしるべし

江戸惣鹿子　貞享四年六巻

作花師京下り　下谷廣小路　別春

淺草並木町　常春

とならべいだせり

又　前句付　誹諧江戸雀　正徳年　写印本失

前句　とり合にけり〱

別春が花ハ銭を毎家に咲　作者不知

ガラス使用

犬のさんく

犬ニさんくせよといへバ前足をあげてとびつくるのありしが他犬ハ知らずぞ
今江戸ニてさる戯をする者を見ず手をくれといふが其余波もいまだ免
三ちハでつち又小僧なといふ童の通称なれハ犬のでつちの相ひまぎる
まなひをせよといふの なるべし

俳諧慕紫集（万治三年京本 棠辰撰）

さんくゝや今朝うち初る戌の年　第丕

是万治元年戌年の歳旦

異本卜養狂歌集

戌の正月よめる

宝暦九春中村座
狂言初買和田宴（サカモリ）
第二番目男達
てつぺき武左衛門（代初）
中村歌右衛門大坂男達
ゑしせりふに「さしよ
悪斯安大ゐれたおれを
みるとおそくから待ほ
巾とぬのでさんぐを
きれバさ」

仙果

ガラス使用

まじらひく寐もらく目もらたれぞさんさの戌の年々

此哥中に寛文十年といふ事あれば寛文十年戌の正月の詠なるべし

俳諧江戸廣小路（延宝六年撰 不卜撰）

大桜あ子さんさの縁もなし　幽山

以上二説ハ江戸の書なれバ江戸にても此歌をせしなるべし　又

花洛六百句（延宝八年 仲か）

さんさきる歌やきえけん暮惜し　安静

さんさきる歌とあり いひておのづと覚えたり 此頃ある也

西鶴一代男（天和二年板）六巻ノ一 吉田さくより出て（吉田ハよしだの けいせいなり） 此中のれ仕方

謡してよめぬるのしたしめよすへ何の事までとの情つる之娘様らに切にあき

まつくれげんも今より活ハとや 按ありての えせ子出 なまさんさ させてあそ

たまこそきこゆは惜し」云〻 又近松が浄瑠り 栬狩劔本地に「馬ハさんさ

たきるぞく」とあるハ馬の膝きて乳あるが おのさんさきる事似たりといへるなるべし 此浄

瑠璃ハ宝永六年の作なれば当時まてハ今の志りみなるべし 五ケ條情

男五（元禄十五年板か）「其の日もきえかる風呂とさろ蒲 樂心そさむいハれそとをなく

きりふし 傳八さんさして見れば およるとびこ」云〻 清八ハあけ無之是ハよるとびてそとどり

なりくと其のさんさきる事に似ていへるなり

菱見草（伴安撰 明丁二）

まつをまつらハさんさの大桜　一武

ちりちり（延宝七 常矩撰）

それ雲ハ白衣とんでさんさをすり　利次

大の尾（天和二 蔵旦撰）

宿の夫礼者さんさのけーきあり

ガラス使用

竹馬之友　連哥年寄

護法童子經（ゲンヒラ）　十五
鬼神ナ説ニ小兒ノ夜啼ハ
オス犬ノ形チナシタル鬼ナルノ
魅ないナル不ハトイフニ擬テ
俗方ニ犬ノ子トトナヘしし

傍
山城祇園ノ社ニ猪（アヤツチ）ナ以小兒ノ驚ニ天之
字ヲ印ス是サイムノコト云祇園社の守
ナリ一社ノ秘決ノ革アリ

● 鳥籠弁楪子（チャツ）の事

むかしの諺に鳥無きさとの鳥驚といふ鳥を籠に飼ぬでハ声もかしましく
うちゆんも黒きぞうりまて面白からぬ猫が何のちなみれ無鳥の事をとらく
いふなるべし寛永の末元正保の頃元の寫本よ「鳥籠物語」といふ書あり
その跋に「さる人此草子をえて言葉賤しく心ちやつよ似たるおかしき
事ハさてかき姿をうつしもかしとゆされし依て此物語りの名とせし」とあり
（草ハシタカキと訓れ草紙の脱字れ ちやつとふも當時の流言なるべし）
又元禄五年印本「俳諧字幽蘭集」沾徳撰 恋の部の芝白に
蚊屋にひとり鳥を〻籠の夕かな　露傾
てらし合せて考べし一友人曰此諺ちかく「絵本答話鑑」（享保十四年印本）になのりとて
彼書なにかとせるをえれハ西川祐信の筆にて鳥を籠にいれしところをかきて
「十月頃の東山の景色と声のはつきよ人隱蝠と錢の名い謙会といふあり

油々足　寛永
ふきうかそめて往つと
いれなり
活録や籠
の鳥ふつひ
ゆゑん　貞徳

ガラス使用

ろうゑまの鳥を籠ふ入てろなぐさふへ（きろ）」といふ詞書を載たり

太田方曰前の鳥の籠物語の跋にみえたるちやつといふことを考ふるに是も一種の

諺となりて何にもあれはきことをちやつといひたるも知るへからず　饅頭屋

節用集 財寶部 楪木チヤツ 椀　古本節用集 財宝 楪子チヤツ 椀具とあれも

といへり足薪翁按に此説より　下学集 にも椀楪子とあれはいへりけり（れカ）此器の

はさきに拙ある事ハ　壒嚢鈔 塵添本 十巻　豆子ツス楪子チヤスの事　楪子大に浅し豆子に

深しと　又　醒睡笑 元和九年著　に年家をうける事を集し條の話に

（友会 茶碗ハ赤キ木皿なりしも名のさしあきらかなる事なし）

「指のゆきげとぞさらにとて。きりとてるをやしもそれがなきにそちハ絶るり腕、

ふたゆる皿ふそてるかえよといひとき・はる時又指のゆきげだとき。ちやつとしとぞし

てありけるとかうりとハ」　楪子チヤツといふ器の名をおぼえて衛に此話を解しゆきり

今もまへハ皿の類をちやつとのきまふり私どき賤しき拙ハきろりえるにぞと粉

笑　・寛見草 明暦二 休安撰

（又浅き拙の腕ハ也）

・冬がれはちやつよりふるき山もなし　重房

俳諧蒙求 延宝三年印本 惟中著

つれてるまでに添るかふしなへ　惟中

ちやつよりふるき奥の山里　〃

毛吹草 寛永十五 世話の部「ちやつよりふるきものもなし」

ガラス使用

蛤貝にて雛に飯を備る事　町雛、雛賣、大裡雛、裸雛、奴雛、

因に曰
「俳諧毛吹草」（寛永十五年）土産門　和泉国の條に「町雛　注麁相也」とあり　按に京の麁なるを
大内雛といひ麁相なるを町雛といふ也　内裏様なんといふにてはなかるべし
始めより名つけしにはあるべからねど　是は第一の心をえにつけおくにて此後かくいふもよし
といふにはあらねど人々花見を好むによりて町雛は見そなはれて名ばかり知る人なき
やうなるも出来しなるべし

ヨウシウブし
御伽文庫
きのふは

「仁世物語」
人のもと
より内裡
様おこせ
ける

「七十番歌合」
まついさて
町かふと

因に云
或人曰町雛は今にいふ立雛なるべし

因に云
明和安永の頃までは雛賣といふ物あり　乗物行器雛の道具京雛や小人形ども
よひきとりしに今の老人はよく知るところなり天明の頃より絶しに第一のものなるに
かはりしより此商人をなんぞ

「袖鏡」
七十六ノ五
「印の竿」
散かゝる花よ
米つくは近
き塵生
雛うる叟
遊ぶらは
くり祝之

江戸の時之
「俳諧向之岡」（延宝八年印本　不卜撰）
振賣や御雛まいらせん内裏雛　不門
（延宝の頃雛賣のありし証とすべし）

「續の原」元禄元年印本 不卜

雛賣ハゆかしき恋のよそほひかな　立志

さて京雛下り雛后雛帝雛等の句ハあまた見えてうるさけれハ略せなむ

とよし江戸雛の句あり

江戸の部之

「俳諧題林一句」天和三年印本 江戸住調和撰

吾園の桃の花ぞや東木偶（アヅマデツ）　自交

江戸の部之

「俳諧瓜作」元禄十六年 琴風撰

裸雛（ハダカ）如何（イカ）に手足の片雛（カタカ）なる　琴風

此のおかしく手足のふらふらする事を片雛といふなるべし元禄より以前ハ裸雛の句未見

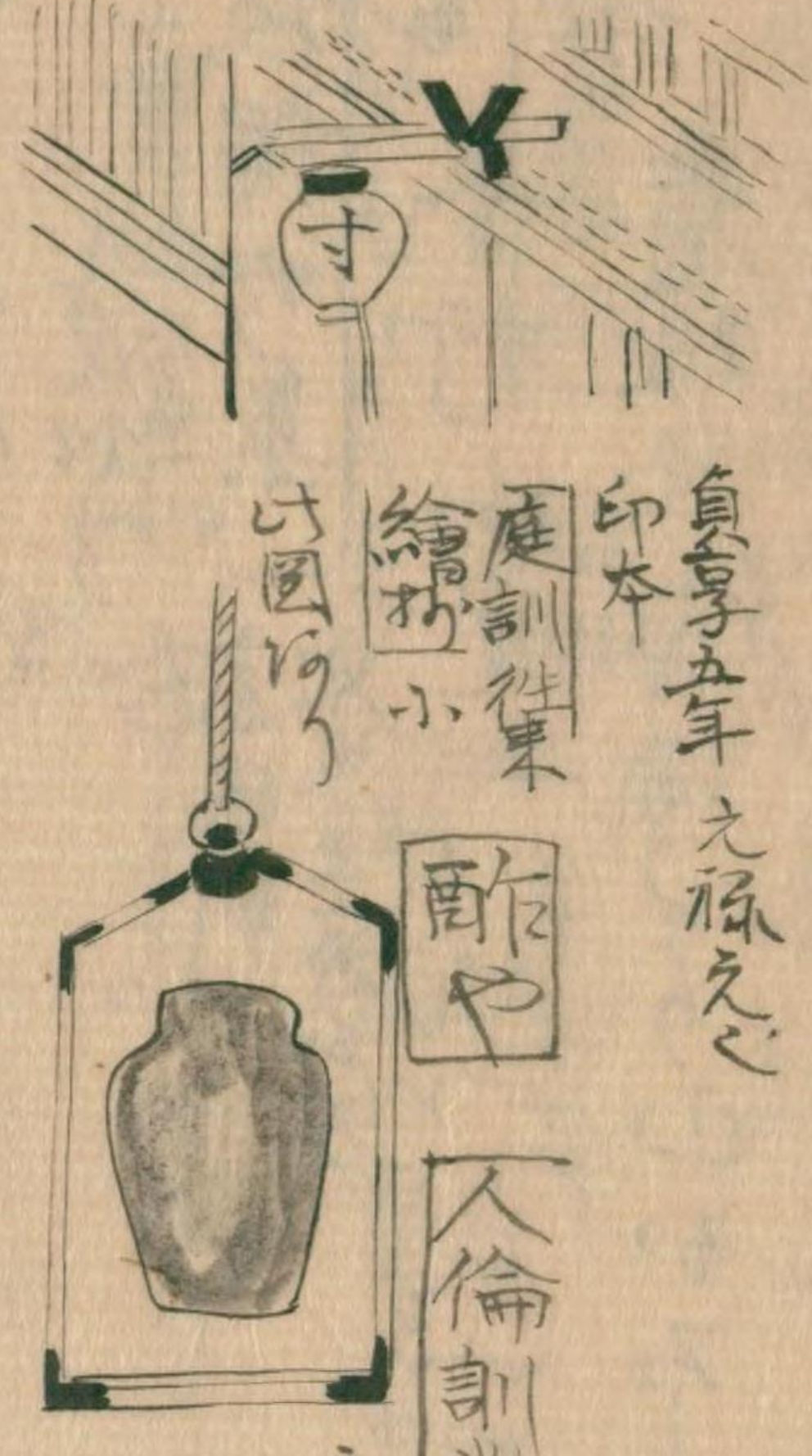
「俳諧一幅半」元禄十三年 浩芳人撰 此書ハ京洗亭の撰之

・廣袖て出るや近所のやつこ雛　乙孝

奴雛といひける物未考

「一本草」寛文九 冠せたるの京雛の説白されし 華豊之

・酢の看版 三種



貞享五年 元禄元之 印本 「庭訓往来絵抄」に此図あり

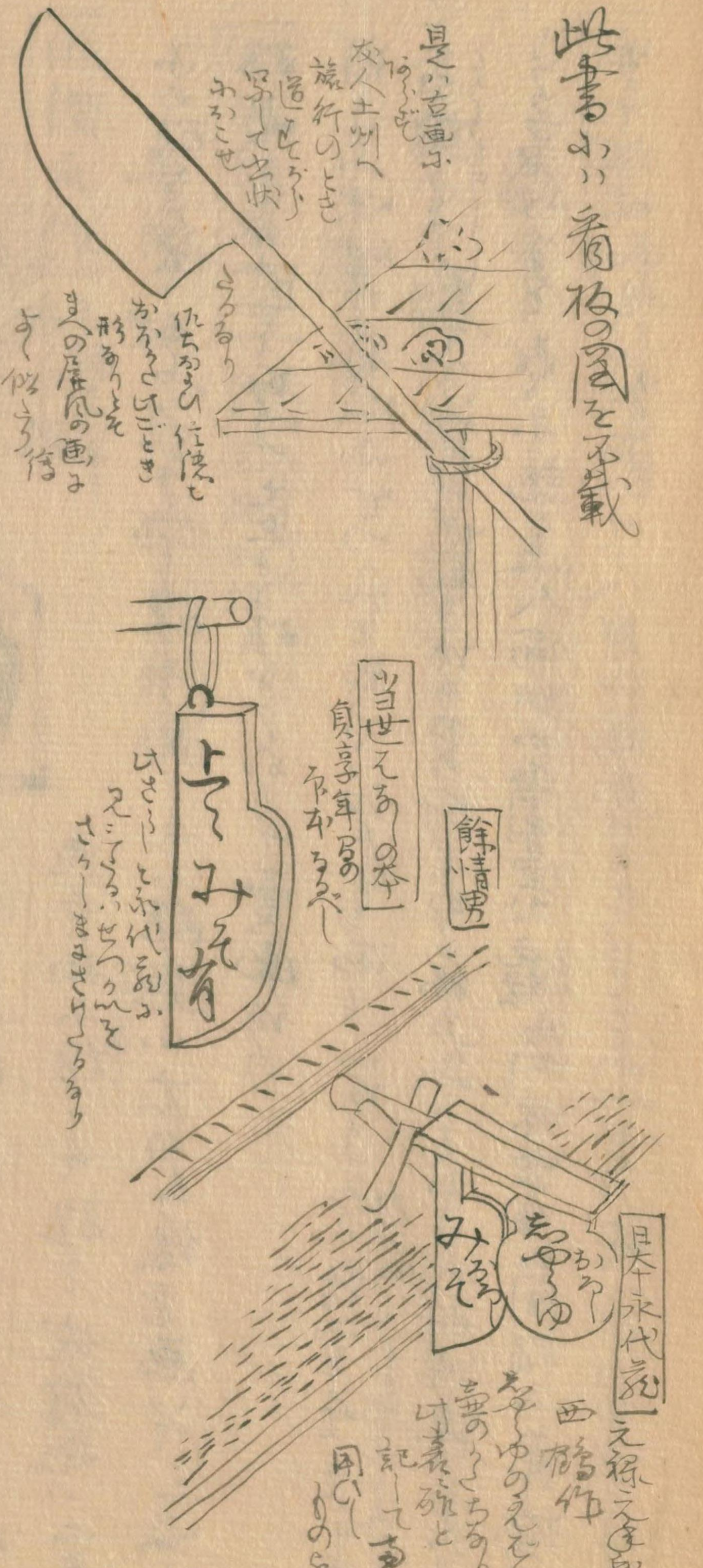
「人倫訓蒙図彙」元禄三年印本

并味噌の看板

あるハ図を出せる「人倫訓蒙図彙」ニ「和泉の酢名高し 或書ニ酢ハ聖人も好むあひともに鈍色の事も酢食して眼を屏（ヒソ）めしをありされハ老子ハ西ニ指さして酢を求め釈迦ハ二君子の酢を嘗めしをよんで酢吸と号しぬニ酢壜ニ太の三像を画いて三吸とも（采仙集ニアリ）酢吸ともいふ」とありて壺より酢をはかりて賣る画あり

因ミニいふ味噌の看板ニせつゐを出しハ江戸ニも所々ニありて余ハ精進を元として看（板の如くえゑをとあさ赤ニ）田舎ハいつれの地をかはりてめつらしからぬ縁がふるくハさゞねどふとりんでふる事のうをえてニ記し「人倫訓蒙図彙」元禄之ニ「味噌屋飾看板ニ節権を出して調味和（テウミワ）さる能ありて人身の保養とせるところ一日も離るべからず」とありて

此書ニハ看板の図を不載


上々みそ有
みそ
しやうゆ
おろし

是ハ古画ニならふ 友人土州へ旅行のとき道にて写して出状おこせ

よろしかり 佐ちやう往古も おろさ此ごとき形ありしを 其への屏風の画ヶよく似たり

当世えらみの本 貞享年間の印本なるべし

餘情男

此さかしとに代記ニ見えてるハせつゐんを さゝしまさけるなり

日本永代蔵 元禄元年印本 西鶴作

草ゆのえぞんも壺のうちにあり 此義就と記して東鏡ニ同じものか

大坂獨吟集 宗因判 延宝二年印本

前 草行ふでもかしせつゐん一ツ　未学

附 看板の鑓（アド）ゆりゆり山おろし　ね

京之吟 延宝六年

入野の風を背負て来にけり（他集ニ出て）　信徳

・せつゐんをあすの軒のまさえて　改定

窓の小笹の竹を拜ニ　仙庵

誹諧ホ雲礎 秋風撰 天和二年印本

前 今ぞさりえん鎗柄の里とやハ　常矩

附 賣味噌ニ申されけり　秋風

未学ゝ句ニ味噌と云事ハ見えざれど此看板をいふとい論すし 秋風の句ハ彼せつゐんを大きく作りしるが鎗柄のふくみえたるゆゑ賣味噌所と附たるなるべし

もろやのさうハえんくのまゝの事

元文二年作出り 大坂入道岳庫岬 二本 こゝやきやのことばけねあひ丸ハ抱老ぐ出来あそもし同題此さうでや

みそやれせつゐんもちやの さうれんぞんも同じて

仙巣云

桜田名所図会（矢田部郎）八ノ三十二ウ 巨松亀山福厳禅寺ノ条云

むかし名庵の庭に柳の大樹あり其池を號て柳泉といふ樹下に木下源太といふ乞食の者あり名を並嘉門 品致論て大に役信役家貧く草鞋を作りて業とし ある時其情息として其一枚を乞ふ

せうらいかんえんのこと

夫婦謀して曰貧困にして借たる食なし殊に今年有歳（サイ）にて新玉の年迎へられて目出度客を迎ふるよし異なるこれを以ておのれら主人と筆合して其にせんと終日にかく[illegible]明旦彼[illegible]は蒂の[illegible]を[illegible]に[illegible]出れは書[illegible]し主[illegible]をかこれは音[illegible]はある[illegible]をめぐりて[illegible]眼祝泉生福[illegible]は[illegible]主[illegible][illegible]ところ近隣の者これは[illegible]主[illegible]より[illegible]かに行方なし其家の[illegible]く[illegible]ては[illegible]て家の前に其名をかけて[illegible]の[illegible]しくんすまる潮[illegible]此日より止れぬより今世にある[illegible]（せうらい）看板の始なり[illegible]して年月を[illegible]ぬれて家[illegible]人[illegible]本下[illegible]とふ又ある[illegible]の[illegible]にはこれは[illegible]（[illegible]）[illegible]隣[illegible]に[illegible]を求免し[illegible]之とて[illegible]とされは大[illegible]なる客[illegible]しく[illegible]しのふさ　下略

● 十六むさし

［和名抄］雑藝の類に見えたる八道（やさ）行成（すかり）が今の十六むさしの元といふ事は［安齋随筆］に弁じられしより事様か十六むさしはやさすかりの類なるべけれとやさすかりはいつか絶て十六むさしは別にかくりしものゝ如くにおもはるゝ是は證とすべき事も見えざれば予説のかぎりにて是（まこと）といふにはあらねど推はかりて思ふにやさすかりといふ物は親子なんどいふ物はなく八方へ巷石の切ざる中をふさぐるをもてよりはそれを切らんと制しいづれもはなれつるをもて盤の外へ納るを勝とするものなり［秋夜長物語］に「千人切の荒讃岐（アラサヌキ）なるはさいかもの悪さいぶ八方やぶりの武蔵坊云々」とあるは三井の荒[illegible]にてもとよりは[illegible]名なりしかのやさすかりのむさしにあらで催る名なり八方やぶりといふにて考べし

［守武千句］天文九年吟

前きれゝにあるを思へる事のはなしれにて

附　むさしとさすはとらん雨るなりけり

今の十六むさしのやうにも見えざれば考ふべし。さて寛永の頃よりハ全く今のむ
さし有り【毛吹草】寛永十五年著　俳諧の附意に「親子、扇骨　十六むさし」
とあるにくはしせり

【俳諧鷹筑波集】寛永十五年　西武撰

前　二タ道かくる人のさいかく
附　ちえなぐさむるむさしにはまよふて　正平　定ころちハ今いふ安まなるべし

【同書】

善悪よ二道かけてつまさく人
させるむさしをよつめふさぐる　重時

【夢見草】明暦二年印本　休安撰

取て行ハ十六むさしかな　一武

【玉海集】明暦二年印本

武蔵野の月見るころぞ十六夜　正盛

【砂金袋】明暦三年印本　西武撰

いさよひの月も十六むさしかな　西種

【新続犬筑波集】万治三年季吟撰　寛文七年刊本

前　つゞけさま十六つゝやとりぬらん
附　させるむさしに助言いひけり　保友

【後御金袋】延宝二年

喰物ハ十六むさしも嘉祥かな　作者不知

【西鶴大矢数】延宝八年吟

都につぽてまける鳴鍔　西鶴
夕涼十六むさしそこそあく　同

ガラス使用

是等の白拍なるべし　又近くハ元文寛保の頃印行ありしころ「船本船弁慶」といふされ絵のさうしの末に十六むさしの図あり　親といふ者弁慶を画き子ハ魚尽しありその側へ細字にて「先までハ見きゝしたり十六むさしれ子を　なごみてそれハ目やなくてなくさと見くるし」子ともらのくれしゑびて一興あるんべきを思ひよつて十六むさしのそゞまさとつよこのさせてきのけいりハれな子ハ太に図したるところを抄出さし弁慶ふらうんとうろゝくの計支弁慶も都まるとしてるゝなゞひいるゝぬぞ」といふ事なれハ寛保の頃までハ今のめく絵させし図にて賣ることといへるきなるべし（はむさし けいびき）（今とかくてゑたる牛へ図ハなし）享保十八年の印本豈月撰「俳諧名物鹿子」といふ江戸の名物を集しうちに鱗形屋の懐中将棊。ゆりの仙とよぶ娘ところ顔の春遊　素水　といふ句を載たり　是等より移りて十六むさしも錦絵摺として賣ることゝなりたるなるべし

「五ケ津餘情（ごかのつよせいをとこ）男」元禄十五年印本「えやうちらゝるきさっむさしふちよるとらけしてそれすりかりそもまでもしとらふ事あり十六のむさしめづらし」

「前句附たから船」元禄十六年印本　豈月点

草庵の文庫から出る紙碁船

とあれば紙碁盤ハ元禄よりありし　世に物もそるれど賣にといふ事なれで此うちの好人がてづから作りし物なるべければ証となしがたし　碁盤を紙にて製て賣ひしハ鱗形屋がそめはじめるなりと少かれ

「男調宝記」に「又ハなぐさみごとには。十六目石（ムサシ）。十不足（トヲニタラズ）。百五蔵（ゾウ）の郎等。盗人隠（カクシ）。有哉立（アリヤツダテ）。鳴立。左々立（サヽダテ）。下半打（シモハンウチ）。投壷（トウナゲ）。虎の子渡シ。三十二十のまゝ子だてなといふ事なり」といふことを載たり　是ハ悉く碁石にてする戯なるを此書二版ありて一本には此事なし　二本とも元禄年間の印行なり　此遊戯に今ハ絶たるもあるべし　若（モシ）此目石（ムサシ）がやさしぞりの類にハなくぞや　むさしの事のくはしき人によりてぞ問（トフ）べし

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

縫簿屋の松

縫簿屋の障子および暖簾に三階松をつけたるがところ〳〵にあり　彼職の古老語て曰縫はくのむかしハ吉備大臣入唐の刻ならひきたる事を学ひ給ひ帰朝の後松葉にて針とりてきぬに縫はくしてみせ給ひしに起れり　ゆゑに松をもて縫はくのまなびしといひつたへるなりといへり　此説の是非ハえらしくいへず
按にふるくハ若松をつけたるがいつしか三階松となりしなるべし

〔俳諧犬子集〕（寛永十年重頼撰　同二十年刻正保之年之）
前　門に小松をたつるべくなり
附　のうれんにそめをとさきて縫箔屋　重頼

〔俳諧芝之肴〕（延宝年間印本　江戸住似春撰）
漢和　我ぃ看之　松屋月　静軒
一尺を手きざみに縫箔の雲　似春
（松屋といふを暖簾の松よりいへるならん　又松屋とも云へるなりしら）

〔桃青杉風両吟俳諧〕（出所未考）
前　縫箔に好んで通る瀧の糸　杉風
附　音羽苑の虫の姫君　桃青

〔人倫訓蒙図彙〕（元禄三年印本）「縫物師（ぬひものし）諸の衣裳其外さま〳〵の糸をもて模様をぬいはくとて縫ふいろ〳〵の名あり」暖簾に松をあふぎて印とせしなんといふ事なれば古くより松をもつて看板とせしとは論なし　予おもふに京師の縫屋に柳を染る暖簾をかけたりしとぞ江戸にもある乱　大織冠のうち〔万歳の次第〕（延宝年中の頃の説あり）春の青襖袴（素乱）ハ柳色に染柳を大なるおすり衣の上にハ色よ染松を大なるふせなどしたるなれハ柳も松も古く武臣の模様なりこれ等を知りて縫屋縫箔屋の看板（まぎらはし）とありしにハおよばぬや推考べし
因云右にひきうちひくる〔万歳の次第〕に襖上下の事をいふ條に「さくらぞとほくる事房金を表するなり九つハ九穴の心を表するなり」といふをこえ

（延喜式（十三）春宮式曰　正月六日　騎射射手ノ帯刀十人着小松摺ノ衣ヲ一　猎の摺り正字正スキなり）

なり

雄長老狂歌百首　判詞也足軒　一本ハ天正十七年の奥書アリ

関　ぬひあけふ雲井の庭をそめるハたがかきぬめりがの関なる

判詞去ゝ年薩摩陣の後ハ此後称なまさみねぢんし一首の心

さて承りて　えらも　詞優艶なり誹諧之也

光廣卿職人謌仙（元和寛永の比の作なるべし）

繍士　たる雲をぬひ物ふできん人ハよぶ廣金を紋ふつけてまよ

此筆なる廣金の事なれど未考　似春の自ふ尺をときそふ縫物と

なりもゆゑなりるなるらんかと抄出ておきつるなり

浄瑠璃節のはじめを

上畧さて信長が侍女作るといふ附會の説ハ貞享元禄の頃よりの雑書ふハおほくええされど寛永正保の頃の冊子ふてハいまだ見いでず慶安二年作よしれうけ（梓刻ハ寛文三年なり）ふ浄瑠璃御前の事より起りし事ハ見えたれど作者のなどハ不載　さきにもいふごとく阿通の事を附會せしハ慶安より後也文寳ふ阿通が作ふて信長の侍女といふが誤也

因云十二段のさうし今つたゆるハ正保三年ノ印本又寛文の印本活板もありとぞ印本ハさまざまの異同あり古写本ふてつたはるもの二三本をみるふ大異同ありて更ふ校合あるべし　桜ふゐき十二段のさうしをうるふ今のなるふていふをかりいまのあるべし印本も此ひき出しいうちゐるべれども享禄の頃うつし書の全く傳りしといひもされ称し強て僞書なりといひ破るもあらし　いづれの本も天正以後ノ筆を加へしものとこそえへくぞ

浄瑠璃雑考

十二段の冊子の事　十二段の草紙正保の印本及古写四五本を照し合せつるに意はおほよそ斉しけれど書ざまは悉く異にして校合の筆をくはへ難し是はかたる者の意（こゝろ）にまかせてひきなほしつゝ物するなるべし芭蕉翁の梅絵やえらぶなりに京太郎といふ句は此書の草紙揃の段の詞をとられけるなれ写本には其てつくるものにはあらされは（仙云 るされ）印本には脱したり（寛文の印本も正保と同本也）又友人の蔵書に十六段ありて少しさらしひきられたる段は他本にはみえずてかくさまぐの異本はあれどこも天正前の添削とおぼしく俗書のうちに雅あり是はた原本なるらんそは考へ難し

因云 芭蕉翁の句の事 隨斎諧話 にくはしく見えたり京太郎は二つの物語の絶えたるを歎しより又或人の紀行に和州多武峯の十市郡よし郷のかせおひし京太郎物語今伝はりてあるよしみえたり

浄瑠璃の名の起 よされかけ 二の巻に「浄瑠璃のもといをたづぬるに奥州女たきの長者が娘浄瑠璃御前といひし牛若君のなれそめの事をつくり十二段と名づけふしをつけ語りそめてより初るといへども今は智仁勇の三を弁一の主意とせり」とあり此書全部六巻四巻までは慶安二年の作なり浄瑠璃は十二段のさうしよ始りしといふ事是より古くは未見（奥州は参河の誤歟 奥州へくだるときなれば也）

十二段の作者「織田公ノ夫人之侍女小野御通作之」と黒川道祐ヶ著 雍州府志 八巻にみえたり此書天和二年ノ作是より古くは阿通の作といふ事を未見

浄瑠璃御前の古き事は前にもあげたる 還魂紙料 に記しおけりこゝにいはず偖万治寛文の頃にも小野の於通といふ手かきあり（妙貞尼澤田お吉小野お通寛永比の三能書といへり）今織田家の侍女の書なりとて色紙やうのもの伝ふるは悉く此お通が書しものなり

冨士石　延宝

ガラス使用

又近く俳諧画文匣
なとあるもうみられ事あり日本橋　天一方といふ薬の看板も此
お通ゲ

蠅取蜘

むかし蠅取蜘をもてなぐさみし事あり漢土にも蜘を闘はする戯はなはだ少しうそれとは異なりまづ蠅虎をよく養ひおき小き器にいれ蠅のとまるところへさし向けてちやく放をうかゞひて興じけるなり又二人さし向ひて左右より一時に蠅のとまるところへさしむくるに其蜘の弱きはもとの器へ逃入り強きものはまてくふはさらで蠅のとまるのをまりもひめくりて取を輪をかけるといふとて此戯れ延宝の頃盛に流行し徳の頃まではまれくにありしと或古老の説なりさて蜘を入るゝかく器のそしめの程は竹筒なりしが後は唐木を用ひ蒔絵などするもありといへり（当時これをとり蜘を座敷鷹）といふとぞ西鶴一代男（天和二年著）四巻出羽国最上寒河江といふ所の貧家のことをいふ條に「壁に懸る物とては要こよりそゝもし扇粘箆唐がらし鼻紙ちさとては浅ましき世の暮し何をかはなそをうてゆく年月を送りけるにかと此ぐ今江戸にてはやるとて蠅取蜘を仕入或時は古文真宝の長刀を削云云」といふ事あり足証とすべし

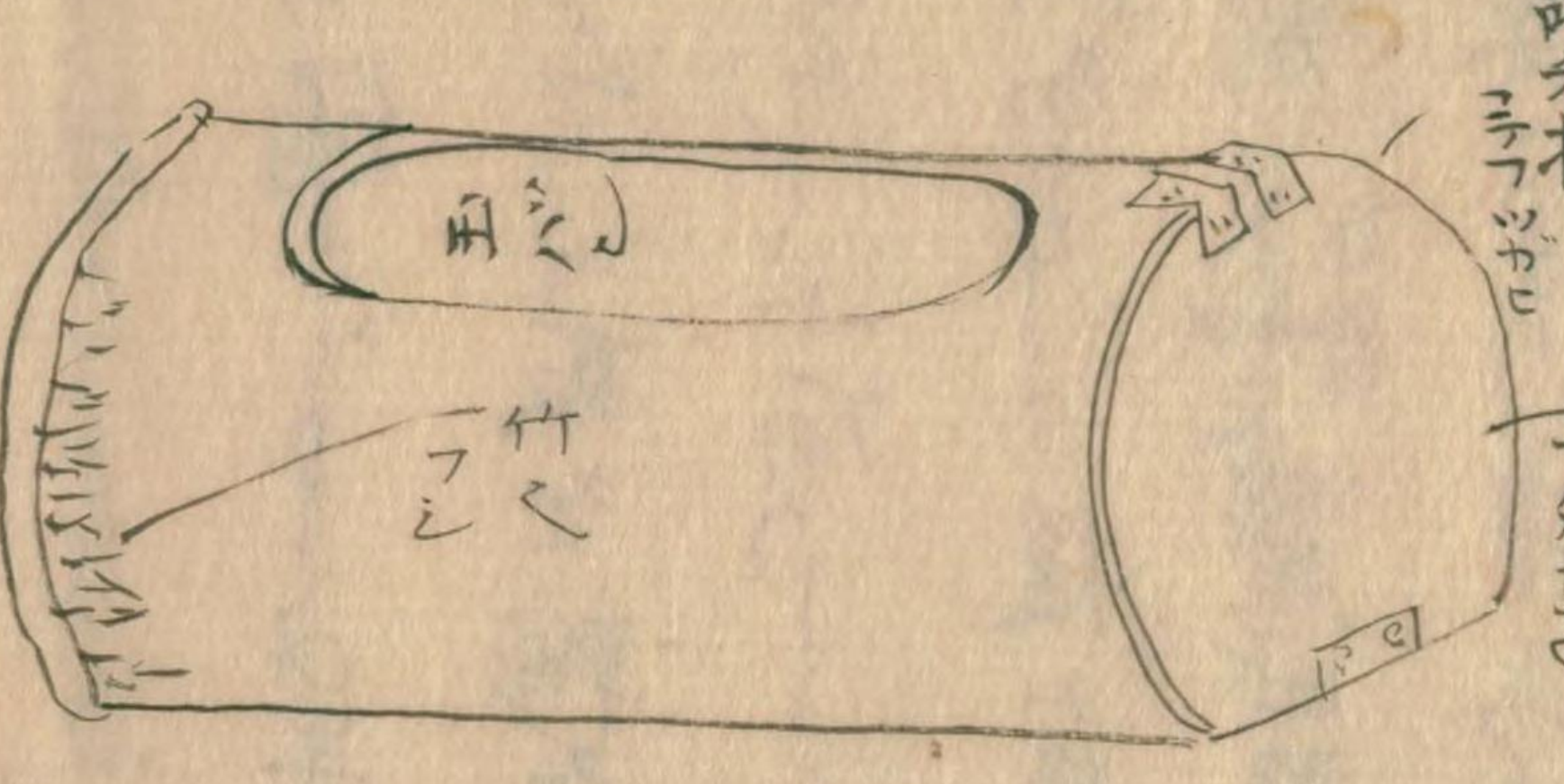
ガラス使用

壁虎（ハエトリグモ）を飼（カフ）古器（こき）二品

「俳諧冨士石」延宝七年印本 江戸住調和撰

笹の一夜
ねぐらや筒の
蠅取蜘
露言

竹筒に養ふを笹の一夜ととりなしの発句なり


用心
竹ノフシ
フタカ子
ミヲワガニ

「花洛六百句」延宝八年印本

前句
召（メス）時に竹の筒より這出
自悦

附句
蜘取蛛に
うそもて置
千之

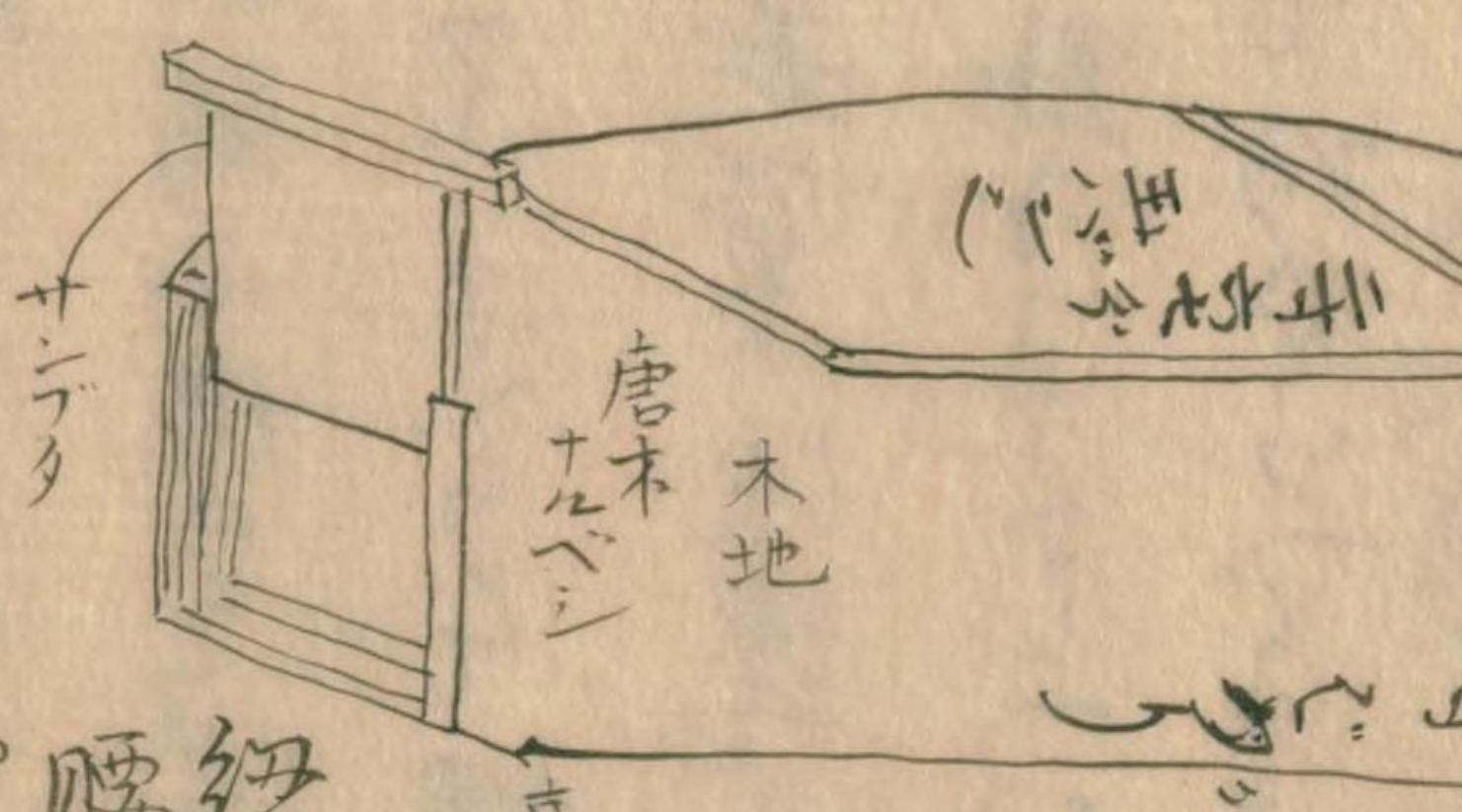
附句も竹の筒より出づるといふに蜘とり蛛とつけたるにて且つは愛するさまをいふなるべし

是等の発句を證とせで又其角撰「されゞ家」の附合に

壁虎に蠅をそゝる 嵐雪

前 の座敷とるかと見ゆればじゝか細くえ縄どそするといへる詞飼いやる（やる）ことし蛛のやうにわもしる

此ころ延宝のころの書留に蠅取蛛の事あれども話とするにるきいまゝらーつ


サンブタ
唐木ナルベシ
木地
高サ三寸ホド

紐をつけて腰へさぐるやうに製しなりとて

曳尾庵蔵

おたま　しやくし　杓子定規

鮭の子をおたま杓子といふは御多賀杓子の訛りなるよしいふ事或人の随筆にあり これらの杓子にてもあるらん何のゆゑにかくは呼しなるらんと思ひをめぐらし（わけ）よく考ふるに多賀の社より出る杓子はまるきところ本にそ製（つくり）しものなれば 蝌蚪（蛄斗）の水中をおよぎまはるその形に似たるよりの名なり 又「犬の冊子」寛永十三年印本 まがれる物のなるべしといふ段に「大工のかねや。蕨のかぎ。ひ物の仕事。なべのつる。おたまじやくしや ぶじにつむの木」とあるべしとせり 又「俳諧玉海集」明暦二年印本 附合の句に

一 前 ゆがみ　わろきも寿命長かれ

附 まづよきは多賀杓子の荒（アラ）けづり　正式

今もゆがみたる杓子なるを知らずしてやがみたる御多賀杓子はつまのふかくもちひられしは是等の物の本を見ざるさきは心得ぬことにてありしなり又或人曰ゆがみたる杓子の古製にてそれがちかく多賀の社に残りしなるべし杓子定規といふ諺もそれにて

ガラス使用

のくは関婆が鬢の如くにては柄は定規ともなるべし　又かゝるにつきていふ鍋蓋
も釜の蓋もいふべし笑ふまじきなりけん　此諺寛永の［毛吹草］にみえ
さり猶ふるくもあるべし

おもふべし人にはえこそ身は杓子なりともひかへめ五器（ごれ）むかふなり

此狂哥今も人口にあり（今俗はおもふべしの五文字を世の中のといふなり）元
和九年著策傳が［醒睡笑］にあればふるき哥なるをおも
ふべしの杓子定規の諺はこれらよりいでたるなり

きせるの竿　継キセル　へんそうキセル

今田舎にてラウ竹の事をきせるの竿といふ所あるこれふるき詞也

［俳諧大子集］寛永十年重頼撰　同廿一年刻（正保元年）

棹（さを）になるそてもろぐん首はきせるの子　貞徳

［俳諧之拔書］萬治二年一本　玄札撰寫本

前　夜も長かりしにら竹のさを

附　月にのむきせるの掃除かこよりて

前　吸物のとろゝあさきに月出て

附　つまるきせるのさをも長き夜　又は江戸の吟く

［至来集］延宝四明今撰

冬　雑　唉かふかれやこらしきせるさを　居卜

又［老婆物語］寛文四年印本「革堂行願寺のつるといふ條に「春霞につゝみて見捨て行縁」

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

その翼にはつ孫とも如に定てゆくとしきせるのさをの屋ぐびをひ孫も通えしたる」とあり

「昼網（ヒルアミ）」延宝四

蒲の穂も煙となりけり

夕月はきせるの棹（さを）のあるめし　玉親

「西山千句」延宝　年間　宇因独吟

前　宗鑑の奥もつまるよの中

附　墨染の袖袂もきせるさをを

「後双六（オクレ）」延宝九年印本　清風撰

「音やとゞろくキセルの棹の川　南部文珠四郎　自元

「日本行脚文集」元禄三年印本　三千風撰

（天和三年吟ノ）旅煙竿楫ぞかゝむわとてきたし　水泡（一笑ノ矣ヘ出ら）

（三年　塩竈はあの外の作）煙（キセルザラ）皿棹や吸忍花鈎寝覚の床　三千風（ニノマキニ入）

さてこゝに煙竿の字をきせるにあてゝうるもあれ誌とみべし又因書に節竿（きせん）とかける
ところあり寛永十五年撰の「毛吹草」に、ラウ竹、とあれバラウ竹といひしがさき乳
前にかいえたる句　寛永の「犬子集」に棹といふ句あれバさをといふがさき乳なる
先（サツ）べし「江戸節参と云」「きせるとる手によと雲となりさそるゝともやるせ
なや（そ）」とこれハちやき享保　年の淨瑠璃なれハさしくおいてひがとりれと煙を横雲（ヨコクモ）
とみるしきせるのさををみぐるまとつゞけるよのにもあるめる

「山の端千句」延宝八年印本

前　さくらで是を作る継竿　宇因

附　莨菪盆（タバコボン）かまちのさき秘住居　似春

きせんとなるハえんえされと前の継竿を継うらの事にて附たるなるべし継き
せるの事のみえたるハ「男色大鑑」（貞享四年印本）「此芝居に入継ハ堀のれうさをまし
鼻毛ハいつのがりをはげ狂言の継煙（きせん）を湯にさしてゐる」又「好色河合佛」（元禄

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

（十四年印本）旅だつ人の事をいふ條に「枕ざんを吸ぎせる伊勢骨折に何くうちいれ

云云」又「今様都をどりうたとき」（貞享元禄のころの小唄本なり）もろこし心中といふ小唄に「ふるき

思ひのうつりあるをいまひとたきともとめれてせつもーごきにつぎつぎきせるさをひつけ

さどころ烟草も云云」杯ふるくもなるれあるべし

焼さきといふ奇羅（きやら）を法料もなくうちくべる事をいふ其煙の出事に似たりと云意なる

べし「一代男」六巻に「次第に香木の煙とぞ後は焼さきにて林陸に酒のみを

さらる事云云」とあるは奇羅にて酒をあたゝめさせるなり小唄にきせるにてさけ

をあひつける事にて奇羅をつぎきせるといひかけたるなり

「水馴棹」（宝永年間印本 不角撰）

文出〃女いへの字形

こちらむくはま（マ）伽羅の焼て焚（せうもくタキ）

強て今きせるへ伽羅のつまみてとわらざるをつんざるといふ譬（こと）めるより出たるは論な

延宝の頃より此詞あり

「俳諧雑巾」（延宝九年 常矩撰）（聾の事をつんぐりといふ語釈下のべらぼうのところにあり）

つんかぎせる甲斐やなからん若煙草（加州小松 宗好 上卅九才）

キセルの事種々あれども同しことゝうるさければうさ杯

てりふへし

「鷹筑波集」（寛永十五年 西武撰）

次第〳〵につまる世の中

たゞこをばのめどさへ思きせる竹　玄康

「道歌紅葉傘」（寛文四年詠） 稲葉岫雲斎詠

わの〳〵と自ふんはおくゆかしきるとあるたはけ

ふるきせる（薫）自註「はまりよふるくとめんとて焼

煙草をすれはふるきあり臭くなるものなり

外良右近蹴鞠 （印行ハなかるべし）

玉滴隠見（延宝中写本）「正保年中に外良右近といひける者蹴鞠に妙を得たる人京大坂に

戸其外を徘徊して　おのれが家職をぞ次にして二六時中鞠にかゝつて飛鳥井家もなで

かゝるで我意に任せし故飛鳥井家より怒（いかり）深くして外良が鞠を江戸へ訴られそれ

バ御僉議成て遂に豆州大嶋へ遠流せられきとぞ」といふ事なり　此事今ハ知人

まれなれとふるき俳諧の句にハおりおり見えしなり

阿蘭陀丸二番船　延宝八

さゝらしと舟の舳板に立より　　柳翁云　古老伝曰遠嶋へおもむくとき船の舳先にて鞠をけたり

身ハかの鞠が蹴る曲鞠　　淡水

江戸大坂通し馬　延宝八年印本

前松に鞠やそこね足の疵　　梅朝

附　外儀なると流されにけり秋の波　　付

此句高足とばかりにて鞠の字なく右近が名もみえざれども此事なるべしとハ句意にて知る

洛陽集（延宝八年印本）

右近ヶ時とえざりけり子庭柳　元好

此句ハ飛梅のごとくかゝるもの柳ハ随へとえざりけるをとがめしにて鞠の字なくてよく意ハ聞えたり

芝肴藻和（延宝年間の印本）

悲ハ秋ヲ配所ノ運ニテ　静軒

外良が花も紅葉もなかりけり　似春

是等ハみな流罪せられしことをいひし句なり此外良が鞠の事ハなくらんとみえたり

きのふハけふの物語（寛永年間の作）「西の洞院外良の西ハ鞠をける侍として かゝりよりそとへつれとして大道へ落るをりふし遠国の侍人あまたつれて通られけるが此人の道具持ち　えさせといふまゝに鑓の石づきにてはたとんといてもて立ちこれを見てれんがけハよみけれ

とも人の国なるとんえて鞠をさしてゐるに殺とよいものをといはれし」此かる合点むなし

ハ右近が流罪せられざるまへなり西の洞院に住し証とすべし

卜養狂哥集

外良君といふ者曲鞠を得たる人なりける所にて真行ゐるに家曲をはりて侍れバ歌鞠とかへて前にも曲をまめと所望せられて詠侍りける

楊貴妃のときにそりまつりけるものなれぞよやげいあまり外良の曲」

これもそのむかし外良が江戸へきたりし訓の狂詠なるべし此集の彫なりけるハ外良が流罪せられ後なれどふるく詠おきしをそれぞれちなみて印行せしものなるべし

又「世間用心記」といふ冊子にも「折から外良が曲鞠図中のなそ遊び大守を此時男ふへのえづきいふ迄」なんといふことを載俳諧の集に鞠といふ句に外良と附るハなほ多くみえたり

俳諧蒙求（延宝三年印本）

前さもしのうゐらうの曲　惟中

八九る文うつもなき鞠の庭　日

これはさきに出し俳諧の集どもよりはさきなれど流行のつゞかれてこゝに記しおきつ「増補むかし〳〵物語」明和元年記「八九十年以前に今外良と云者ありて鞠をきひ人こゝ多き迄にて膏薬を賣しが一代にて絶其後とは鞠の小六之今の小六は二代目也」柳雑云今外良といふの右近ヶ名を継しものなるべし天和三年小浄書せし紫の一本に与作節よ鞠の曲ばかりふられをまるなるべし

因に云「節用集大全」延宝八年印本　止行に「透頂香（注日本ノ俗曰外良ト即チ此薬也）」と注せしごとく外良を薬名とおぼえし者もまじりけるに外良は薬及香具を売頼みを郷（ごう）し者の役名之（漢土にも外良とふ官名あり）「長禄二年以来申次記」正月廿日條「公家、大名、国持、外様之内御供衆、申次衆、番衆、節朔衆、外良、田楽等参之
一 [illegible] 進上 外郎 毎年今日如此也」外良今日進上仕り罷出を申次持参にてお対面ありしさいのきこえにて外良進上とも入てそと御同にかゝる様にて之迄」又同書十二月廿七日の條にも「御薬　きうちん香五嚢（進上）外良　毎年今日如此也」とあり又「殿中申次記」永正四年三月七日條「御薬色々外良進上之（外良へ御太刀申出遣さる　申次之御役也）」「同書」六月二日條にも「薫衣香　十袋（例年 御太刀ヲ下外良）」此わらもところ〳〵に外良が事あれども長禄の記よりなりし事なるべくもとしつ「年中定例記」にも正月七日の條にあり此書は之る室町家の古記也

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

隆達か小歌

「堺鑑」（天和三年著）曰高三（タカサブ）隆達元（モト）ハ日蓮宗の僧當津顕本寺の寺内に住故ありて還俗し高三氏の家に往て薬種を商ふ事を継て小歌の節を一流謳出（ウタヒダシ）てより世俗隆達流とて謳（ウタヒ）賞翫（モテアソブ）とええたり當津とハ泉州堺をいふなり又「攝陽群談」に顕本寺の條下にも此事を載たりちかくハ治涼の「世事談」新見氏の「むかし〳〵物語」にも彼か事を載たりさて今傳ふる隆達か自書るといふ小歌本あり謳曲（ウタヒ）のめく章（シヤウ）をさしたるもの也是ハ門人に与へしものとおほしく奥に隆叔隆達として慶長元和なんどの年号ありここに

朱「浮世物語」「すき者に紹鴎小歌に隆達」是ハ堺の者を云ふ事まアリ

本を合せみるに大同小異なり五ツ六ツをこゝにかく

「吹よ春風ふく松ハ山居のさびしきに（山と歌ハ外出ニ早歌とあり）

「豊後やさつまの殿達ちかし一夜二夜とよばれそめていまハ舟かゝるをせうぞうしのや

「梅ハにほひよこだちハいらぬ人ハ心よ姿ハいらぬ

「吉原十寄總まくり」（天和年間印本ト寛文三年といふハ誤）

司かハり〆あつお君ゟこめとて枕をとゝけそるける
枕又いかもあや　とあるも盲目がひき　ありゝうちやなく

ひんき心ゟ枕をなけそるけそ枕ふとがハまもなのふし
花見ゆくハ吉野へおもれの吉野の花ハ今がさかりぢや
帯をやりてハえるの〻の帯をてひるんをやりやる帯がゑるのしるすゝハそ
あるくのそるも果なのし
ほるの浮世の家の今めハざくれるすり次第よめ身ハるすゝゑんまの

「若葉合」（元禄二年）其角亭ニ影にて
前　夕のうに髪か　そへて遊ぶり　横几
附　枕てこく枕　谷なき　13
とゝなるも比　ゆおぞり　の句く

それ衣を倍え寝るゝとてふるゝし
「俳諧金臺録」来川撰（享保十九年印本）
ハ戦の塩気を絶ちんころ　如皐
傾さにまき寝のしもうられて　駆立
往俗ふそで寝まきもからられさて　とふ見

又「うるの胸のさらし」（古印本年号なし　明暦二年　寛文四年共ニ再刻）「こゝハいづの事なるふ慶長九年の夏のすゑ
云当世をゆりわるゝをろゞとかぐしくてぎんじさまひらハ君が代ハ千代よやち
よまてうさまうていそわとるりて苔のむさまで」といふ事なるを前をおとぞりひきまして
隆達節よう〻つるをふれそれゟ今世名るふ慶長の頃よりもつてふ流行しるべし
み「隆達」小歌をきし絵入をゑんしぞれも節章をさしてありし寛文の「書目録」にもろ
その小うた一冊となれハ印本もはやしるすゝんうまへ
又ある人の説ニ寛文延宝の頃かこゝろそれ　菅笠節といふ彼隆達節なりとしる

さて其小唄ハ「糸竹初心集」（寛文四年印本）もそけ笠ぶし　やられ菅笠ゑあるがきれてさらふふ
きもせぬで捨もせぬで　まちこぐへよまてゐる頃のそゆうぶしを

「行脚文集」（元禄三年印本）三千風撰
菅笠節なんきやなの袖姿月ふゆり　幽問

是天和三年の蔵目なり行脚をなんぎやなとひきるハゝの小唄の節なるべしされらふ隆達の
名ハきえされども英一蝶ゟ朝妻船の賛ふ「隆達がやふし菅笠ふあ儲めうつゞ長く傳
り然」となれハ老人の語のかく是隆達節也やなふん俳諧の集ども小なまえゑえされバその二
三ッをたゞふ按出ス

「清十郎追善奴俳諧」（古寫本あり）定興判　作者可徳
前　小六こゝるも今ハるきなし
附　ゆるゝつといふづくふふがそゆりむ
判引　小六がころぞ家となゆやされバゆるゝころがそゆりさる
変ハるゝようかつくまなり

【洗濯物】（寛文之　一雪撰）

雨をふくみて龍ふる節の田植哉　長重

【俳諧芝肴】（延宝年月印本　似春撰）

（わかれの）花ハ根ニ利休和尚ののこまでく

句　立（たちつ）立のかな今の鶯

朱【立志歳旦帳】（延宝四年丙辰）

思ふ辰の年に小家やくさひ初　市村

【物種集】（延宝之　西鶴撰）

堺を出て西海の浪

〔思ふさへ家の宝をあげましよ　保友

【うらら森】（宝永頃不角撰）

如何に仰せそろん隆達が古今流　言海

【五吟我集】（慶安三年印本　未得）序「さゞれ石のいはほとなるまで苔のむすめ子どもまでも詠を吟じつくば山の七ツ石にかけてひゞきをとりて云ひつゝ詠みくすりかされどものこととぞきかれるかな（ぞ）」

隆達が事ハ其角が【蕉尾琴】沾涼が【世事談】もみえたり又或人の【雑記】に「大内へ召て小歌を作らけられし高三隆達の内にも小歌の声ありければ隆達がよくそろおかせ紙風（扇）をあげよ今の小歌の始なるやとぞ」と云事を載たり

此雑記ハ寛保年間までちかきものなれど古き事を書き載ざる事記なれば此小歌をその創作ゆかりとふは附會の説もせよ大旨ぬきれしとありるべし

ガラス使用

子の日の燈心

甲子日に燈心を買ざるものなしその家富榮ゆるといふ事心き諺に知られと是大黒へ
福を祈より出し事なるべしそのゆゑに此日燈心の市をたてゝ棚をかざる所なり
又賣にも来れり俳諧の句にハ子燈心なんといひて中むかしより多くみえたり

【季吟廿會集】寛文四年印本

前句　どうゞどん〳〵とまちや阿らさん　友光

付句　甲子紙そりに幸福まつりに　季吟

【落花集】寛文十二以仙撰

用るや虎のおもらる子灯心　如貞

【古糸屑】延宝之

まつりにも揃ふ油や子燈心　良賢

【花洛六百句】延宝八年印本

ガラス使用

句
灯心賣の戀の乱緒　千之

所
吉野川子の眼しと流行　自悦

東日記（延宝九年印本　言水在江戸中撰）

灯心賣さら手ささゝの初根芹　無溢
（此句ハ芹の句なれと灯心賣といふ　ふけるふんとをあてるべし）

俳諧雜巾（延宝九年　常矩撰）

子祭ハそうしとをしてわうらん色　順也　皆又風葉ニの入

布の馬尾も任しぬ子をしき　作者不知

子燈心袖こそ波をちきりけり　如生

子燈心たゞ面影のつくも髪　重以

空林風葉（天和三　自悦撰）

祭ゝ子蠅の棒あり子燈心　忠辰

子燈心ハ判をまへて帰りけり　春澄

續有礒海（元禄十一年　印本浪花撰）

んこ賣ハ撰屑ひらふ稲の日ろ子　浪化

銭龍賦（寶永二年印本　百里撰）

十二支ノウチ
子　世の音も細し都の子燈心　甫盛

俳諧職人尽（延享二年　寥和撰）

子燈心片荷ハ太鼓皮買ろ　寥和

是等ふるく見らし証とすべし（以下ハそれとも知るとするれバ　印本のまゝハそぶくべし）

和名抄　燈心　度字之美そうえんといふ却て俗なる事ハ正章が**かさゝぎ**にも有り和名抄ニ燈心音訛也となり頃ゝときよりの訛なれハふるきよりてまちえことゝふつき也

伊勢の興望都

儒云
右（カヨフテ）

与史起ハ伊勢の産七目人の卜者なり与或ハ右（に作ル）延寶の頃よりの俳諧にきこえたれハ寛文の頃より世に流行し者哉

［江戸三吟］（延寶五年印本）

前　心耳や余所にはやしき荻の声　信徳

附　難波の芦ハ伊勢のよもいち　桃青

［江戸廣小路］（延寶六年不卜撰）

声万歳にも一が日御代の春　杉風

［江戸弁慶］（言水撰　延宝八年印本　十ルベニ）

よと一も寢をとらとんり小夜の鐘　言花

［西鶴二代男］（貞享元年印本）三の巻に曰「神風や伊勢の右守起とて（[illegible]）座頭五音の占を以て萬の事を見通しぞかし云云」是等記とむべし人の五音を以てうらなふといふに会

仙果云上方とハ大ふんをまんとえり［百人一笑］にも志らかまつけてあり

せきれハ前の發句もよく聞ゆるなり「役者大鑑合類」（元禄六年印本）荒木与次兵衛といふかぶき役者を評せる詞に 座頭の語を滑めでせて杖をさぐる手もとも市と竹杖を捨てそこそ（ぞ）みげますそ（ぞ）と語り出ひの事ハえぇざれど兄もとの与史郎が事をいふなるべし

毛雪踏

今小児の雪踏に毛のつきたるの皮を表へつけたるがありむかしハかとも見る　そきたる物なれ もと寒さを防ぐ料（タメ）なる由ゑ俳諧にハ冬の季ともせり

「俳諧後撰（大成）」（延宝九年印本 清風撰）

冬部　毛雪踏や将てゆるゆ地の面　重徳

「俳諧雑巾」（延宝九年印本 常矩撰）

冬雑　志もく杖大木にのぼる毛尾切有（ケとも切り）　和允

竹生島の謡曲に緑樹影沈んで魚木にのぼるけしき（けしきあり）ありといふを転し毛雪踏を撞木杖にさしよるを大木に登るを利にせし句なり 又「好色万金丹」（元禄七年印本）町奴の男達といふ者の事をいふ條に「釘抜（クギヌキ）の真鍮紋つけたる駒の中形小紋だてのうすぎやくも熊（ぐゐのうまき）の毛雪踏はれさうハ云迄となりをえれハよき人のそきうる物にハあるべからず 又西鶴の「二代男」

貞享元 二ノ廿二ウ

後餘花千二百句　享保六

五町ともなそゝ足本下されも　文東

去者なりと兼て毛雪踏　柯木（住吉名本の宮 欽明天皇の舊跡今なる足寺く）

當世曾古佐賀志（明和七年印本洛陽西 壬生村住人醉石翁著）一の巻　中より下の親ハ五六才になれハ兎角

強イ美を好み紺のくろ足袋毛雪踏をそろせちひさき編笠にかひ杉ろうのめせき

笠によろく御縄くるやうみ細をつけ中長夏ハ紅絞りの下帯冬ハ大森度暖の底中羽

織をしきせるなど只異風なる事をよろこふ

きしなのひのる　川柳点　火燵にて毛雪踏をそく西かさ

やくといふ俗語　ちんぶり 火事　二焼 やきもち

ヤクといひ賻をといふ花街にていひ初し流言なるべし今手を焼とうふ俗語

も是より轉したる詞也

江山子筆記　写本寛文十年庚戌三月ト奥書あり

吉原火事　吉原ハ焼野の跡辺と数にもり世をすきかましくつと出し

傾城常にくろとがかけくといのるんふりもすふころん

ゆけいぶませなり　按に元文三年印本洞房語園中の巻きてう物語に頃ハ延宝六年

吉原類焼の砌にて家作もいまだ出来不揃云とあり吉原今の地に移りて類焼の初メ

なり江山子筆記ハ是より九年程前なれハ明暦三年類焼の剋の落首にて此言（俗の）原吉

原の頃よりなるし證ともべし寛文二年の印本江戸名所記吉原の事をいふ條に傾

城ゝ思ひつかれんとひそかにさくる程にされかなえそでかれにかくしこゝよりるさればが

智慮才覚も藝能も美男も心のかぢぶてもらず毛傾城のためにが焼草となるなり

（仙之 古今物名 かきこつみて うちやく よりそうか）
（火ヲオコスト ハタラカモオキ ミスルコトヽ）

之迄焼草とハさま〳〵の種といふ事なり延宝二年印本[吉原つれ〳〵草失墜]に女郎ハかさち
心ざまのよどれさらんこそ人のめでらるべけれものゝちりひさる中にかうぞはいさゝらく書きて
おかしう思えてはうぞむらそまれなれ之同書の注 やきぬとハいつくる事なりせつこすん
ぞふにやくとハかきに入といふ意なりしとあり炭火の事をかきとふそれにもをいれることを得べし（ろき）
入にかよもせよる隠語也 （炭火のるをかきとふ事いろ〳〵ゆゑ〳〵未考 宗因が句なふてらかき一行りつ云燦字）此奴同巻とふ冊子今（朱ヤ）しく
そらぞ書きよハさますよなり今けいせいにのあるよのいろどりにもやくよふを略るや
なふん又[同書]にこやきのく法をきゆるときいるくそりつ（ハ）のけよりそちさせてのこ之迄
といふ段の注に「こやき野花のお日此里をこやきのといふ浅草にて死をやきそれ
にて死人をやきさんやにて女郎をひてをやくゆゑこやき地といふことをきていふなる
人もとけまよふ此こやきの花のいろかに」といふ文なり此花ともさしも今俗に
[好色智恵袋]（元禄五 京本）二の巻に「むかし江戸の吉原を二焼野といふ事ハそれはる事なり
ふるき草紙にみえれハ又いふもうるし」とはりふるきさらしとふ花の名をいふ見失墜山字りなれ

又同[失墜]に「かのつらふやりてふる婆ものなれと之迄」といふ段の注に「やりてといふ
ものハたゞらんかうをいへり女らうのつきそひてをてきに入身をさとすゝめなりて
とりふりひてをうけ一すもはとへひらせてさき」とはかをやりてといふなりまん
きやうしやもまた人をやきてさきとるもあるのそれぞのおんなうをかくしりなそ
なるなり」又[古郷帰江戸咄]（貞享三年印本）吉原の事をいふ條に「今の夜こゝと申ひて
ゆゑかしとふそばい宿やのかゝも揚んざうふなりおんなうが詞もやさしく字えきらう
はいさつもんやらくるに口ぶりれいもや擽ふるなりと思ひ」之迄とはうふてし
はらぷてゐるへし 此文章ハ（江戸）名所記よりいひて書きのせて名所記にハ「やさや
のかゝも揚んざうに遺もとぞやさしく」とあり又元禄年間印本好色伊勢物語
揚屋一名いくのきらし之の巻の注に「さじや好色とあぶ山に火車とありひのくるまとし
まりいふハのせてやいふるとも揚屋なるべし」とあり此ゑのぶ山といふ冊子も偽りなれで
のせるとハおぼてるといふ俗語とかゝるなれども此とはよくかゝるなり又花車と書て

ガラス使用

花になれる意なりと書したりしもあれどやくと云語釈にかなひがたしされば其のむかしは
あながちいへども　今りんきする事をやきもちといふ遊女より出たる詞にて
ござすてとハもちハ座持なりもちにてとりつくろふわざのたるればござすて
とりつくろふ事をいふ元文年中の書にもあるなり源氏あづまやの巻のやうのころ
れてといふ詞を誤として家持のすくるゝやうにいふ事にてやかましくとみいへり
にてなりすぎたる者なるらん　やきもちをやくといふ下のやくの詞は後にそへたるなり
べし

再按、寛永元年著慶安二年印本「目覚し草」に曰「俗に言ふつい　松も智ある君のむさぼりは火に気をうつる時ハ捨かゝるなる者ハ終に捨る事なれハもちやくといへり」此説によれバもちを焼くといふ詞ハ火性より出て愚なる者の事なりそれより轉して　ねたむ事をいふ也可考

「七十一番職人歌合」　塩賣

思ひ初るむねのやけての煙りなびきもひらずせめてとゞや
是ハ胸のもゆるをやきてといひかけてさきにいふ意とハ異なるべけれど寛文之年印本「剥野老」といふかぶきの少年の評書の序に　つけざしの盃の情にほの松山を恨ハこゝそこもとちきるぞむべなる哉ハなれども伽羅の烟の中焼てにほふてむねのわむねともにこがれ云〻と又同書山中山之郎といふ少人を評せる詞に「白ハぶらりんなるなり口中清しらちつけより人をやくかたと上手なり」
明暦年間印本「野良虫」に「ちゝの國なのり花草こがるといふ者のいきほひにてそれ〳〵はやきてをくらせられバかのへ〳〵きんのずんなる後からかり　ゐなかさがりな者にハほゐをかせんとて一分小判をそらしてくれハ云〻これ也良みをやかさる事をいふ也　三ノ七オ

都風俗鑑　二ノ十オ

延宝四年「西鶴手鑑」　火をとりし風のまをやく花もうる　紀州和歌山　定時

（四冊の好色むらさき川　二之折　三ノ三ウ　三ノ十四ウ）

新玉海（貞享中　貞恕才）一度手をやきても出る蕨かな　徳窓

比翼集（元禄十三　不角才）影折られ手を燒んぬの花　正勝

色道大鏡（延宝戊午）一　やきて　下略してやくとぞいひもふ　或人（云おかきといり）といふ縁にてやきてといふとのへり是本説なるべきや如何　おきといふ字ハ熾とも燒とも書此二字ともに　おきとよめり　伊勢物語百十五段

おきのゐて身をやくよりもかなしきはみやこしまべの別れなりけり

此哥ハ古今集にも小町が哥とて入たり　此哥ハ炭火を身に近てやくよりも別のかなしきといふ心也　当道のやきでといふハ人のよろこぶやうにいひ（言）なしてわ[illegible]きこゆれど今ハそれを用ひず　一　ねぶやき　餅ふくるゝぐしまやきてといふ心

閑書異見百首のうち

客ハとてすゐの身みそもやかるゝと云ひなのゝもやくとよろこぶ

寛永十五　鷹筑波集

山守して水の遠いふ

もえ出る蕨を折て手をやくる　浄久

玉海集（明暦二年　貞室才）（慶安元年なるべし）

子の年の元日よ

佐保姫を侍女にもおめがきこえ　喜雲

そあとなぬる宿のふきこえひ　貞徳

「小嵐をふくゝふ小猫なめとて

續山の井（寛文七　湖春才）

よめが君も捨て妻乞男猫かな　（江戸）貞宣

よめが君

俳諧五節句　元禄元年印本（内田順也著）に「よめが君。三ヶ日の鼠をいふ也」とはり三ヶ日はいみていはざる詞なりそれにかはらせし詞とて名をよびかへたりふ也「雨を、ふきがり」「寝るを、いねつむ」、「起るを」いねあぐる」と云類にて鼠をよめが君といふ

かのいはざる詞なる由ゑ俳諧にて初春の季を持たり

崑山集　慶安四年印本（良徳抄）

よめが君餅をそりふい初かぶり　貞徳

此句初春に見えそう保易る徳りの詞をとりて白髪はみえしでにかぶるは喰ふなり鼠の喰ふをも出かけるといふも出に喰の意

俳諧合　明暦二年印本祇園奉納也（判者季吟）

むさ山の鼠茸もやよめが君　則常

荒の茸物の白るれどむさ山とふかはらせし詞のよめが君をかりもちひたり

落穂集　明暦二（休安抄）

一つるまのつふるなりのをうしさ
陽炎み銭をとれば鼠のよめ入に　良任

仙米

華陀物語　宝永

いまへいねすまのよあいりとて果粋の老と世よいわれこし

「新續犬筑波集」寛文　年刊　万治三年季吟撰

え方に向てよろこびやする

よめがきみそしらぬ瓶に子をまうけ　信成

「案内者」寛文二年印本　中川喜雲著　初春の夜をいふ條に「礼者の進物を年玉ともてそやさるるは実に光る紙がきさする骨させる扇もなり東海よりくる春のおとつ蒼るれや海藻をさてぶどと名づけ蛤などむかへる扇をよめが君の貝かみひかとさてぶれ云」是等も証とすべし

「玉海追加」寛文七年　貞室撰

年男ひくらひろぐるよめが君　宗春尼

「新玉海集」貞恕撰　貞享年間印本

追られる妻よぶ猫とよめが君　勝宣

是も猫の恋の句にて初春にはあらざれど句のつゞきがらよめが君といひたる様にきこえさる日なかよろしくいへり

「あんつく」元禄戊寅　許六

明る夜もほのかに嬉しよめが君　其角　又五元集拾遺に入

（あんつくに嵐雪とする是なれど雑の部旦といひもよろし）

除夜の吟なり前にもいふ如く昔よりかもきものにいひならはしきの雲をかく作りすゝにすゝめといふ狂句を轉してすゝに鼠といふが其角が口つきなり此句も初鶏と共に初春を捨て嵐と新しくんくなるべし考ふに悪らし嵐なれとことはりとあるするに同じて元日よりさるらんといへりかのかとに詞は夜の為に鳴と嵐のをくとみのかにきるとを両方へかけてつくるがよし

去来が「湖東問答」といふ冊子に嫁が君は除夜に人の家の柱に燈をかゝげて夜もとどまる星をまつるといへるにふさはる説なり去来が名をかりて後人の偽作なることを論ずし嫁か君といふ初春のかざし詞とふを定めざれば此句も季なし古名にも多く附会の事どもを記しく俳書あり

「山の井」一ノ五六

都て正月は世のつまにかゝへるものいそなかき嵐をよめがきみとよびならはす事をたはごとなりつけ初夕の狐つなきつそもいねつむいねをさむるとやうにいひつけるとなまをくゐるにもうるさくれいなるん

ガラス使用

○（朱書之）奥州にて今鼠のことをまものといふ

○枕のさうし（三ノ廿オ）よるのとの けふるもの ひけらち 男推つくらふ

續桑岡集 宝暦八年印本 平砂撰

冬の部

もち花の鼠となりけりよめが君　魚府

（よめが君を鼠と見るはよし　その證なれば、あるはよめが君を鼠と見るはよし）

（もちばなは祝をいへねばその事なるをこれはよめが君とひかれて祝意のかたなるなり）

さてふるく鼠をよめのこ（子丑）家妻のといひそれを祝ひのかたの詞ともなし

なるべし　よめのこよめがきミと呼べるなり

和泉式部集 類從本 二百七十五下ノ四左

定頼卿集

尼うへの蓮のさぐを鼠のくひさりけるを

よめのこのそちものむそとくひつるはつらしるそんとやおもふらん

これも知るごとく和泉式部長保寛弘頃の要なり　定頼卿は寛徳のはじめ

○つや有ちに沒し　まではよめの子といひしはいとふるきことなるをしるべし

小六の宮　附　小六節　三條小六

紫の一本 祭礼の条に 氷川大明神赤坂一ツ木村六月十五日隔年（中略）赤坂氷川大明神は一ツ木村に小六といひし馬にのりの男也京大坂まで追廻り歩行し。小六生れは西の者なれども寛永に武蔵地に住しと小唄にまでうたはれし。小六は此小六氷川大明神を信ずること不浅故に大明神を此所に祝ひ奉るとあれ。小六死して此宮に葬しより小六の宮といひ傳ふ（此書天和二年撰也）

古郷帰江戸咄（貞享三年印本）六の巻氷川明神の条に「世に小六の宮といひ伝へしは慶長の頃関東に小六とて伊達男なる馬追ありけるが此赤坂に住けり。小唄舞の上手にてきく者前後の事を忘れてうかれけるとや。扨かれが所持せる馬むち杖扇等まで残せしとはいひもちけて名をこのさまもてはやしけるよし。生国は西国方の者と呼ばれける此故にかれが事を作りたる小唄に小六生れは西のものそだちは関東の小六もうそうたりしを小六節とてもて残せしか二十年程で中絶して元禄までさえうたひて日本にもはやりし由なれどもいやしき者なれども今よりぞ其名を祈りし此小六は氷川明神を深

くわんじて家富栄えたるにつけて折々宮も大破なりければ二間四面に造立ありけり

小六が建（タテ）たる宮とて小六の宮といひつたへたるとかや」といふ事を載たり　又「西鶴大鑑」（貞享四年印本）三の巻に目黒より庚申道の事を云ふ條に「小六の宮のかたはら道」とみえたり

「夕顔利生草」（宝永元年印本）にも「水無月中の五日は小六の宮の祭礼とて造るなどいふ

事なり

「虚栗集」（天和三年印本　其角撰）　前句　地女の袂くだき涼の帯　翠紅

附句　小六に祈（イノ）る郎（トノゴ）よかれよ　才丸

是小六の宮を祈るといふ句なりさて小六節の小唄は

「糸竹初心集」（寛文四年印本）〽小六ついたる竹の杖。ふしもとは尺八中は笛。小六すゑは女郎衆の。それ笑ふにやならんさて。筆のぢくぢくよ小六

「淋敷座之慰」（延宝四年写本）　昔小六ふし　小六ついたる竹のつゑ木は尺八

中が笛こうハ　末さんさんさ女郎衆の筆の軸小六

「松の葉」（元禄十六年印本）三の巻に載る。ころくといふ小唄　〽小六がつきやつひたる

竹の杖小六もとは尺八中はひちりきちりちり笛小六するめぢや一筆啓上

せしめ候先（セン）度（ド）は御状をとられしかつひへんじもつかまつらいでさて〳〵

ふさにも思ひまゐらせ候べくいへども　まて筆のぢく竹に小六

前の「江戸咄」に小六節は三度をゆしとみえたればそのころびくに唱哥もかはるなるべし

さて小六生れは西の者となんどいふ事はうかゞはざれど俳諧の句に太き小唄をとれる

ものに出す

「清十郎追善奴俳諧」（寛文二年なるべし　作者可徳　判者宗興ともに江戸の人なり）

前句　それもいはず吹く尺八や止めらん

附句　小六ころりと今はなきなと

み　ころころとんづくわかあり出

判の詞　小六がなにそことなりやされば今はとながなるといふ家入たるまゝかはつくさり

柳翁云やさうしろが事前ニ見えたりやさうといふハ慶長元和の頃を盛にて　より此

向の句も出きたり小六ハ慶長より前の人也

二番船　延宝八年印本　雑俳の宗因撰

前句　一村雨の通る上へハ　宗因

附句　君ひとりふかとゞきたる　あふ小六　同

柳翁云是ハ延宝二年ノ吟也

若竹やもとハ尺八すゑハ風　蝶々子

竹杖のよハろんのりと吹ふけり

（小六ぶしてるかげまでけゆる　遠舟

江戸廣小路　延宝六年印本　不卜撰

物種集　延宝六　西鶴判

西鶴大矢数　延宝八年吟　九年印本

前句　普請奉行小六突する竹の杖　西鶴

附句　尺八つくてわざあげくるなり　同

ひさご　元禄三年印本

前句　移り香の羽織を肩にひきかけて　珍碩

附句　小六うたひし市の　同

朱　名物冊子　加入見合

因にいふ手綱染の事を小六染といふ者今もとあり始メハ嵐雛助といふかぶき者初名を小六といひしが彼馬追の小六と称名の同じきとなる縁よりえらんで芝居にて手綱染を着たりしよりの名也其市松形の類なり今ハ近きことなり

中古風俗志　明和元年記「流行染物といふ事も上古ハ吉岡染兼房染の類なり其後又小左文庫子十二條染それより小六染市松染亀蔵小紋なとは何れも歌舞妓役者の着し出し染のその名によりて名がつけたる染色なり」

又云元禄の頃三條小六と云人はやらして鞠の小六とよび着なり曲鞠に妙を得ならひハ延をもちひそして杖にて打杖に留メこれをみんとて集る人に香具を売り又近年も彼が名を継ぎの浅草観音の境内へ出てまく人の知るところなり

三番鶏　元禄十五年吟　宝暦九年刻

雲雀笛小六が杖ハ放下かな　貞佐初号　了我

是三保小六が事をいひしなり馬追の小六と混（混交）じたるべし

さる屋のやうじ

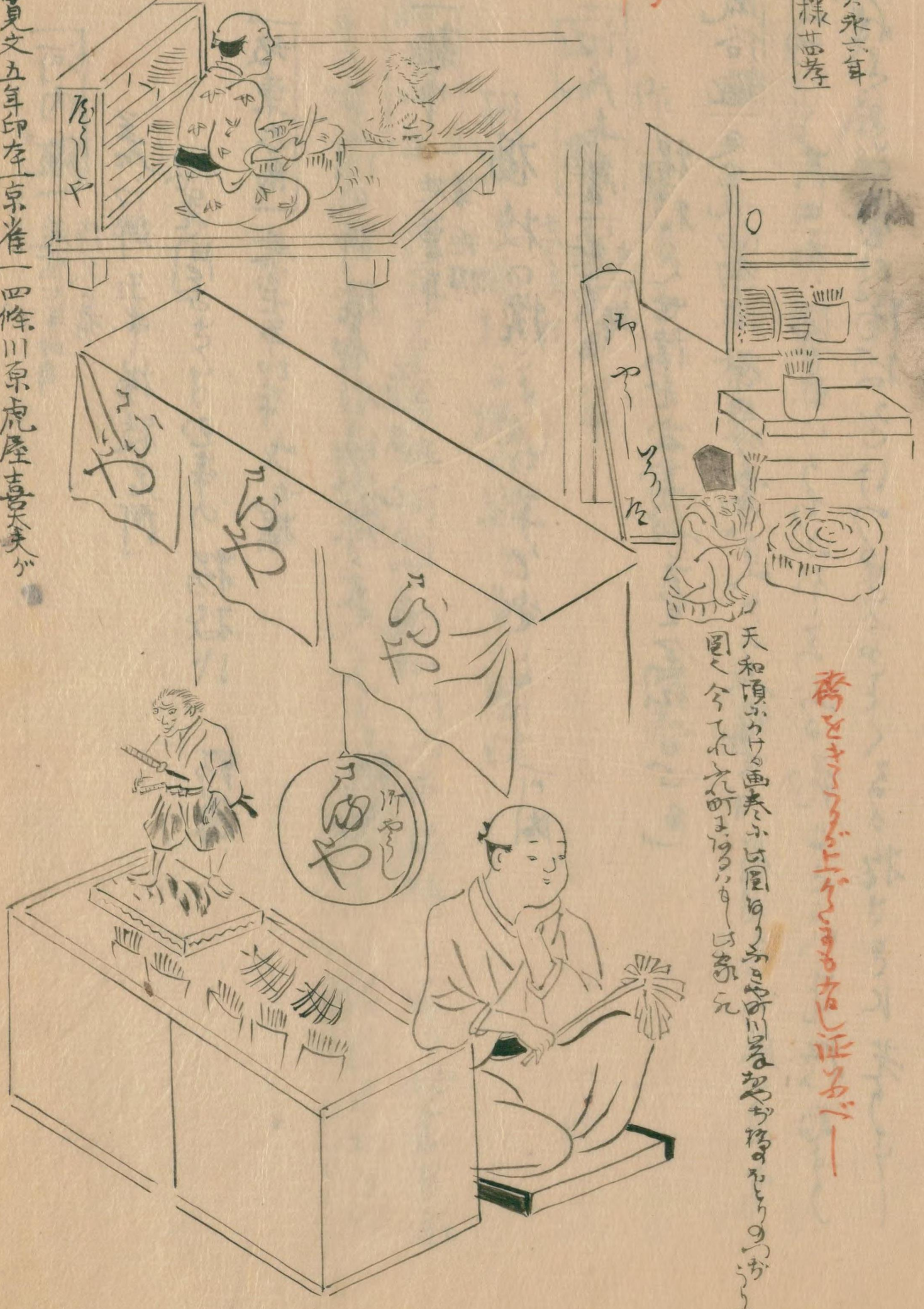
楊枝屋の看版に猿をいだきし処今も江戸にては元町浅草観音境内等に有さて此事ふるくみえたり「東海道名所記」（万治年間印本）六の巻に「粟田口といふ所の右の方に猿屋の楊枝とて名物なり楊枝はもと柳なれどもてさるは河内の国玉越の里そ楊柳（ヤナギ）はいかりてやはらかなる此猿屋は玉越の里のものとかや」となり猿屋といひしより猿の看板をいだしけれ又下に見えたるごとく猿は歯の白きものなるゆゑ猿を看板にいだしより猿屋といひけれ又延宝四年印本「増補道中記」粟田口猿屋の楊枝とて名物のやうじなり楊枝はもと楊（ヤナギ）なれども河内國玉のこしの里はやなぎの名所にて他所よりもとはやはらかなるやなぎ也此猿屋はもと玉のこしの里の者とかやそれゆゑはじめはかりの名をとり侍るとかや今は僅なる侍らん」とあり此事を載たり楊枝なとりつくりて玉越の楊は今は僅なりしといふ扨又楊枝屋の此所にあまたありしも今は京極の僅なりしといふも分明

ゐのよふて「雍州府志」（貞享元年印本）七の巻に「楊枝所々に之を鬻る其うち下粟田口猿屋を本とす百年或ハ九十年桐箱并ニ紙袋ニ入れ遠方ニ贈て今四條京極の西より祇園町ニ至て特ニ多し 其木ハ河内国玉串村より出るものを良（ヨシ）とす豊前国立石の楊枝木絶品とす 今京師ニ在り立石村ハ堂上萩原家の領地なり」玉串玉栽いつれが是ならん考ふべし「男色大鑑」（貞享四年印本）「猿ニ袴きせて看板出し東橋筋ニ根本浮世楊枝とて芝居の若衆の定紋をうちつけゐるよしニ云「人倫訓蒙図彙」（元禄三年印本）「楊枝師 粟田口猿屋ハ玉串村の者なりしよりて其名高し加賀国越前よりいづるハこふなるものなり猿屋やうじといふ 之れハ唐の猿ハ歯ゆるく顔向し 日本の猿ハ歯白きゆゑニ楊枝の看板とす」

「難波風」（延宝三年印本）

当社ニかいていのるを紙　定俊

かくことて山王猿屋ゝ楊枝待り　次末



やうじや
御やうし さるや
さるや
さるや
さるや
所やうし さるや

まひのさしえなしありといふべし
江戸名物鹿子のるちなべし

寛永六年「今様廿四孝」

寛文五年印本「京雀」四條川原虎屋喜太夫がアヤツリの側ニ此図あり

天和頃ニかける画巻ニ此図有り ふきや町川岸あやつり楊枝見とりのつぎうらの図く今てれ元町まなるハもし此家元

袴ときてつるゞ上ゲてをるも古し証なるべし

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

河内鑑（延宝七年印本　浄久著）

若江郷　玉串楊枝名所

彼岸團子さす玉串の楊枝かな　野庵

坂東太郎（延宝七年印本　才丸撰）

門の柳猿屋木侍ふ詠ゝ子（原本虫ばみのやぶれぞ）　鉄丸

雑巾（延宝九年　常矩撰）

楊枝の猿こよひの芋を突とれり　可因

江戸弁慶（延宝八年　言水撰）

楊枝見世猿ぞなよぶ壬生念仏　心色

都風俗鑑（延宝九）

四条川原のかゝき、夏をいふ條に「眉間えいら眼の月をもさとへつべく、其口えい海がきのうちふかころぶる花をさとへても猶あまりきくれ、さうさる蛮の楊枝をけつ通るかとくるゝ猿さきに売りまし

さるまひ扇をひらめかし

芝肴（延宝　似春撰）

岨の春歯木枯果る中　夏木

作り物眼ふさげぶ猿のつら　似春

山中集（元禄十七年印本　支考抄）

朝寒き楊枝に猿の姿かな　里臼

俳諧毛吹草

諸國名産の條河内の部に「玉串楊枝」とあり此書寛永十五年の撰みていとふるけれど猿色の事見えざれば　すゑに出のせてわきつ

男子の髪のゆひぶりの名種々并額月代

近松門左衛門作「加増曽我」といへる浄瑠璃節に少将か男子の髪をゆはせし事を載たるその少将の詞に「但いまの流風なるの。大いちやう。中いちやう。立かけ。なげかけ。千松とけ。五分〳〵。せきをれ。かものはし。「うすさかやき。ぼうろざらうしろさがり。片されびん。そうそう。すてびん。ぐわびん。のしびん。ちやせんびん。「額ぶとう（ていゐ）。内ぞり。そとぞり。まるびたひ。ありひらぶりのまきびたひ。まてうびたひ。月びたひ。ぢうけんびたひ。角びたひ」とあり是は宝永頃の作なそのころ種々の（さう）しまりは近きものなれど百年あまりいひきたりし髪の風はかはりきたるといふ事なり

見ゆるまつさきに出せり　透額は冠の名なれどそれを額の名にかりもちひしなるべし（ここにいふ額といふは額の様子の名なり）

△海老折　形をもって名つけたるなるべし今海老尾といひて雑役のものつかふことあり
ちることは見ゆ

「俳諧皮籠摺」元禄十二年印本　団水撰

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

「三馬通題」かつら枝（えびをり）

えびをりの襟にかくして紙子かな　松風

「仁世物語」に「むかし男ありけり。いはゆる組芦や釜ぶちあての助なりと知れし人にて
ありける。昔の歌に　芦や釜にあるみそ汁もあとつけつかれつきてもきふれり
此男なまかたものなりければそれをなまりにえびの助ともかくしはつすりきふれり
此男のかたもえびの助なり」とあり。髪も海老の助といふの海老折の事をいふかし
うぶきえん称とまづ　銅鉢して　おきつ　此まるしは寛永中の作なりといふかんみ子
みてなれば土（かし）といふ文字もえるべからず

○蝉折　是も海老折の類にて形ちにてつける名なるべし
「天和笑委集」（天和年記）八の巻上野の花見の事をいへる條に「すや風俗つゞさし紬谷
編笠丸ぐけの帯せみをれ（じ）いてう五さいつけ（ぎ）さんぜんえもひ（じ）四角まけ。長刀そり
の長刀いきぢをとゞく長ききざし」云云「吉原草摺引」（元禄七年印本）「女郎はいかなる
男をもんすりもとりひしに色より色にうつるにそせみをれとうろきも髪を
色ひかり櫛そろでは木も」云云　梅子「うらこの曲」のきさしにこうろぎの墨とやら書文
なり墨き文を竈馬の色に譬ていふか鳥漆の髪などいふ類なるべし又「万金
丹」（元禄七年印本）に男だての事をいふ條に「なるひは（立髪）せみをれ。後家まき。抱鬢（バチビン）
糸びん。手さきさがり。大ぞりぶぞり唐犬びたひ」といふ事あり又「傾城七堂伽藍」と
いふ宝永頃のカブキの狂言本にけいせいをどり哥といふ小唄に「色の山路のとけ
よい形（マヽ）の　せみ折じ。さてうけ。などんなにもえゆひまきなをしつるしなるをぞあり
のさらび大小つかさし」「加賀曽我」は前にのせたり「新色五巻書」（元禄十年印本）一ノ巻
「今やうのせみをれ鬢（スヾ）ぎはのうしろはさがりは二ツ毛桜のひまるをきたるくゝ

ニツチスキ

新色五巻書
ちよくしまげ
とよことあり
可考なり

「歳旦帳」元禄十四年尾陽名護屋

歳旦　せみ折も勝向髪や年の暮　山家

「いろかゞみ」宝永年印本

前　花嫁の恰家に寐ても要有　加世

附　青葉や腰に蟬折しの髪　雪也

「熊坂今物語」（享保十四年　一風軒作）西沢「前髪ざんぎりしいかにも月代大ぶりに当世せきされ碁

蟷螂のきる迄（これハ角力と唄をやつしたる手）

「俳諧豊の露」（宝暦中前句附　京知石点）

前句　かんな実まるんまそれし

髪結の蟬折しに写髪小吉　信州仁科　竹子

△のんこ　「後空色ちりめん」（享保三年印本）に「糸びんづらののんこにゆいまはし迄」

「柘かづら」（不角歳旦帳　享保）

梅の世ハのんこにむけて今は鬘　露言

（林泉ノ「産毛」てのんこアリ他女の髪ノ方なり）

「伊勢音頭二見真砂」かつら摘「いろそのく気ろのんこくはこへよる年の海老そりしちゃらそなることてみえしてハなし迄」

「一万金丹」

△唐犬額　「俠客傳」（宝暦甲戌　暁鵞著）「江戸に唐犬組と云男達ありし喧嘩を成ていの相手に添つけぬといふ事なりしとて唐犬組と名付より唐犬組大方男ぶりよく見男なりし額べつして大きくかつらをよろしく今称するの迄となりて末に此の名ハ唐犬十右衛門といふ者より今ハ権兵衛とていつれも是

「花洛六百句」延宝八年印本

前　唐犬の妻こふなれどもゆるされし　保友

附　中間の額面影ふくろ　千之

△折柳　是ハ若衆の髪のゆひぶりなり男色大鑑

△大てう

△せきれいゆう

△今せ鬘　「かつらせひ」（附合の句　享保十九年　幸化撰）

ぬるることはまし今せ鬘づら　幸化

「柾くつ」

「木曽ぶくろ」（享保中 出紫撰）頃ハ何しも髪も落葉（オチバ）の神馬（ヒメ）引　北昆

△深草流「八代物語」少年のよそおひをいふ条に「髪ハ深草流にゆひやうに」

△茶筅髪

「新續犬筑波」ふるのよき柳やいとど茶筅髪　政道

「京日記」貞享四　おわりさハ芍薬咲り茶筅髪　言水

朱「懐子」
朱 今めきていふ茶筅かと兵庫髷　朱 おろくきう

朱「暗小袖」（寛文十二 一雪撰）大股の茶筅髪やえがし下　他名ふ尓

「銭龍賦」宝永二年
振つけの我身ハもとの茶筅髪　沾徳

一陽気者「色道大鑑」
髪の結様よ立髪・鍋もかしら。ふとえ結。髪古法むき陽気者の好む処なり　若年の内ハ元結細きを用。男なるとて元もひ細きハ初心めきとする。茶筅髪ハ気利あるゆへ折よふで夜会する処なり　女郎とらひて折そうれとりさき　まて茶釜をもひさるもすし

「宝苑」茶筅の条

「續山の井」寛文七年 湖春撰
茶筅髪やいそ心の花のゑべ　閑節

「物種集」延宝六 西鶴撰
おそろしや戦さき紙も乱よ
手家の紀忌日夫こそ茶筅髪　百切

ちくら茶筅下 輪編 云入やと

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

△たてがけ「男十寸鏡」貞享四　若衆の髪のあるをいふ条「髪を油そてすきいれ
あれがみのれと唐輪なるあるをたてがけの大（髷）ぶさつとの大きなるは似合ざると似
付けぬ人なり」「幸若舞集」虎が（とも）「つま貞女をたてがけにゆうてあぐさ
むすめあく」「雑俳鈔」延宝八「まづ男ハさうせい風のこし髪そろ（ぞの大小つなとざしこそらん）

△まきたて「七百韻」お扈従（コシヨウ）の自作（ジサク）は鮨御たてぶちそ　宗因
（延宝四年）まきたてもとある湖の白糸　如見

△くりびん「産毛」林鴻著「繰鬢（くりびん）髪よりハ髪結つて武士の中なかりしき

△おつたらし「晴小袖」寛文十二　枝かろき柳か髪やおつたらし　雪峰

△「加増曽我」おもそろ千松どけの名者なり「古今若衆」付ず巻中に見ゆ

「祭礼草」寛文初　道耳撰　枝も葉もせん松どけの夜かづら　台濃

△つとろ髪「十寸鏡」（ラホ一ウ）貝享「つとろ髪ハ髪ばかりつゝみ袖をきえ見んとしてすそをし（ちよろらん）
ど模様なしてみどころなるそれ

△額のこて「不可徳物語」下ノ四十三オ

△三日月髪「水ひ鏡」八上ノ

けちきり

けちきりハ又けちちうとふかもあり局女郎をいふなり假教とまをハ假字なるべしなるひハけちとむ
かりもいへり又「青暖簾」「柿暖簾」（きのれん多くにあなのきりより）又のれんぐぎれをとるなくそうなど
もいへり

△青暖簾

「正章千句」正保四年印本
（霞つがまのめへお庵
なとろな青暖簾のかゝるみぬ　柳翁云前句の霞ハ彼の局をそれを野色のつがまとて青暖簾とつけるうる寛永の
ころより此名ありしなるべし

「是一後千句」慶安三年吟
似よる多き傾城の門

「較柱百韻」（二句目女今ハせぬ伽く）宗因撰吟　延宝二年
訪ひよるに看のれんを急つ（口）

月も知れ源氏の流れの女」

青暖簾の桐壺のうち

「吉原つれ〴〵草失墜」（延宝六年印本）「かたち心ざま大かたなる女郎もちかんするも煙れぬさげるのうれんにさしまじりてきれ〴〵をこらるとそれいるきことゝなれ（同年板）けちちのちしぶくとうハ此世の末にまで青のうれんをかけおくなりゆゑ此のれんづらとも云」ふるくハ吉原にても青のうれんをかけしなるのはじまるべし江戸咄に合せ見べし

「難波鑑」（延宝八年印本）二の巻に「阿波座瓢箪町新堀之所の所よりいかまで扇の書暖簾を掛けて燈火をかゝげハ家燃合に変するなりと云」大坂新町の事をいへるなり画中にも暖簾をかけて夜みん世ならハ暖簾をおろすなり「都風俗鑑」（延宝九年）「茶屋の見世のぞきの事 云 見えねど笑止なるおいらしつまらぬなり見えぬのうれんのうちをみるべからずて何こゝらさうらふけて青のうれんのちぢれよりのぞきをそれてんかねて「風流女大名」（元禄の末の印本）大津柴屋町の事をいへる條に「是ふりふさるかふゑ

青のうれんをかけさるハ端女郎の住にあらぬ扁とやらん云々「江戸咄」（貞享三年印本）六の巻吉原の條に「近き頃よりさん茶といひて大夫格子より下つかたなる女中あり江戸中の老若貴賤来りて大臣あるハ揚屋にて出会し それにおよばさるハさんちやの扁にきたりてよしとみそれよりあがりては青のうれんのかげにさちよりぞん さうらうのはやだて云々」

△柳暖簾

「吉原つれ〴〵草」（桜小貞享頃の作なり）「せんかたなき柳のうれんが物日のやくそくいぶかし」（同書注）さしつかまに柳のうれんをかけたるゆゑに此名ありと又「花の露」（元禄五年印本）吉原の事をいふ條に「青すだれに柳のうれん足手結つかなる戀さかりさましとするとかしの詞云々」「写本吉原つれ〴〵草」（同著 宝永年）「ある人本町川岸を通りなるに小袖髪かたちまでいうしき女郎柳のうれんの中へ入ける云々」柳に扁の見世さきへのれんかけさせて軒を長くそりいださせ その下を往来するさま本

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

町に併て角名より今ハ本町といふ事をそゞきて川岸とのゝしる其証（本町川岸）
「吉原つれ草」に「それより下ハさらハれどふるさとひ牧柯などへ行くを自らハすゝと
こそわりふしめいと云ちそ因言河岸ハ江戸中の濱の事なりとしに本町のゝし
のゝしられけて軒下への通るやうふりて世り家のちゝつゞまの中まではしき処の
家つゞくり本町かしふれるゆゑなかりといへり
此柿暖簾の句多くハえらんず

「洛陽集」延宝八年印本

青暖簾わかれするる身や柿暖簾　　旨知

柳亭云「花の露分」にも青暖簾のとなり下におえさるうづらかりへうけ蟹き
しずれをつふか

享保十二年吉原細見「江戸町一丁目かきのれん　西かし此通り本新道としふ」
「かつらぎ」享保十九年印本　幸佗撰

局　青暖簾はつまに名折り
別して誰よ炭火のごかれ居る　　伏見　桃道

全柿暖簾　日
まなふひや小切に窓の世帯持　　京　鈴川

「異本洞庵語園」享保年記　局女郎ハ元をとりて條「右局の構へハ表に長押を付内に三尺
の小庭なり局の廣さハ九尺に奥行二間也中國と庭との真中に幅二尺又ハ一尺五寸ばかり
の簾なり表のうづら格子と庭との間に長サ三尺ゆえ尺五寸計りの暖簾を付三尺
の入口に加様深の暖簾を掛縫留りに紫華を取りを付る也元禄中の頃より局と
いふ事すたり其て吉原の古風古実をうしなひ云々是に柿暖簾といふハ實ハ
此らちん深みてなりしるべし

ガラス使用

「江戸八百韻」延宝六年

実方の頬 んでゐる
此君へ違の異 青雲
着を柿本
柿の暖簾 言水
先ハ若気侭
知るらし

「色道大鑑」延宝六年浄書　端女郎の居る処を局といふ局にかくる暖簾ハ昔ハ花族の御家へ申上
御内意を以て掛る免許なされし掛る事なりハ此局ハ彼御家より出る暖簾を掛
候ハて長サ四尺ばかり三布也 縫合の二ヶ所に格子縞の糸なりえたりといへども後今ハ
断絶して彼御家より吟味なし傾城や自分のはからひとして色をかゆる端傾暖簾の色ハ紺染を
用ひされども大坂一所斗りにハ柿色を今に用る事古例なるを是を称する事也 此局
の内土間ハ外にて畳三畳を敷をまづ定まれる法といへ式三畳半もあり又四畳敷もあり
又四畳半に床板をかけもはつ昔の局ハ壁に寄て竿を渡し衣掛の竿をいふ江戸の局
ハ口の間も広く奥のるに寝所をしつらふ西国の局に端女郎二三人一処に並居て男見れバ
其好む女を入誘ひて外ハ奥より退く見せその風俗なり

△けち

「吉原伊勢物語」寛文中印本「昔男ありけりふと折まつて友達をさそひよし所の
つかまへるぶりありきけるに折ふし女郎是非と袖引とむるにのがるべきやうなく
て
をさしけりいふにおよばず　かゝるけちのへまるとてのこりの男なる

られたれバもの思ふ男　出ていふてもぎりなりんと留めけちけちあぶり思ひとなく声をはげ」
又「さりとも男けちなどハ何の思ふ女郎をひとりにて」「見隠にけちたり」とあるハ前なりより

「梅翁自筆の懐紙」　時風

痿きの鼻より雲やもらすらん　尾蝿
長屋を打てとおふけちきり　梅翁
四畳半消の月のさい留ひて　宗俳

「俳諧破邪顕正返答」延宝八年印本

長暖簾乱山青くされてあて　惟中
されバ又まつけちぎりの雲　仝

柳の前句ハ何とやらいひたてる暖簾を〻の局の青暖簾まといへるをけちぎりとつけより

「好色いせ物語」元禄　むかし田村とやけちかくしてまりけり　但けち一名局一名をしがよみ（貞享三年八月 四巻四冊 長文）

△端女郎

端女といひけるハ前の日しかしもおかしく見えされども知るなれはいふとも

16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54
国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83
ガラス使用

夢見草　明厂二
やり手傾城の洞ク子　良仕

京三吟　延宝六年印本
千寿の洞油こぼるゝ　信徳
石佛猶女郎を既より　政定

△格子かうし　格子先をとふしが忽遊女のさんちやふすりをいふ

江戸新道　延宝六年印本
高のるい里ハ時雨て松淋し　言水
格子かうしの菱そそうるき　仝

坂東太郎　延宝七年印本　才丸撰
格子かうし盧橋の佛ありけり　九露
柳暮にかとるへかうしとひとつ遊女
りりそかうしさるるも

向の岡　延宝八年印本　不卜撰

格子かうし暗立沢の秋なりけり　立允

七百五十韻　延宝九年
裏屋の座敷八畳蕭しして　如風
格子あり常陸の宮をはなれしハ　春澄

宝永中印本　吉原つれ草「角町の但へハ格子かうしまて座附大夫ゝの名かおり
てやさしき女郎なり」

△局かうし　大夫のはれ格子のはれの外なりて局へかうまてをはなれを局かうし
といへり古紀様の浄瑠璃　名古屋山三　ふかつるきといふ大夫の局かうしの大夫ともそうり

年糸
色里案内　天八箇所

吉原伊勢物語　寛文二年　下巻

紙蚕　享保十四年印本　貞佐撰
若い人ハ金の急ふこそ洞くゞし　青瓊

ガラス使用

扇へかけりく晩に鈎裂（カギサキ）　松下

【物種集】延宝六年印　西雀

かるい出たちの乙女の姿

咲花のよし野帰かへしてもつ扇　元順

【吉原つれ〳〵草失墜】延宝六年印本　時うつりすさり楽しとかるしと行かへて花やかなる格子も人〳〵より思ひのうれんよあり　注　それをのうれんづしといふ説をさらせたる事ありしもそのはるかなるに数多し　本文　きんごさかきハちよくまでなりしかどさん然る春のほまんごハなりぬさかきハ本広にかはるとるん　注　さかきハなり思ひしの絵とりにありけるをいふ云々　柳齋云坂田金吾ハ端女の名なり是等をてらしあはせてみるべし

△婚部屋　又つぼねの事を婚部屋ともいへり見其の値ひ婚部屋にいふ座敷ふびとき思の名とてかぶきの下株なり　諸務のめくるのようなもつといふなるべし

俳諧の句にハ見えされど同じ書つけてありき

【吉原三茶三幅一対】延宝九年印本　「江戸町二丁目俵屋六兵衛抱清野といふ女郎を評する詞に「此君さかし頃まで江戸町にて婚部屋の見世を出しいとよくなりしに此度よきなりいひ云々」とあれど京都にもなり

【好色訓蒙図彙】貞享三年印本　北向ハ局見世なり又小水向（きたむき）ハ北方（かつてう）よしまちにありて局のとやのうちに住て云々　好色訓蒙図彙ハ吉田半兵衛画にて京都の刊行之

【好色議日記】年印本　四　大津の條に「柴屋町見物をしてとふ格子をうしくそなきつひに傾城といふものみてる事があるまいなどふと思ふされし〳〵て行けハ端女ふかき婚部屋のうち小屋常泥速を歓じるらく云々」

【むかし〳〵私】延宝七　（女重宝記　根本〳〵ではりとなる）

きついをまるらバ吉野新田　宗因

乙女子が眉の内に天降り　芭翁

鷹筑波集　寛永十五西武撰

たゞ傾城逢坂の山

眉まで遊かくりける　さまかづら　利貞

笠の名種々

△編笠　色道大鑑（春舟軒箕山定宝　年戊午　延寶六年　浄書）編笠ハはづかしきを制して又念を入て編するも制して

をかくして

その道にハ英年の外堅ク是を忌　兼編出ておのが色のかくさるを用ゆ笠の緒ハ紙よりをよしとなし　總じて京の遊郭にハ自分の笠を着する事なし　されバ茶屋編笠を用ゆることヽし丹波口まで自分の笠をもたせてゆくも茶屋にて着るべし　常の編笠にて郭中へ入るを惣て忌ゆへ江戸の三谷も編笠を用ひ大坂ハ編笠を専とせさせて是を色道の風流にて景色と申す　又遊郭へ入る人ハそれとなき思ひのやうに見ゆるこそ風流なるにそれ面もきかしけるを恥ざるハいとゞつたなかるべし　都遊にハ伏見などの小郭にさへ笠をこのみて入人おほし　長崎ハ大坂にひとしけれど　つくりのとほるゆへ是ハそさふにぞ　熊谷笠の事江戸に多し　三谷へ通ふ武士の奉公人などこそ是を着せり　江戸にても町人ハさまでさせずして上方筋にもまれ〳〵にこれを好む者なり　古法もきかぬハさもなるべければ

と先役め野　かして人の目に立事甚し　よく夜なりけるに　普化僧のかぶりし必定
であるべし

「糸瓜草」（二ノ五ウ　寛文元　道半撰）　編笠は姿の花のかくれがね（先は女の悪気り）　友世

「其袋」（元禄三）　梅咲て編笠やさきすぐ頃　仙化

「金毫録」（享保九　東川撰）　鰍を踊も椛のおと　駆之

△焼印編笠　花街へ通ふ者又茶屋にて貸す編笠なり　同茶屋の焼印を押て
かくゆゑによく貸す編笠といふもあるべし　「二休ばなし」（貞享五年印本）　五巻「京も
頃まで都の西ちき世町よりとめし鹿恋の女郎かれもなきそれ恋の色名はいへ
ども焼印編笠きる人の人は中男もありけるべし」「好色伊勢物語」（元禄年　同印本）
二の巻「さるでうちまると云ふ詞にて「丹波口なりしが又編笠茶屋と云る
やきいん編笠をかりて出はまて人目をつゝむ

△ぬき編笠　土佐の国「美人揃」ほとふもなんのふかぬるき編笠ふかぐと身せは

袖を吹かへた

△十二符かけの編笠　十二符の編笠は（符は編む　とあり）　編目の十二なるをいふなり　奥
のさし「さらじや」に藤本高忠け家山伏となりて奥州へ下ることをいへる条
に「奥州の衣川古鈴の御所に急ぐなり藤本何とか思ひけん相ひすそりかけ
をばつかりかつかつてあひのあるよりもちぢらけたりける所にてきるまに十
二ふりける編笠をふかくとしこうりで（云）とあり編笠は十符を法とする
ゆゑに十二符はふかきなりふかくとしこうでとなふてあるべしまたのさらし
「室町殿の頃つくりしものなれば十符の編笠の名なりし思ひて十二符かけたる
といへるなるべしさて十符の編笠と云事さらしも俳諧の句にもいまだ
見えずぞ

「向の岡」（延宝八年印本不卜撰）
あがりじとかれおもふくの橋をきらぬや　不卜

ガラス使用

名ハそう なるべし

勘当の身に菅笠の十符 とも

菅笠も十符の名なりしは 談林俳諧の詞ニて 編笠なる名を菅笠

にかへしなり 句ハ「今様当我」（元禄年 名印本）とふさしし 小野ま文 笠をかぶりて吉原へ

かよふなるんえさう案し 野史ハ俗字まで ハ府なるべし 編目のハウなるをいひ「洞房

語園」（元文三年の本）に 八所織ハ浅けとなる見なるべし 十符ハ原（モトヨリ）来の度（ド）なれバ理にかなひそ

すふかきものを 十二符といひ なほさきものを八符前に かぞへ箱ハ編むを（にて織とも用）とふなやあらん

因にいふ すべて 符なるものを 十符を度とせるハ 編笠みハかきるべからず 十符のすが

ものなハ「夫木抄」「文字ぐさり」菅にて 編み糸のさし「ふしときも」小十符のうち

みれり（うつあり 葛覆あり）「なめをうこのさうし」にとある 菅枕の類そ

なのみ枕なるべし

△熊谷笠　くまかへ笠ハ 深き編笠なり 小なつまりの浄瑠璃に 熊谷の

此笠をかぶりしよりの名ぞ 其名義不詳 此節の非武州くまがへにて 作られし

むかふ 招頭 ハなぞり

「むらく招諧」（享保年板）し 何れも 編笠まる カ治の頃まむちとふ 編笠 其後

寛文の頃 松坂といふ笠 延宝頃 熊谷ともそ 笠ならとやり かぶりとやる 夫

和貞享頃より編笠 ならさいふ止ミ 菅笠となる」となれバ 熊谷笠ハ延宝の

頃専れになれしるべし 「紫の一本」ハ前より えとえまう 「吉原讃嘲記」（寛文七年印本）に

大枕をとりて「ふかきみ 一 ゞめ男のなるさけ 一 くまがへがさ 一 なけや清

十郎」となふべいさせん 熊谷笠の名ハ いかくまけなりておてるそれい さき

よしふこまく 延宝の頃なるべし

「奴俳諧」 寛文七年 知算 指作 昨夢判

「くらくてづんとつんえ思ぼれぞせ

たそがれに くまかへのごをひつかぶり

判の詞 日かけ のとつんまるに素あつはるをむきぞせ

挿絵云 熊谷笠を 熊谷籠（カゴ）といふが 奴詞なり

「花相撲助傳一本草」（寛文十二年写本）名もよし原ヲ滑りとてさかへし挑筆（中略）絵いと横（よこつと）
い閻思君（えんざいそわ）らき世いふるいこんで馬長い土手道をのりて見も悟禅（ゴゼン）の流れを
禿僧笠（コモサウ）や、これや叶お敵とやらく組ふせより熊谷笠をひつちめて

「紀子大矢数」（延宝五年吟　同六年刻）
寝そうき世のさぶ中の月
（どこ迄や熊谷笠の雲の帯

「坂東太郎」（延宝七年印本　入丸撰）
熊谷笠人かまの宗子師忌哉　安昌

「蛇鮓」（延宝七年印本　言水撰）
世のなつさいふまでこそ熊谷笠　如蛙

「江戸大坂通し馬」（延宝八年印本）
壽永に流し尼棚の空　言水

巾着きり熊谷笠に引くんで　梅朝
當世鞘の鍛ふりしゆく　言水

「大夫櫻」（延宝八遠舟撰　須广寺奉納）
花軍熊谷竹笠をかぶりしろ子　正信
熊谷笠停止いづべし龍ん気　友千
長刀熊谷竹笠や江戸桜　宜廣

「江戸弁慶」（延宝八　言水撰）
かうそや花に進で熊谷笠　朽意

「東茶屋友嫐」（天和頃）高台寺前屏風寄るうからは去風に青柳のるびくてん女印花の風にもまれるていこの霧よ忍れさろよそおいかしまの時節も至ぐへ笠みて思ひんいちゆうのてて「天和笑委集」ふんそえる京の男子の姿の風の条にうり「四季咄」（貞享年間印本）に「熊谷の中笠」とうするうんえるあるは熊谷笠の

うちふハ形のちいさき笠をいふなるべし「人倫訓蒙図彙」（元禄三年印本）六の巻に「編

笠　菅をもつて笠をつくる事当世忍笠熊谷笠なり」と記しこれハ元禄

の頃までハまれまれかぶりしものもありしなるべし「[illegible]風流男」（元禄十五）何貴

源之助といふもの事をいふ条に「其今日ハ十七日観音さまのゑん日宿も首

尾よけれバ清水寺へ御まゐり熊谷笠ふかぶかときても「松の葉」（元禄十六年）

卯に載するさんやぞどうらふ小唄に「上田うきよそのずのふらひとかさの姿かさ

ちで若きハらんあるもの好きですもとげめんよしあの男ひぢやなっと手それもすんさ

るか江戸のふうや　そのはつかりさまが笠へ笠にそちく杖二ツ紋のぢん

ぢりめんのべんべをきせて云々」「洞房語園」（元文二年印本）「日本堤謡あるハ白柄ハ鞘の大小よ

やハの掴ざしまぶ笠文字今ハ稀之熊谷笠ハ深くやゝ内織ハ浅いがきも

面をあらはにすハ鎖隠探ひげの髭自慢に屹と素顔なるもあり」

但し元文の印行なれど此文ハ元禄の頃のさまを書るにやあらん

絨

△冨士おろし　冨士おろしハ編笠の名なり其形冨士に似たるゆゑの名なるべし「西鶴大鑑」（貞享四年印本）「年の頃廿四五とみえさる人冨士おろしといふ大編笠をぬげバ紫の手細にて頬かぶり

して顔ハみせざりき云々」となり

「錦繍」（元禄丁丑）　原回頭　甲戌紀行

朝霧やたとふ夢々と不二の風

「蘆花集」（寛文十二年　刀何撰）　雪やつれて江戸風なる冨士颪　重頼

「鷹筑波」（寛永十五）　[illegible]の編笠なれや冨士の山　道節

△都の冨士　「西鶴大鑑」（三ノ一ウ）おえい山のちごの事をいふ条に「都の冨士といふ遣花の大編

笠をかづき」とありされバ知る如くえい山を都の冨士といへる笠も其形によりての名なるべし

△朧冨士　そべし　「色三味線」（宝永元　正徳元）「其頃のはやりもの千枚形の肌着黒羽二重に隠し表肉色羽織

小平といふ古文字の大紋上縫ありくらせ袴かるく結ひて大小よりやがてはぶつこし

朧冨士といふ大編笠ゆるくふかくきて云々」「役者色仕組」（享保五年印本）に「十七八の大振袖紫の

ガラス使用

結ちらしに紅の紬べり節ひろうどのをやり結ひ勝冨士の編笠ふかく大小のさしやう
さらに女と知られ侍」これは女の男の出たちしる条にみえたり「娘形氣」
「女の身にて我女の姿をきらひ△筑曲の髪を切て二つ折に髷出して若衆
めきたるだてをけに由せ不断の風俗も袴なかに裏をふかせ八丈の羽織に金ごし
らへの中脇指おびろ冨士といふ大なる笠きて云云」これはわらきさらしき若衆の風俗
を記したるにて貞享元禄の頃もつぱら編笠のおこなはれしこともうかゞへり
さて是等の笠の名 俳諧の句にはみえざれど 其角「五元集」冨士 笠取よ冨
士の霧笠時雨笠」とよみしは冨士の句にて笠の句にはあらざれど霧や時雨
のふりかゝりて冨士の姿のかくれてみえざるを笠をかぶりて顔のみえざるに人をたとへ
「笠をとれよといひかけたるにて是も勝冨士都冨士冨士なりといふ笠の名なり
しかるに冨士の霧を笠になぞらへよみしなるべしと書のせおきり
△玉縁 玉縁といふは今まで深からぬ編笠なり笠の縁をつゝみ革に縫つけたるの名なり

とも又革にて玉ぶちをとりたるの名なりとも聞たりしが是も「吉原つれ〴〵草失隆」
（延宝二年印本） 三ツ谷通ひせし者の事をいへる条に「くらかけ笠くせんるなき／いぶりかい中ぬき
（もゝ笠） かりに志ありて人にかたりとも編笠にあらてこそ殊に[illegible]かりめさる 同じくもゝ笠もそのかみの笠
（一すん） わり昔は色々のものまで今とはかはり玉ぶち一寸程どにてもかつきのをかぶりてこそおもそら
笠とてきぶるが此ごろはこれをものさにて[illegible]るよし」とあり「むかし物語」に「万治の頃よりは（以下京本集書入）
在中かつき笠にて女たちまでかりくるしく[illegible]めんのうへにも玉ぶちといふ編笠をかりてあ
りく」万治の頃より（京本にも上ニ書入）玉縁といふ編笠のいできたるを若衆の[illegible]にもなれは
玉縁の笠は寛文中にもつぱら行はれしものなるべし
「談林十百韻」（延宝三年印本）
前 小ぶ屋別さらむ妻乞 雪柴
玉縁の笠つくりく涸ぬれ ト尺
（又みえし寛文なと不審なるべし）「西鶴大鑑」貞享四年一冊 不動へ参詣の条をいふ条に「風流なる美少玉縁笠に[illegible]

黄紐の仕出し髱髪の色ふかく朝良染の大振袖など「異本洞房語園」にみえたるは
勝山の系下を引り前にみえたる「洞房語園」にも縁「一文字」今はまれなりとなれば
此笠は熊谷笠より前に廃りたるべし 元禄六年印本「俳諧桃の實」撰者兀
峯が調に「玉ぶちの笠きる人は今の世の乞食女するぞふかし」元禄に廃れし証

△一文字　「俳諧千代見草」不角撰

波ゞ響の、うつ艪拍子

無筆さへ知るなり笠の一文字　夜章

△目せき笠（心おほく　せひきま　からかほそ）

節さきに日ふせぎ笠のつゞあるらんといへるはわろし 醒翁云 編目の
細密なるを目塞笠と称せし此説をとるべし 籾網に目塞と名あるもみえます
咏えてより「正章千句」（正保四年印本）　正章は貞室の實名也

二階の月に柱ひゞむ袖
彼是より舞りも着笠目せきん笠

正保の句にみえたれば寛永より此名ありしなるべし「西鶴一代男」（天和二年）に「男は本奥
嶋の時花出（はやり）女郎も衣裝つき崩れて墨繪に源氏役所もちひさくなりて袖
口も黒く裙も山路に夜をこらしそれまでは目せき編笠畦足袋に紅の鉄紐今の
素足なるぞ今笑しき事なりつて遍傳る」となれば目せき編笠は天和の頃まではや
廃れたるべし「松の葉」（元禄十六）にもしきさよふ小唄に「姿つくればきよらかや
ふ多やかなりしおてきよちきよきを見のぶせせきん笠の物は粋と聴なる」とふく
やふをふくやかとぞろなりこれも目せき笠のきこえし一証とこそべし

「鳥籠物語」

△伏笠

「紫の一本」（天和三年浄書）に曰「此待乳山の風景言語に及がて彼土を通ひ
たる二丁まちの船は浅草川より新ろ鳥越へ入汐ゐる時は橋より来てまつ山の
麓を舟行ふて行を山の茶屋から知人のみえるをりやと熊谷笠をふせて

かゝりし近醍醐笠にて系さかりにつぎて西の人えさる者にはもちろんことごとく伏編笠といへり
といふ説もよし　俳諧にハ伏笠とよみてあり（なにごとも　それ菱笠もいれ　古くハくさるを伏笠といふなるべし）

【祁ゝと草】寛文二　印本

（詞）西よりふく月さとれよ人めをしのびてや
宿笠をぬきて大きさを知るのはまりようち詠て
別し路の洞の雨といとひてや　菱笠をかす　紡月

五ノ四オ

【伊勢踊】寛文八年印本　加友撰

ふせん笠や何を縫てうるさき人時雨　玄達
（此句ハ醍醐笠の説ニ合ス）

【牛刀毎公編】寛文十二

酒を賣る市よりも名ハ立まさり
群集の中を忍ぶ伏蓋（カサ）　忍山人

【江戸廣小路】延宝六年印本　不卜撰

臥笠の風や梢花のうけ　調和

【行脚文集】元禄三年印本　三千風

発句　酒田姫も下戸晴るハ淺ぎとあるか　玄
脇　せをふせ笠にまぎれゆく　三千風

是天和二年の吟也

因に云門左衛門が作の「虎が磨」といふ浄瑠璃に「足がら越て色名所歌詠にうかせどや　この一趣向大磯小磯けわひ坂、俗も法師も名を捨つそろそんさて　町人ハ戀の桐場にふてゑめて何もの首尾の雲をさする　武士ハ道具を宿編笠に鎌倉中をのつゞまし」とあり今もかとるを道成寺の踊おもハふせ何とさとに事何ら此文にあらひてけるものか

右近源左衛門

女かとみれハ男なりけり

下養狂哥集　女かとみれバ男なりけり　業平の面影ハ昔男なれバ今みる事ハ更になし　当世そやりしうこん源左衛門おもしろの海道下りや何とかくとつきせぬおもひ

ばかりなりけり　又ともに何ものであるいハ去来源左衛門が舞のあるなり

柳翁曰近年刊行なりしさるしに寛文元年市村竹之丞座へ右近源左衛門の事を記せしとよぶもある記あり　此年中村座へ玉川千之丞下りしかバ市村座にハ源左衛門が下りしに

下養狂哥集の奥書ハ寛文九年とあれバそれより前に源左衛門をよみしハ論なし

此狂哥ハ江戸にて詠めるものなり　なるものであるいハ当時の流言なり今の俗言にタマツタモノデナイ又ドウモイヘヌなどいふ類也

朱ノ書
本文ヘ入ルベシ

天水抄　寛文十年印本
貞徳獨吟

鎌倉の海道遠きさめがねに
かとおもて尺八何としてまし

自注ニ曰　尺八の事ハ海道下りとてあるなり　柳翁云貞徳ハ承応年に没せるなれバ其の時
なる事を論すべし

「大坂獨吟集」（延宝三年印本） 由平が巻の奥に記し判者宗因の俳文「傳へ聞天寶の
唐がらしは鼻より入て口より出る色なりひは立賣の紅（もみ）紅梅一句之ゑのこまやかなるは
お今が芥子庵子後藤が彫姿うつくしくやさしかりけるは柳よ桜よなまめきさふらう
こん源左衛門が海道下り筆まうくとも手点合おそれなりけるもはべらん」
「難波鑑」（延宝八年 道治著） 「承應元年初秋の頃かぶき若衆のひたひ髪をそらせ（中略）
其後秘抱一元と品をかへ右近左近が海道下りを舞しより人又二人よりあやつりがまた
ぶたいかくやとおもて寄て群集しぬ」（柳翁云らくこれは若衆かぶき止で後ほどへいへるなるべし）
「故郷飯江戸咄」（貞享二年印本） 「女方といふは右近源左衛門よりぞ初まる其後まんの助と
いふぞ女には似たるもるさればひさ堺町に養抱右に女かとみれば男のまんの助ふさるり
ひさのこれも面かげとよまれしとなり」（柳翁云らくの時は生未考）
「男色大鑑」（貞享四年印本 西鶴作 六巻） 「女方も昔右近左近の時は面影ありまきふりしが置手拭
して大かたは色作りし諸見物もその頃より小請取仕組もかはる又くべでき

かし事なかりしなりき
「男一十寸鏡」（貞享四年印本） 上巻に曰「三十年以前までは歌舞伎若衆も今の風俗とかはり
（中）嶋都そは京より権三郎がむかし吉良兵情が若さかり大坂にて（荒）手の小曝（コサラシ）岩井雅楽（ウタ）
寺田小傳次なんど分けてときめきけり右近左近がつきまひ名左衛門が浅花を鋤（カザシ）て
る姿世こぞつてあそび興し其頃は抱言の女形が今のかづらともなしぞ三尺計りの
絹をそちまきのやうに額にあてて其うちを長頭巾の如く後ろへさげたり」
「舞曲扇林」（元禄頃の印本 河原崎権之助作） 「中頃右近源左衛門といふ者の若き時分は鉢まきつよ
くなりし折ふしそ名をとりし後古傳内芝居へかゝれとや其時は上手となれ（まさ）
なりける其心さいはひそさりき源左衛門の芸はうつくしきそぶりまでも曲かうておもむき
まくいつも年あかる芸そと見るに不足（なき）

積丸云源左衛門がことは寛永十九年印本にあり

「むかしむかし物語」（享保十六年 老人筆作） 「昔右近源左衛門といふ役者京都より下りて絃深一人
地謡一人にて右の源左衛門の舞をまふ時今のかづらなどいふ物なくうこんのふくさを

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

に細き糸をつけて頬にかぶりそのふくさ物を月代へおかるゝふり此ふくさ是

月代をかくして前髪若衆の若者なれば女の如く見ゆる備とては海道下り

山崎にてしるべといふ道行を地づかひ飛ふまふを小舞にまひ又は業平「（イセ）」

まかりの節傀儡子男のふ?を猶狂言に舞ふ見を諸人面白かりて見物をとゞ

「長歌の始は祢宜町に歌舞伎役者右近源左衛門と云若衆なる若男にて

諸人見物して見る人の為にもやと此源左衛門を本にて作り又紙にて張貫に作り

うこんのふくさをかぶりし 躰なる人形などしく売る卜養狂言に 又世に

（芽な えとり）名察（めいせい）の老女より源左衛門長歌に海道下りといふを作りて唱ふ

殊のほかはやる 後には仕方ありて海道下りをまふ

柳亭記に 享保年「吉原つれ〳〵草」（宝永）「小舞のふりは京四條大和屋傳兵衛が弟子

右近源左衛門海道下りをつくれり赤ゑぼしひたゝれつぎ小舞をまへり」赤てぬ

ぐひとは戯れて云る又うこんのゑぼしなども赤てぬぐひをかぶり見まつられし

「舞曲扇林」お國かぶきはじまりといふ條に「其後大坂に濡業平大小の手をとじ

日本傳助といふ狂言師是は竹嶋幸左衛門の家なりといふ 右の大和屋傳

助日本傳助又かぶき傳助とも云同人にて源左衛門が業平躍の狂言は源左衛門の師

傳助なりつらし 狂言なるべし

「五吟我集」（慶安二年 未得）序「右京の業平は大小の狂言のうちにあまり多く

てまひするに詞もなくて是はれる花の源衣の色なりて舞ふにふるひあはれる（かごとし）

正徳四年印本役者「目利講」大坂の巻 上上吉 竹嶋幸十郎「此人の祖父はかぶき

傳助どのといひ御親父幸左衛門どのは袖をさゝるの時日本左衛門と申せし名実

に日の本に実なきの名人と名をとふして果られ忍」とはあるも又かぶき傳助

も同人なる事を知るべし

右人にいふ黄なるあたまうこんといふは源左衛門に始まるといふ説はむ無かるべし

（類従本）

「布衣記」（天文十三年）に右のゑぼしあかるきは黄なるべし 黄鬱金の字をふるく用ひきたれるなるべし

「紅梅千句」承應の吟　明暦元年刻

前句　それバ右近と跡をきる袴　貞徳

附句　まつ黄なる小袖を今ハきかへし　政信

是ハ右近を贔屓まとりするまで其源左衛門か芝ハなれど同時代也云なりひよりする人もならんとかきつけておきつ

「尾陽戯場事始」（天明三年写本）明暦三年酉八月廿四日より熱田亀井の道場にて舞臺「若衆かぶき」といふ者を興行せり　太夫右近源左衛門海道下りといふ事を久しくつとせしと　柳亭云若衆かぶきハ承應元年に停止ありし明暦の頃にや此制禁やゆるしにや又三都の外にて当時も若衆かぶき有りし也「同書」明暦四年（改元万治元年）春井郡児玉村大日如来開帳によつてかぶき興行　太夫右近源左衛門かひさしく盛る時節　源左衛門年二十七のよし　柳亭云此説によれバ源左衛門ハ元和八年の生るり

再按ずるに源左衛門ハ寛文元年江戸へ下るといふハ非なるべし　玉川千之丞が海道ひのかぶき等みるべしそれハ海道くだりハ最古風なるゆゑにおもへる千之丞江戸へ来りてのちに名護屋へおもむきし事「環魂紙料」に記せるが如し　源左衛門ハ明暦三年八月尾張へおもむくとなれば明暦のはじめ江戸へ下り明暦三年六月の火に江戸の芝居焼てしばらく止めしゆゑそれより尾州へゆきてなるべし

「後餘花千二百句」享保六

傘さして又さして行　只尺

「手をおてなれが昔の右近とハ　壺月

自注　右近源左衛門昔の役者

「延宝六」「古今役者物語」源左衛門かゝるあり「今ビキ」本に翻刻したる續つれてみるべきなり

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

女の覆面

「むかし物語」むかし武家の奥方息女たちハありく事なし 近所へも乗物にて行なり遊山等に出て先にて乗物よりおるゝ時ハふく面かぶり物して眼計り出せり宮仕の針妙婢までも外へいつるにハふく面又ハ綿にて面をつゝむもあり顔をおふせてありく女明暦の頃まではさ人もありし万治の頃よりかちにてありく女ハふくめんのうへにも綴（ヅキ）といふ編笠をかぶれり　以上摘要。

「子孫鑑」（かな字例ねむ）

「俳諧懐子」（万治三年刻　重頼撰）

立くらべるぬり笠のうち

ふくめんと誰もこれを好めそ　保友

「新續犬筑波集」（万治三年季吟撰　寛文七年刻）

花の顔ふくめんたるて霞かな　勝政

【菱川画本十二月】三月花見の画題

ふくめんや花よ忍ふのかくされたし　一云

作者不知

【智恵袋】寛文末　祐政撰

【江戸弁慶】（延宝）言水撰

草隠しふくめんふくて女雅子　昌友

【俳諧錦繍緞】

（前句書）楊貴妃の顔をつゝめる山かつら　渓石

「顔の白きにふくめんの跡　普船

振袖を刀のそりにおりかけて　其角

円

【燕哥仙】袖冊子（上ノ八三）

「見しられとのぞく覆面　北枝

「はき小袖普賢の古風なり　そせい

【士師梅】宝永

覆面とめでたりえゝ桜狩　撰者　八虹

（一日さらし　におゝ除　アリ）

【色道懺悔男】

頭巾の名種〻

頭巾　丸ー　大黒ー　くりー　忍ー　投ー　まへー　おとひー

【俳諧鼻紙袋】寛文中印本　季吟門山岡元隣俳文有り

【寶蔵】

頭巾

（甚頭巾　これハ疹　ちり病ある　渡世本を）

甚哉己が裏（アラハ）る事そのかへハかくしふかくかくしても己ら身をはづかしき事のやうにおもひ人も謙つるに此頭巾ハ人もゆるされもおしなれてかぶりていとかるき編笠菅笠巾ハ世にかくれなき事にへだてもとれバ昔もかぶりて持病すぐるにそせんくるき時ならぬ迷懐もたゞ頭巾のもてなし世を浮世狂ひのあるよのとらの衣きさるかにかぶるこそ一ところのかひをりけれ世を忍ぶの名なて頭巾ひしき物にハ袖をかして蓑の岩ふも去ぬ頭巾逢坂や心亀頭巾別れを急ぐ鳥の声とそうつふくれ名もハ袂にさらさき頭巾情をふるにもつころ頭巾今やうの事あるらに縁につるれば唐（タウ）の物にて隠し頭巾や後にたゝや寺持頭巾ゑぐ山がハのむくつけきもん

さらぶさて華やかそ頭巾思ひの渕にはこがれてころ身をもゆるげ頭巾にそいしと

哀（アハレ）にハ侍るものなれそげが頭巾ハ忘られさう

花の顔のふはせてかくしても八重の花

寒風防キ得ル一團纈（キヌ）　若輩任（マカセテ）心（コヽロ）、被（カヅク）無（ヲ）由（ヨシ）

病氣狂言　躍場ノ外（ホカノ）　貴人頭上ハ不曾（カツテ）尤（トガメ）

以上全文なり（二ノ巻十二葉ヨリ十三ヘワタル）此寶藏後年幸尭と標題を改め本あり

△赤頭巾　〔古糸屑〕（延宝之）

赤頭巾人あとゝめてそけあさま　成林

△赤裏頭巾　〔懐子〕（万治之）

うら赤しだてる人の頭巾かな

〔當世男〕

又後世ハ山も霞の砕まきれ

赤裏頭巾ひそうとして　重治

〔落花集〕（寛文十二年印本以哉撰）

赤裏や頭巾の山の下紅葉　昨夢

〔大井川集〕（延宝 維舟撰）

だて頭巾させてぬらふハ赤いぞろ　千之

△麻頭巾　夏頭巾也又麻也

△隠元頭巾　〔好色灸島川〕（元禄十一年印本）序ニ「昔日の浮世姿を今日の黒（黒）染にかへして

いんげん頭巾のさとられぬ隠らかさ」

〔宝蔵〕

〔向之岡〕（延宝八不卜撰）

隠元頭巾山や浅黄とかくれがの　黄吻

△置頭巾　〔向之岡〕（延宝八不卜撰）

木枯や老の林に置頭巾　二葉

山さくら雲井にまがふ置頭巾　不門

〔落花集〕

りうすうや風に心を置頭巾　正村

〔空林風葉〕（天和三年自悦撰）

かき頭巾さくらの花を置の風　友静

〔芝肴〕

お客老にハ白髪の帽　桃青

かき頭巾顔にさらむさゝ柿や　似春

△ざこそ頭巾　用捨箱ニ出

△おそひ頭巾　〔薬師通夜物語〕（寛永廿年印本）冨るもの事を子孫に「てんおとやさやふとさく

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

帯ぶ
あぢ

をりんそう染に数を尽てうらに紅梅もようをつけ花くいらきの数さや小金鍔大小うち
遊（ゆき）ぶ萬ざしの木綿たびおさらひ頭巾で顔かくし刑部梨地の印篭に枝のさご樹に
丸砂（サ）瑚（ゴ）樹（ジュ）さげさる事をとる云迄

「紅梅千句」承応中ノ吟　因日　刑部梨地
鎗の先より鍔（ツバ）がる秋風　正章
「俳枕」相模
ちるらい刑部梨地や山の内　忘午
手近き顔（オトガヒ）頭巾こしらへて　安静
「天和三歳旦帳」ケミ之
暴雨（ムラサメ）の刑部が蓬竹（スダレ）伯春
深て　一晶

△かぶろ頭巾
「後砂金袋」
めしてハ立ハさるらにかぶろ頭巾ろ子　作者不知
「俳諧三部抄」延宝五年　惟中撰
霞こそかぶろ頭巾のゆふぞ山　朴之

△おかま頭巾
「四季でる」貞享年間印本　二の巻に「出立常めかぬ染（ソメ）ごろひの女菊唐草

の地がし小袖に茶染の中幅帯うしろむすびにさらに髪ハかうがい曲をとるなど下抜ッてゆきて髪曾（ハチモトユヒ）の間かゝる程に折掛ヶ御所染の知色つきん浅く火燵ひさひをとこりひろげ風義世の名に皆替りて東山時代の高蒔絵の気色云迄
（筆ハ今とても頭巾とふハかりの帽子ナド又ろるべし）

「好色盛衰記」元禄元年印本　三の巻　十一オチテ「今の世の女昔に替りて変を仕出し中略首筋より上をかり
に入物十六品（ニナ）ある事まづ髪の油。鬢付。長かもじ。小枕。平髷（ヒラモトユヒ）。忍び髷。かうがい
さし櫛。前髪立。紅粉（ベニ）。白粉。歯黒。まゆ墨。知恵頭巾。留針。浮世つら笠。

△かそ頭巾
「空林風葉」かそ頭巾古郷に母あり風（ヨドミ）の洞（ホラ）　可不
「知恵袋」額を波のたてぞぞかそ頭巾　水元
「向の岡」鍬形や男鹿の角の皮頭巾　卜丸
「俳枕」革頭巾きられの山や本の鹿　照龍（キナム山大和名所）
「十三歌仙」大男頭巾竜は海の大和流　武昊文

大悲院

ガラス使用

△かます頭巾

旅なれし一本さしの浪頭巾　白良

[犬子集] 寛永十年 立圃撰

このころはゑとて雪をしのぐん

（年寄ハかます頭巾をかぶり　德元

[俳枕] 寛文年　幽山撰　延宝八年印本

かます頭巾二村山やゆく衆　交扇　（二村山三河の名所なり）

[早梅集] 四ノ三十六丁 梅盛撰 万治三刻

米かもてひるハかます頭巾かな　良庵

[新竹斎] 四 貞享

謎　禁好物　一つきん　覬（うまず）

△紙頭巾

[鷹筑波集] 寛永十五年印本 西武撰

かさあるや破れかミこに紙頭巾

不弁なるゞの安部川ニ住　正康

[雪千句] 寛文五年印本　季吟判　作者不知

霧ハ星ニ乱しつよき所化部屋

きゝくぞうし　もこの条に

近松作[津山女夫池]浄瑠璃本　六十丁ウ　[illegible]

三ゝ佐伽ハ元にお手々けの梅々へ白きく頭巾を姫とこゝにめるまゝ此

きぶくあしい影つゝいれそて色と会わめふさ人みせとミろもゐる

味の中々や福をもつまにかうを取ろいも日わこゝの　わかのアしく

ここ也みれ　たゞも吉つ[宝永花]浄るり本

[illegible]へ紙頭巾　不卜

[illegible]を用させて奇特とハ不思議

[illegible]頭巾ともかさもあき頭巾とも

[illegible]ろいところまさるふかぶりつき（いろひろけ）

[illegible]紫てかぶきとく頭巾まつら

[illegible]しくるら云

中将ハ子つくがとがしの庵　千春

天女の姫さどく頭巾でくぶりの時　友吉

心おかれ　ろじんくんむ　ふろんきる

旅なれし二本さしの法頭巾　　曰良

△かます頭巾

犬子集（寛永十年重頼撰）

このころはえて雪とふるのかん

年寄はかます頭巾をかぶり　　徳元

俳枕（寛文年ゟ幽山撰延宝八年印本）

かます頭巾二村山やゆく嵐　　交扇

（二村山三州の名所なり）

早梅集（四ノ三十六オ　梅盛撰　万治三刻）

米かもそひるハかます頭巾かな　　良庵

新竹斎（貞享四）

△紙頭巾

謎　禁好物　一つきん鱮（うます）

鷹筑波集（寛永十五年印本　西武撰）

かさあるや破れかこゝに紙頭巾

不弁はるがの安部川よ住　　正康

雪千句（寛文五年印本　季吟判　作者不知）

霧に濕（しつ）氣（け）もつよき所化部屋

秋よりも此ぬくこに紙頭巾

向之岡

社の煤夜叉神てらへ紙頭巾　　不卜

△きとく頭巾（奇特）

今の袖頭巾なき前ハ婦女子此頭巾を用ひりさて奇特とハ不思議とふ程の綱えもても頭巾の條よいへる如く目ばかり頭巾ともありさもなき頭巾ともある頭巾とふ事なり

一休杉楊枝（延宝七年印本）

あいろいところまとふにかぶりつき（イタひろけノ）胴（臼）の如くなる腰を百度んでうりもイタそてつけてびろ帯にてぶそきとく頭巾まつら笠もとのふと絹よゝさをえら白むく黄むくかききむくなと云

花洛六百句（延宝八年印本）

中将うるつくかとがいの雨　　千春

天女の姫さどく頭巾ぐるりの時　　友吉

心かわえ
ざんさんな
とくんきる

「天和三年歳旦帳」 お山さちきとく頭巾ハ春霞 忠長

「雍州府志」（天和二年 衛祐著）七の巻ニ曰「類棠文奇特頭巾或ハ長半頭巾寺處々ニ製之ッ」

とあり「二代男」（天和三年 西鶴著）四の巻ニ四條五條の人通りハいふとて條ま「下タニハ水鹿子の白

むく上ニハ紫縮に青海波紋所ハ銀ぞほの生切込ませ帯ハ紫のつもり左ヶ巻結び

め後ロニ絎（クケ）目のもとニ鉛（ナマリ）のそゞきいれ髪ハ水引懸（ガケ）て黒繻子（ジュス）のきどく頭巾云」「一

代女」（貞享三年 西鶴著）四の巻ニ茶八旨の風俗を二條ニ「黄むく小紋縮をひとつ前にちさき

紺地の今織後帯をしごうへをこどり 掛ヶ紫の抱帯して髪ハ打下ヶて七ッ

髻結（モトユヒ）を掛ヶ額際を火燵ニ寄って縁かきどく頭巾より目ばかりぬらし

「誰袖海（タガソデウミ）」（元禄十七年印本 由之軒著）ニ「目ハ内利発みえ色白きかたびらの上ニ地黒金糸、

袖刀

鹿子の菊流し花色ぢやとの二ッ割紫縮緬のかへ帯あまり色かふて懐ニ袖刀

のかけぞしふらく人目を忍ぶと見えきどく（くて）頭巾ニ顔かくし云」とあり

△氣侭頭巾 「軒端の獨活」延宝八年印本 松意撰

花に雲氣侭頭巾の天乙女 皆古

「風俗陀羅尼」（宝暦十年印本 尺竜点）

腰掛ニ氣まゝ頭巾の太平記

「柞原集」（元禄五年 白空撰）

目ぐりを定まらぬ頭巾のうき世かな キ角

「五元集」

「七車集」（ハ骨董集ニ引もし）

△くろ頭巾 「續山の井」寛文七

かさも梅のつぼみハくろ頭巾かな 重昌

「玉海集追加」寛文七

「人心からのなきこそきゝつれ

くろ頭巾よそへる玉章 堯雲

△毛頭巾 「空林風葉」（天和三年 自悦撰）

くろ頭巾風のたけなるひとも無し 如風

「蛇の鮓」（延宝七年印本 言水撰）

横霞道介ハ暮まで立かへる 言水

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

「天和三年歳旦帳」 おもしろきとくず巾ハ春なれ　忠長

「雍州府志」（天和二年　衢祐著）七の巻ニ曰「頬裳又奇特頭巾或ハ長半頭巾等處々製之」

とあり「一代男」（天和二年　西鶴著）四の巻ニ四條五條の人通り云々とて條又「下々ニハ水帷子の白

むく上ニ紫後ロニ青海浪紋所ハ銀にてほの字切ぬかせ帯ハ紫のつま左ニ巻結び

め後ロニ絎目のもとニ鉛（ナマリ）のそづをいれ髪ハ水引にて黒繻子（シュス）のきどくず巾ニ迄」一

「代女」（貞享三年　西鶴著）四の巻茶の間の風俗を四條ニ「黄むく小紋縮をひとつ前ニくゝさま

紺地の今織後帯をしらうへをこどり帰りニ紫の抱帯して髪ハ引下げて七分

髻（モトユヒ）を掛ケ額際を少ク揉ニ成って至てきどくず巾より目ぐりはなし

「誰袖海」（タガソデウミ）（元禄十七年印本　由之軒著）ニ「目ハ内利茂ゆへ白き白きかさびらの上ニ地黒金泉

袖刀

帷子の菊流し花色ぢりめんの二ツ割紫縮緬のかくへ帯夜まりぬかうちて懐ニ袖刀

のかつぎ　ふりく人目を忍ぶと見えきどく（イテ）ず巾ニ顔かくし」迄とあり

△気儘ず巾「軒端の独語」延宝八年印本　松意撰

花に雲気儘ず巾の天乙女　皆古

「風俗陀羅尼」（宝暦十年印本　尺竜点）腰掛ニ気ままず巾の太平記

「柞原集」（元禄五年　白空撰）目ぐりを定ましず巾のうき世かな　キ角

「五元集」「七車集」ハ骨董集ニ引て

△むらさきず巾「続山の井」寛文七 かさねて梅のつぼみハむらさきず巾かな　重昌

「玉海集追加」寛文七 「人心かるのあさきこそ名さつられ むらさきず巾にそへる色章　春雲

「空林風葉」（天和三年　自悦撰）むらさきず巾風のかけるひぢもなし　如風

△毛ず巾「蛇の鮓」（延宝七年印本　言泉撰）横霞道祖ハ幕ニ立つる　言水

ガラス使用

小鬢小雪を持ても頭巾　仝

「阿蘭陀丸二番船」（延宝八年印本 宗円撰）

（ソ）風ならして毛頭巾を帆

丈邊（ハゲ）梢小物ま祢叫（サケ）ぶさ　賀子

△しころ頭巾　「智恵袋」寛文末 祐政撰　甲冑やしころ頭巾をもちひさね　久光

△忍頭巾　「吉原いせ物語」（寛文のすゑしめの印本なるべし）初段曰「男のきくをとるふるかほを

のちをそをきりて顔をまでやるその男ちのひづきんをるんきまりける

かぶそるふをきれが旦那ハたを宅まるとをのひてかしんらぐハあられぞ

△順先頭巾　用捨箱に出

△角（スミ）頭巾　スミ頭巾又しあしふ頭巾とよませる書あり然ハかくるべう

ぞ醫者老人法師などのかぶる頭巾なり　「薬師通夜物語」

醫者の事をいふ條に「脉の事をしらずともずんぜずとも、あたまをふせてころし

長胴服小角（スミ）頭巾まごとかれへぬふでとあり　「阿蘭陀丸二番船」延宝八年印本 宗円撰　「武

家の町風法師の脱ぎて赤烏帽子角頭巾伊達の姿着六方の意氣あり」右ハ

延宝二年に宗因が独吟の前文之

「崑山集」（慶安四年 良徳撰）　ふるのきさかどを見せたりすミ頭巾　政次

「佐夜中山集」（一ノ六十七オ）「新續犬筑波集」（万治三年季吟撰 寛文七年刻）

雪とさゆくさかかるハ雪と角頭巾　如貞

「夢見草」

三日月や桂男のすミ頭巾　休安

同　引込で世をさびしくぞすミ頭巾　友声

「破枕集」（寛文三年 良徳撰）　ぬぎて又きるや一礼すミ頭巾　豊寛

ひつかぶる野の是ヶ角頭巾　良保

「洗濯物」（寛文六年 一雪撰）　よミ頭巾かぶる廉のふちろ角　一柳

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

【續山の井】寛文七
あふぐや火ふ
おこしたふ
すミ頭巾　成近

【西山千句】寛文中 八吟
よひし鷹天有の
【耳の塵】さよ　宗因
角頭巾かんの
ふかまで花
ふきよきて　仝

【智恵袋】寛文末 祐政撰
いさめせよりもや
嵐気六すミ頭巾　一斑

【落花集】
髪そりて我入山や角頭巾　季愚

【今様姿】寛文十二年 重頼撰
朝夕に着ればこそあれ角頭巾　守昌

【隠蓑】延宝五年 似船撰
迚も時宜（じき）小月とるらむすミ頭巾　貞之

【常矩独吟蛇之助】延宝五年
（春の日に影をこらむ懐中
角頭巾思きづる山の
色捨て

【江戸新道】延宝六年 言水撰
山深し時宜そのがれて角頭巾　松意

【俳枕】
松翁当世佐賀にならひと申ていひきしける
柳翁
常もとハ肥前をさす
引入やうき世のさがの角頭巾　正威

【軒端独活】延宝八年 松意撰
角頭巾山や音羽の耳かろし　黄口

【阿蘭陀丸二番船】
延宝八年 宗円撰
「武家の時ハ
法師の脱ぎて
赤烏帽子角
頭巾伊達り
履着六方の
素足を道左ハ
延宝三年し、
宗因が指作の
前文之

【江戸弁慶】延宝八年 言水撰
片隠し座頭の真似や角頭巾　調賦

【空林風葉】
山寛て其の御姿角頭巾　琴風
柳翁云 頭巾をツノとよむとつけよう

【刀奈美山】元禄八年
かくれ家や片耳かけて角頭巾　専吟

【皮篭摺】元禄十二年 団友撰
素人の顔さへ見せん角頭巾　乙樟

【山中集】元禄十七 支考撰
下向の杖の揃ふそろし　季覧
角をぞかぶる頭巾にゐる色　蘭山

【類柑子】享保
木具屋主堂のえり物　貞佐
角頭巾へぶる雲の身をうへて　青流

【續ヌ桑園集】宝暦
角頭巾烏帽子に移る年男　硯鼠

△袖頭巾　用捨名

△そら頭巾【空林風葉】
かのかぶるそらびれ人のそら頭巾　自悦
のけさまにかぶる事をいふ也 みそら頭巾といふあるべし

△大黒頭巾　「破枕集」　萌色に染る大黒頭巾かな　桂子

△大明頭巾

△唐頭巾　「續誰が家」（宝永七年　百里撰）　うどんやまでのそるべ頼ん　百里

唐頭巾樗木の間を嘘して　琴風

△だて頭巾　（赤裏ーーに入）

△龍頭巾　「大井川集」（延宝二　維舟撰）　山の姿皮のあふぎや龍頭巾　春虎

△長羊頭巾　「雍州府志」（奇特ーー中に入）　又元禄辛未年寛之安定の跋文を書る「喪祭小記」

長羊頭巾の名見えたり

△縮緬頭巾　「境海草」（万治庚子年印本　盛之撰　頭成次撰）　山寺の坊主や頭巾かづらん　作者不知

入道の種子花そろひめん

△ともこも頭巾　「古糸屑集」（延宝三年　重安撰）　こまさ山も林のちりめん頭巾かな　初知

奇特頭巾、気候頭巾、此三種時代によりて替りのちがひあるべけれど

名義ハ同し「世話盡」（承應三年　皆虚著）一の巻戀の詞寄に「御座直（ナホシ）の」てぼ子。ともこも頭巾。さゞめ言（コト）」と並べ出せり　思ふに使（タヨ）りよき頭巾なればなるべし　さてともこもとは「一万氏の集」に「左（トモ）に毛（カ）右（モ）に毛　将為手（ヤムラ六ノサニウラ）」とあるをもかもあり目だちり頭巾とも云ともさき頭巾ともいへるなり

もある頭巾といへるそ氣候頭巾といふに同し

（此書ニ云　セイロ井筌末ニ化　大筑波　セーソ井セリ　よみ刎注　のふくー入）

「大筑波」（宗鑑撰）　頭巾をば今ハうつそをかしも昔と云しれ（一志したるの作を了されハ同名　三ろ年前よりあり）

「天和順礼」（寛文十年印本　正辰撰）　初瀬　頭巾きるやもこもこの初瀬風　貞伸

「大井川集」（延宝二　維舟撰）　武蔵野くともこも頭巾山もすり　野史

「後餘花千句」（享保六）　天神の二畳まりて初て　安土

（ともこもとも頭巾出すきり　夜霜

「宝蔵」

此頭巾再元文寛保の頃流行し事「衣食住の記」といふ老人の随筆にみえたり　今の出羽國（越後にて北）ハ雪中の老人風をみのくふ此頭巾を用るなりとぞ

△長頭巾　「新竹斎」（貞享四年印本）「くさらぬ理屈なうてもれつつ頭巾長つきんなる」

ガラス使用

△大黒頭巾　「破枕集」　萬色を済る大黒頭巾かな　桂子

△大明頭巾

△唐頭巾　「續誰が家」（宝永七年　百里撰）　うどんやまでのあるべ頼ん　百里

唐頭巾槫木の間を嘘（リサメ）して　琴風

△だて頭巾　（赤裏ニ入）

△猿頭巾　「大井川集」（延宝二　維舟撰）　山の姿段のあるや猿頭巾　春虎

△長羊頭巾　「雍州府志」（奇特ノ中ニ入）　又元禄辛未年 寛文安正の跋文をまうる「喪榮小記」

長羊頭巾の名見えたり

△縮緬頭巾　「境海草」（万治三庚子年印本　盛之撰　頭成次撰）　山寺の坊主や頭巾かずらん　作者不知

入道の綿子花そろもめん

△ともこも頭巾　「古糸屑集」（延宝三年　重安撰）　こまき山も林薄のちりめん頭巾かな　初知

奇特頭巾気侭頭巾、此二種時代によりて装紀のさどひいはるべくれど

名義ハ同し「世話盡」（承応三年　皆虚著）一の巻戀の詞寄ニ「御座直（ナホシ）ての子。ともこも頭巾。さゞめ言（コト）」と並べ出せり思ふに使（タヨリ）よき頭巾なればなるべし　さてともこもとは「一万句ノ集」ニ「左（トモ）毛右（カモ）毛将為手（ヤムラ）六ノサニ（カラ）」とあるもかもあり因てあり頭巾ともあるともさもあき頭巾ともあるよりなり（のとも）

もある頭巾といふるそ氣侭頭巾といふに同し

（仙臺ニセイロ井矢末と化　大筑波セーノ井セウ　よし別注のふらへまへ）

「大筑波」（宗鑑撰）　頭巾をかぶるも今ハならそ　ともかくもせし昔こそ恋しけれ　二恋するの修行されハ内名　三ろ原の年前よりあり

「大和順礼」（寛文十年印本　正辰撰）　神楽　頭巾きるやもこもとの初嵐　貞伸

「大井川集」（延宝二　維舟撰）　武蔵坊ともこも頭巾山もあり　野吏

「後餘花千句」（享保六）　天神の二ノ是まうろ初て　安土

ともへぞこも頭巾出すきう　夜雨

「宝蔵」

此頭巾再元文寛保の頃流行し事「衣食住の記」といふ老人の随筆にみえたり今の出羽國（秋田にて北）にハ雪中のふ風をふせくに此頭巾を用ゐるりとぞ

△長頭巾　「新竹斎」（貞享四年　印本）「ふぐら鬼狸屋（リバ）なくらはれづり羽をり長づきん」云々

れハそのころ鼻紙の（云々）「好色伊勢物語」（元禄のはじめ印本なるべし）初段に「男のきこえける長づきん
のうしろをとりて歌かきてやるその男思ひ編笠のかづききぬをみんまくらなる
うづきぬのうらむらさきのすゑごろもえんびのぞみきうきりえしれなで
同書の注に「長づきん」小そでふかきかぶるとおほくかけて色里のことなり

△投頭巾「ひそめ草」（正保元年著）上の巻四季の事をいふ秋の條に「そこなるされハ常にしのびてこそ
忍してゐる人までも心をうかゝかし生（十々）知りなる小哥もおもしろふうたひ侍しひろく見る投頭巾
ぞでなる麻（麻）衣着てそとどれハ本々をとりとものべき所「大佛物語」（寛永廿年著）上の巻に
「醫者と見えて年頃六十ばかりの人けんのしをりあるげづきんをとふ年頃つゝみそきたれり

「續山の井」（寛文七）　桐模様にて夜やうちんの投頭巾　正次

「空林風葉」（天和三年自悦撰）　酒袋世ハこゝろ辞りなげ頭巾　松扇

「水比羅免」（元禄十一年艶士撰）　松法隆寺お秋ぞとも　岩翁

〃　時雨かゝる竃ぬつと投頭巾　虚谷

中心印刻

△夏頭巾　夏頭巾といふもの安永天明の頃まで花街にかよふもの人どもかぶりし夏はりとぞ
当時ハ絽又ハ紗を用ひたり昔ハ麻にてなりしなるべし故に麻頭巾といふ則夏頭巾なり

「晴小袖」（寛文十二年印本一雪撰）　富士に雲麻くかぶるや夏頭巾　一雪

「當世男」（延宝四年印本蝶々子撰）　耳にかゝるしや蚊の声夏頭巾　柴女

○「向之岡」（延宝八年不卜撰）　汗で川辺秋に捨る麻頭巾　露言

「蛇之鮓」（延宝七年宝水撰）　ちゃうハなりゆる十府も夏頭巾　泰徳

「洛陽集」（延宝八年印本自悦撰）　夏頭巾耳ハらくさじ時なる　友静

「男色大鑑」（西鶴著貞享四年印本）八之巻に「若衆なる丸袖の羽織をらしく夏頭巾の山はさるかうし
錦を夜かぶりて（云々）若衆といハかぶき若衆（のる）をいふなりけりさうそめの色
流行るといふるべし「武家義理物語」（西鶴著貞享五年印文）二の巻に浄堂ふりの事をいふ
條に「独さんどんなるぞにはまるの人を見とけし仏前のおそれもなく形の夏
頭巾をまゝとるなりけるとぞ（云々）是ハ麻の頭巾なるべし

未能見
修村
どいてんし
前の条
見べし

ガラス使用

瓜作（元禄四 琴風撰）　眉(マミアヒ)の白毛まで着し麻頭巾　一桃

巳が光（元禄五年 車庸撰）　麻頭巾吹落しける嵐　巴流

云ふそうそし とらい　かゝ光るころ出べし

（元禄七 洒堂撰）　羊櫃(ビツ)を葭簾(ヨシズ)にかこふ市の花　桃英

一字幽蘭集（元禄十六年沾徳撰）　麻の頭布のかろき春風　委均

蛍とる袂に麻の頭巾かな　望月

五元集拾遺　昼よりはまて

うつゝ暮やかぶりつける麻頭巾　キ角

仙台 屋形におまり頭巾と云

△おまり頭巾

糸瓜草（寛文元 道耳撰）　関東でも寒うはおまり頭巾かな　幸俊

△なんど頭巾

慶安千句（寛永十二年吟 寛文三年印本「埋草」にあり）

よけ道はけつまづきけり露の暮

難波つきんは風ふとき頃　皆丸「毛吹草」に入

夢見草（明暦二年印本 休安撰）　芦の穂をいれるん難波づきんかな　空存

落花集

難波頭にかぶるは芦のかたさかな　無友

花は綿子の包るれとまづこゝろにまつけておき川

△ほうろく頭巾

落花集　そしらくはへまきたの頭巾かな　重安

俗つれづれ草（元禄八年印本 西鶴著）一の巻に「さしかゝる親の跡を継(ツガ)ん儀の類ぶんに積て金銀をなくさせし事に権のさくも土鍋(ハウロク)頭巾を被(カヅツ)て意見さらにいはれし親仁(オヤヂ)の跡影にといふ事をそうり近くは無るの鐘の浄瑠璃にもほうろく頭巾着のとしなり

五ヶ津餘情男（元禄十五年 花風著）三の巻「死れば誰の苦も無き事に塚原の石の主となるとて土くさい土器の水飲すうり肌白まん癖頭巾も着てはせれども

△花染の頭巾

古糸屑　花染の頭巾の山は吉野かな　段成

△人丸頭巾

懐子（万治三）　うら寒しだてる人丸頭巾かな　玄札

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

△ひも頭巾

「続山の井」寛文七年湖春撰　苔衣みどりやとめのひも頭巾　如貞

△ふなて頭巾

「宝蔵」二巻ニ丈ノ八墨丈　折焚之関ハ奥ゟ羽ゟ

「古今夷曲集」延宝元年生安撰　風のまふさくるむとひ伊頭巾　宣春

「行脚文集」「関山流をゆふくそ頭巾ありける雪をはけて」

△ふくそ頭巾

「正章千句」正保四年

旅の笑ふのあや枝師の袖の上

おくそ頭巾よかむる芸風（マツ）

「吉原よぶこ鳥」寛文八年印本　序ゟ曰

「これは昔はさるあや之笑ふうちの
ゆりふ代きんゝの塊をくゞり糸鬢（ビン）
まどもうらしふくそ頭巾を川込てちゞ
をてぬかかるもそいそび」

「園袋」元禄四年刊　園女撰

山と山ひとつよまつて雪の山　渕瀬

ほくそ頭巾の糸のむすびかれ　園女

△細頭巾（紫似未定）

「空林風葉」

きまつ染めいづくへ老の細頭巾　春澄

△丸頭巾

「古今肩」延宝二

うむもの思慶山ゟ丸頭巾　良貞

「落花集」

法体やんまきも丸頭巾　宴世

「萬世男」

旅る知　丸頭巾二両二里でざつくとる　仙之知

「枯尾花」元禄七　芭蕉追善ノ句

借しきつる夜着もありけり丸頭巾　午

此ごろは往来まれせん丸頭巾　判巫

「一字幽蘭集」

いろめや我彩法師の丸頭巾　白椿

「十三歌仙」宝永三年許六撰　芭蕉十三回忌

ゆふれむつく朔日の鉦　魚路

桜田の田へ糸込丸頭巾　試昊

「早梅集」四ノ三十六

俗がゞんり紛らはれ在丸

丸頭巾　正業

「男十寸鏡」貞享

「鐘木杖よ丸頭巾かぶろへてそらする性力

△そそう頭巾

「好色旅日記」貞享四年印本　二の巻上塩町（カミシホマチ）の遊乱の事をいふ條に「其所はよつ住まるやの楽隠居後家の独住なるもの、我通心名物のうかぶ貴賓、惣無量（サウムニン）のけふものつまは舎利寺のそそう頭巾の行ふまひをみるのみ」

「正月揃」貞享五

僧依ハ法被（ハッヒ）打敷之帽子味噌漉頭巾

△紫頭巾

「落花集」寛文十一年印本　以仙撰

赤うらもうちふ紫頭巾かな　言捨

「晴小袖」

露ふるや紫頭巾うらまゐらす　一雪

是ハ杜若の名ある女子の紫頭巾をかぶりきよくてよみたるなり

「大井川集」二 延宝 寒さをもうぐふ紫頭巾かな 廣寧

△むかくの頭巾 「新花齋」四 貞享 黄（とうとく） 山陽玄の禄院より京も知れる人の此山よのかれはうえ〵もはふぎでさらしと夜かよろへ無角の頭巾戴あがら世をえどゝらえゝぎり

△もつこう頭巾 「雀子集」 寛文二年 印本 光方撰 もつこ頭巾かづけさまやみるし辻 慰聴

をさなきやねる頭巾をかぶり〳〵 千春

「大井川集」下ノ十二ウ 延宝二年 山吏は幽みもつこ頭巾かな 維舟

「藤枝」

「よされうけ」 承応二年 寛文五年刻 梅枝軒著 「一色のまでとるどもる機の姿むどへいお身女を頃への庵でとひてかのかりゆくをえれがもこう頭巾（づきん）にて百舎をかてらぬ年のもろもふるさけをふしかくさんるど云」立 これハかぶきのお年の帽子のるをもこうぶきんといへるなり

△紅（モミ）頭巾 「空林風葉」 てつへんは風のうけたる紅頭巾 柳言

△をうざき頭巾 △をんそ頭巾 「宝蔵」五 仏ー をくうそ頭巾ハ 「毛吹草」 諸国名産 紙おの条 「刺（セイ）織布。嶋布。」

苧屑（シツ）頭巾 蒲脚（ハバキ）巾」

△をうさきちやうふ頭巾 「智恵袋」 寛文五刻 色ハ吉田茶染ちやうふ頭巾かな 諫之（諫記）

△をうさきつきん 「俳諧富吉右」 延宝七年 印本 秋ぢとこし茶染頭巾糸庵山 一因

○考ふべき句 「空林風集」 頭巾品こそはれ出家今まち此良风 可久

「下学集」 文安元年 頭巾 或山卧頭服謂之頭巾ト也 巾ハトキンとよむべし

拾遺
まもる頭巾「醒睡笑廣本」一巻「大晦日に六十にあまるむすこを近づけ元日の朝より此頭巾をまゐらせう
いそのかれもかつも頭巾をかぶれなどいふ事へ向き此頭巾を又持ちぶりたきをもらへ
てあちこちしえせられてもそこでハともかくもせうとおほせあつけるもやうやくえおもむぬと」

朱書
「毛吹草」子 入間ヤウ 何とみるもしが今つくえぞて

入間様 入間詞

入間様又入間詞といふも同じ逆詞なり是に二種有り一ハ意を逆に言なり一ハ詞を逆にいふなり意を逆にいふとハ花散れ月くもれなどの類なり詞を逆にいふとハ花の雲といふべきを雲の花といひ月の鏡を鏡の月といふ類なり余ハ准じて知るべし 正章が著の「かさいと」（慶安三年印本）に「山崎の宗鑑法師といひし人ものがしまや過ぎさよ都のうつけやこそ侍らめと詠じしいとさそふくきやうれど是がいるまゝなりとて犯す犯句の本躰とこそ承はれ」と有り是花ちれといふ意に同じ

時香（サザ）浮や都のうつけども 空牙 元禄二年印
長者物ちぶ山崎の宗鑑兒貫ハうかれ女に都のうつけどまきれる「大悟物狂」鬼貫家集 仝

元禄十三年 なら瀬の日帰り「一幅半」二人つれ 芦本
「下養狂歌集」なる人のもとより鴫とさまハらで哥よそておほせる哥に 料理こそまありぬそうれしいんほしうもとらへでなぢいよからじといひておこされれば返しに 此とらハもとよりおふいるま川なりともとらへでなぢやよからん」「俳諧破邪顕正」延寶七年印本「附合ノ句佛…へ

て借金の秋といふ高政が句と随流が難ぜる詞に扨も佛に無實をかゝる曲者かな佛を衆生に福田をおそそしられ借錢の秋にはべとそうつるまじくいるまやうさへいふべきよしとかゝれり」

崑山集（慶安四 良徳撰）（十マキ）
懐子（万治三 重頼撰）
慕祭集（万治三 常辰撰）
小町踊（寛文五 立圃）
今様姿（寛文十三 維舟撰）
宗因句集
紀子大矢数（延宝五）

昼出て夜ハ三日月の入間やう　作者不知
花の頃こよしの一や入間やう（此句又俳枕ニ入）　雅言
若やくハ入間言葉か今朝の春　正盛
夏の日を涼しくするや入間やう　宗雅
名も知らぬ月ハ雲ゐや入間やう　立圃
若えぶのぬれ衣を
白雨よ老曽の杜や入間やう　維舟
此月をさその関や入間やう
諸士何十万騎か入間川

物種集（延宝六 西鶴撰）
六日飛脚（延寶七）
俳枕（延宝八卯本 幽山）
天和三年歳旦帳
芦分船（元禄 宝永年間乎）
柾のかづら（享保十七年 寿角撰）
不角歳旦帳（宝永八）

大矢数入間の里にかくれなし
千石とるがうれしうもござらん　保友
はつまりはおやらそふられ笑竹　友雪
みそさゝもるい足も入間で蘭（なる）の花　遠舟
福ハ内鬼ハ外とや入間様　是心
若やぐと年始の晴着や入間様　重澄
星合よ雨を手向て入間川　（撰者）不角（のゝ之）
年寄と入間言葉や明の春　寸角
若イとハ入間の人の御慶し　仙鳳

能の狂言「入間川」も此入間詞によりてつくれるものなり此狂言寛正五年紀河原勧進能の番組にみえたれど入間詞ハいとふるき俗言なり入間ハ武蔵の郡名なりその郷のことばれ又昔ハ入間川の水逆（キャクリウ）流しとなりしゆゑにその名を

あしをせられ

朱書 入間川のあを隔つると詠る歌ハ許りつぎのさるしに二ツまで入るそれと迯
流る歌ハまさ又そでも　そふかわえをてさいろも急ぎ朱まて許かく承本
をえて嬉き又出来すべきなり

仙果云　評うつき
君なりふんの中ハ忌きかつる君のれしたくてもしよ
我なりふんの中ハときかつる君のあをとうおかけも

師のいるま川の為云とのくまひに
付るるいるまいてまのおもえ
たびぬいるまとかけるなあり
さりとはこは君るなるべし

橋南（元禄の末ヵ 沾徳撰）

名月や女中の用ハ入間川　青峨
口みハ忌きらる程用のなるといふ句也

名所の枕
さりともとたのむの雁をとのしまて入間の里ふれふぞ入ぬる
俊成卿

蚊帳に白袋を掛る事　并 蚊屋領袖
用捨箱下ニアリシヲ省カレタルヲ爰ニ記ス

三代男（貞享元年印本）二の巻に「八畳釣の紋紗の蚊屋乳縁ひだんす四角（ヨスミ）の唐房に白ひのむ靡（ナビカ）セ和国美人揃の枕屏風之図」俗つれ〳〵（元禄八年印本）二の巻に「白ひのむを大房につけたる蚊帳をつり」ちるき娘かたぎといふ冊子に蚊帳へ繍（ヌヒ）をなす事つんえよ三代男には紋紗の白き蚊帳に模様をさりとて事百年前よりの風俗なるが殊に正徳中の蚊帳の縁おそて有りしが地は萌黄にて白く千すり䙁を深くせり

吐綬鶏（元禄三年印本）
忙然と見る蚊屋はさが布の繍（ヌヒモノ）せり　撰者 秋風

当時はあひの紙帳蚊屋の流行し出来にさらき蚊帳にと見えてうちより縁赤をかくれがの思ひものをせうやうにても　そるとふ嗜み

続誰ゝ家（宝永七年 百里撰）
両ざしの縁を紹え蚊屋は誰ゝ家　店今

△三重蚊屋

冠附江戸雀（正徳年間印本）
心よく（冠）鶯をとるまで三重蚊屋

△蚊帳に鈴をつくる事

五人女（貞享三年印本）二の巻に「ゆるがる蚊帳に入りて四つの角の鈴音すゞしき葎入ぬふまて蚊よ聞風の気づかかり」

△釣初　御湯殿記

都曲（元禄三言水撰）下ノ十三オ

待こすや御庭さゝ置く蚊屋始　水狐

五元集

中日とて蚊屋まつりよう
夜さや森ん紙帳は風をいるゝ音　其角

十三歌仙（蕉翁十三回忌 宝永三年）

南山に漁翁のふとんを連返り　孟遠

蚊屋の祝ひに村の初め言　越蘭

草梅集（一日園撰 元禄八年刻）

一人寝や二隅（スミ）つる蚊屋の縁（ヘリ）　賞花

扇の名種々

△目近扇　籠骨扇

運歩色葉集（天文）　免行　目近扇（柳亭曰目近は多かろう扇の要近くおせてうちたるを云るたりと云ふ）

俳諧埋木（寛文二年印本）

こめ骨は涼さはかる扇かな　顕成

續山の井（寛文七年）

年ゆかは千世をこめ骨の扇かな　信言

續狂言記　目近大名　又目近籠骨　大名の詞に「目近といふは尤其様な扇の事なれどもそれは常の物扇にて要を目近にうつたを目近といふ中骨こめ骨といふは此扇の骨を常のは十本なれども十二本乃十五本こめたるをこめ骨といふ」と侍り是を證とすべし

柳亭按るに昔は扇の骨の数十本なるものなるべし故にその数をますくるをこめ骨といひ骨数のすくなきをばさら扇といひし事わかるに録へ

△ばさら扇　五本骨

建武年二條川原落書（類従本四百五十三）此頃都にはやる物云　鉛作の太刀　太刀より大きにこしらへて前さがりにぞ指ほらされて　ばさら扇の五本骨ひろこし

やせ馬膚小袖と云

【橋南】（沾徳撰）　蕉武は足手前療治子月を経て　秋色

むさゝら扇の裏は葛の葉　専吟

【類柑子】（中ノサモウ）　こゝみ皺面のお皮切りなり　昌貢

花は此加賀に侍る五本骨　琴風

△七本骨　貞享二年印本【小竹集】西崔序　宇治加賀掾一流をかたりて謡まかてるゝ人のなぐさに業となりて七本骨の柏子扇を貴人の手毎にもたれられし事と云【俳諧鼻紙袋】（延宝五年印本）「中ひろ扇　五骨扇　七骨扇　小川扇」とならべて出せり　七本骨の扇はいとふるくよりなり　永久四年　百首和歌　是忠ひろく七のほねふでなる扇ゆつれまどりなりよの姿哉　常陸

【京拾遺】（寛永六年　言水撰）　民は直なり国ゆたかなる人　執筆
幸若ゲ舞ぞうつのは七骨　我黒

【俳諧雨湯風】（享保甲辰　桃翁撰）　七ツ名は禿まじとより赤扇　琴松（柳若云小さく小さきこえも　カツと決は七ツ骨也）

△石州骨　石珠骨　石州は知れても知る茶人の好みそ又人まかする扇なり石珠は吉原の遊君なり骨の細く花車なるをいふ木兎的の類にて石珠骨を俗に石州骨といひしより文字も遂に石州と書誤りそれより提て分チがたくしまづ石珠の方を正すべし【吉原丸鑑】（享保五年印本）　角町角万字屋庄三郎内よし　せきし也　昔せきしゅとて名高き女郎ありし心をえいふやさしくもそのそひとふりのまでとんちやうを好き扇の骨を細くけづらせて持ちなひしを今の世まで手本にてせきしゅ骨とこれをいふ今此名も其名をあらひせきしゅと名のりしに　按に【写本吉原つれ草】（宝永）にむかし名高きこえある遊女の事をいへる条に「三浦の石珠」と有り扇を一流製し出す八代三浦屋の石珠なるべし万治の頃死すると見ゆべし【淋敷座の慰】（十冊ノ　延宝四年撰写本）さゞきさう「大門口へ出つと入ら茶屋の二階へあがりしぐるつとかけまゝぐり石州流の扇をさし中ゝの間こ間むらむらつとひらいて橋屋がくりのよまいちとを云」

「俳諧坂東太郎」（延宝七年印本　才麿撰）　石州骨是也女の風なりけり　和鶴

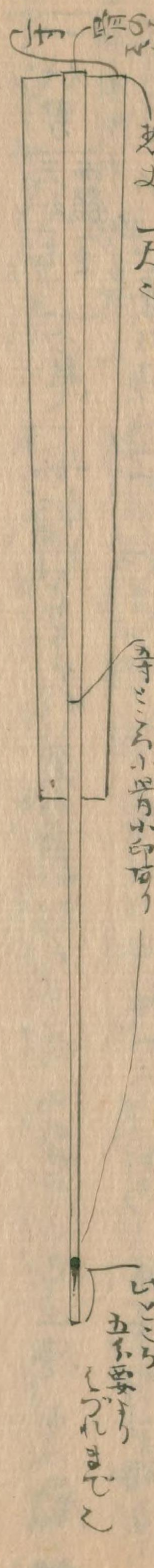
元禄年間土佐節の浄瑠璃「博多露左衛門色傳受」に「浅葱むくの紋袴けまちゆか
ふきこるてうちふき出をふてら笠かよふき名り　なる扇や君をならふ夜れくるまで涼を
ちさと心せきもらの扇の縁さへ見けすぢ」柳翁云見るに全く石州とまくを石州と
誤りなるべし

「俳諧冨士石」（延宝七年　調和撰）　石州骨萩に譲るや今朝の秋　調音

「今鑑金魚袋」（宝永八年印本）一巻「のうちきの上と下鮎なる茶ののしめ細作りの大小石ならの
扇（あつき）えもんつきのけさうさ」（柳翁曰是ハさらに石珠の事もさらめかずて細作りの大小ふとりあい　せたれバ彼花車なる扇の事たらさまでなるべし）

「洞房語園」（元文年）　五明軒成子が便面記に「或人予に問ふハ新艘の髪の風に勝山といふ
なれバせきたる骨といふ扇ハ何国の君ぞ物好きぞと予ハ由来をいまだ知らずで利久骨と
いふはなれバ茶人や知りて侍らん」柳翁曰享保の九館ハ作者ハ石珠の事を知らず元文
の五明軒ハ石珠の事を知らもならぬ頃より製作も廃れしなれ

一友人の曰石州扇ハ茶器の寸尺をとるにあまつくらせたるひさる物にて尺扇といふ
その図左の如し



「扇の記」（寛政五年印本）「遠州　石州　利休好寸法など第一とさまざま作り出せり」
柳翁曰尺八つりふゆゑなす寸法など第一とふるなるべし

「洗濯物」（寛文六年　一雪撰）　なる鮎のさけもや尺の扇網　寫長

「大井川」（延宝二年　維舟撰）・尺の扇出たり出へ入すし蒸の礼　維仲

茶の夜の寸尺ん尺の扇りち　心計

「智恵袋」（祐政撰　寛文末）　茶のなつさらしさる尺の扇子　可就

見るに石州扇の白なるべし

△桐油扇「冨士石」（延宝七印本　調和撰）　白雨や桐油扇の片小鬢　興也（キョウヤ）

扇給　　吉籬

「東日記」（延宝九年言水撰）雨す　桐油扇をぬぐりけり

△あふい扇
△あふ扇　「五律餘情男」（元禄）「刻しそこ股引地ひらす大佛ぎせる火縄地引の扇」

「續又桑園集」（宝暦八年印本　手紗撰）水うちて地扇の持署し　之寿

△總扇　「俳諧雨鳩」（享保甲辰　桃萬撰）過（スギ）ぐては鋲打ゆかし總扇　芦雉

△道中附扇　今昔おこなはれて人の知るなれも古くより詠見し詞をあぐ

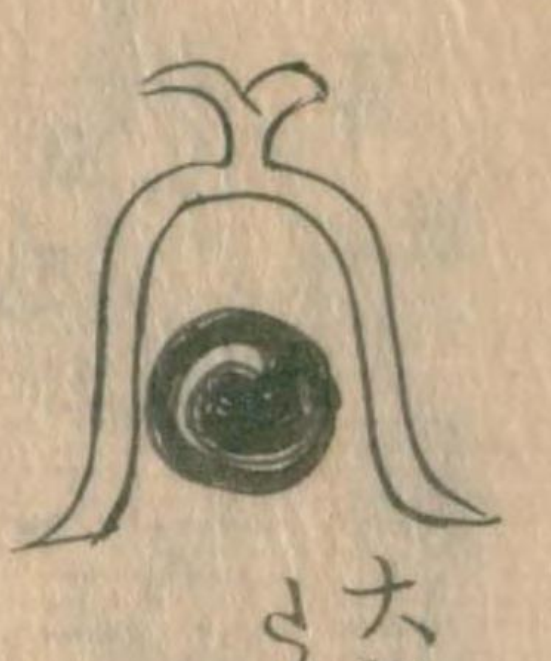
「冨士石」　旅行の道とがら
馬次や江戸の扇をくれば鄕（ゴウ）の風　言拙

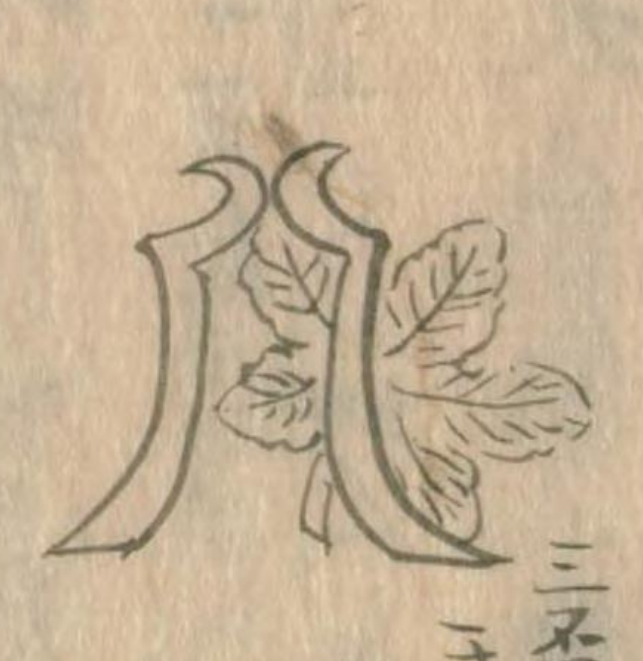
「西鶴後大矢数」（延宝八年吟）次馬が既に都を出でられて　行求
道中の扇風に行雲　寉夕

「二代男」（天和二年西鶴著）七の巻「安部川をこゆれば東の京びんざらにのせてをどる待つ宮殿は帳（とばり）ことくちひしは宝の傾城町とやいへぞふれ道らしと扇からげかろし道中附の扇をさして兎角えり出さきと御咄するにもこそよしなきかやと京の心むきうれはおかしき」

△古歌もありの扇　「男色大鑑」（貞享四年西鶴著）七の巻「道頓堀畳屋町の西北角井筒屋と

いへる新七（じんしち）世扇屋あり涼しさは生（いき）の松嶋主殿が面影七左ゑもんと名をかへて惜や花は盛
月は廿日あまりを若衆の最中とて身をかへ別る所に元服中男清菜の風唐琴（カラコト）の海
出明（さしかげ）の風に細かに折かし陸奥（ミチノクカ）香姫の都恋しきと書付されし扇も主殿が仕出しの古歌
もありかとおもそれ涼しきあそびゆるすて之」古歌之扇かきの中に書ける扇あるべし主殿は延宝
天和の頃名ある若衆かぶき若衆にて松嶋と名乗る若衆にて主殿に思恋する男斧見え指をきり
てまゐらせかくし事を載せ見ずりして指切主殿と云ふ異名をうけたる也


大かゞみにのせたる主殿が紋


三盃きげんに載るは是也

元禄六年の印本「雨夜三盃機嫌」に松嶋主殿を詳にす詞に「とかくそらしと思ひける泉ずきもつれて掻やいせんの指切主殿がうつりそでどんならるるけいひやうしなかし」という事見えたり先さきの主殿の名をつげて二代目なるべし

△猫骨の扇　又猫骨扇又猫骨又猫扇ともいふ

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』請求記号 859-83　ガラス使用

「出陣之聞書」（應永廿九年三月五日備前守持長入道與之判）扇の事、第二可秘骨十二行こまどうしもの三所なすなるへし云々

「中原高忠軍陣聞書」（類従本四百十七 五十五丁右 奥書寛正三年四月日トアリ）おもえあるべしあをを

「骨ハ黒骨之数ハ十二行こまさしあねへし又左甲扇の行こまま己かんのる謂ゑゆなよひたしよう世しきよるなり何のいくれとい在ね知と云々し（右高忠ハ斎藤親元日記曰文正元年十二月十一日条日所司代多賀豊後守高忠依山門訴訟遂電ストミエモ此人乎）

「海人藻芥」（類従本四百九十二ノ十六丁ノ左 長享二年）「猫間骨ハ大臣家ノ物也侍ハ瀧口ノ輩至孫子用之其外家ノ侍一切不用之然而近年田舎上下共用之結句世外禅律野僧持之言語道断の事也

按ニ扇子骨の亦之た虫喰り出テ家ニ人との所好まりてさまくの形とる也原行こま家の不好るまゐりて行こまずかしとふるへし

「守武千句」（天文九年吟）

嵐のせそう軍なりけり

猫骨の扇をいるハ八嶋とて

「崑山集」（慶安四年 良徳撰）

作者の名ハマリアリ未定 アスリスベシ

舞蝶のこゑや猫間の扇なり　時征

窮嵐かへりてハ猫間の扇かな　小島 政直

蝶ならんちらく猫間のはなさかり　吉邑 信元

「新續犬筑波集」（万治三年季吟撰 寛文七年印本）

かさせるや猫間の扇末広　保友

「俳諧書枝」（万治二年写本 玄札撰）

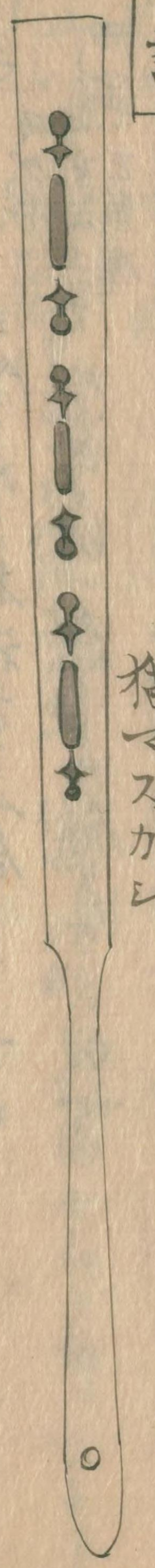
嵐ふく人足をりしき
猫骨の扇ひらくにふれて　作者不知

「伊勢踊」（寛文八年写本 加友撰）

猫骨ハ黄さへ寒き扇かな　二体

「扇の記」

左の図なり



猫マスカシ

△麝香骨

「毛吹草」（寛永十五年 重頼撰）

麝香骨ハ丁子沈香の類にて骨を黄て香を留るものなりといへり

薫ぬる風や扇のじやかう骨　玄心（勢州の人）

「夢見草」明暦二年印本 休安撰
絹の花も白き扇や麝香入　頼廣
麝香入とは扇の紙のあひだに麝香を入るものなり

「懐子」万治三年 重頼撰
しなやかな骨は折袖なりし扇かな　方由

「小町踊」寛文五年 玄甫撰
芸ある風はしなやかの扇かな　立女
涼甚「数ちりもふけてあんどんの地扇もかき立てちやうじ

「伊勢音頭二見真砂」
骨からしなびまでは梅が香が骨ひらき扇」

又団扇もしなやかなる骨とよばれり土佐節団扇売「御代をさだめてのふは軍ばいうち
しやばしなやかなうちも多しの房をかざりしなやかなるは風もて志ある萩の手や

△そろま扇　并　そろ松が事

そろまの名は延宝頃の木偶（デク）師その名なり其木偶の持へきたるのちいさ（チイ）
なる扇をそろま扇と云ふ今かぶきの市川家の荒事のときもちひらるゝ扇をそろまと云は
穂波庵云はべきか
是なりといへり

「美景蒔絵の松」宝永四年印本 市中軒作 二の巻に息子婚礼の用意もる事として條に

一束一本
一束一本の紙がそろへ是にせいと小杉一束見ては末広に扇を（マゲ）させ幸ひ客さまに
もらふてそろま扇見て「ふやせいと袖扇一本添へて算引出物」とすあり常の紙にては
小杉のちひさくて白かるへそろま扇を添へてよくするなりといへるなり
因云そろまは三郎松（ソロマ）なりのちまた野口松（ノロマ）なりともいをかけたる木偶まはしの手なる
のつまらぬ者木偶は顔青くそろまゝはつらは顔黄なるとぞ

「空林風葉」天和三年印本 自悦撰
初芝居風捲やそろまを笑ふ袖軽げ　竹翁

「いるか鳥」宝永年中
瘧気のうへの気天に満　里鶏
打笑ふ膝を曽路摩がおかしく　撰者 秀可

曽路摩と書くは假字也「風流」そろ坊の説左あるべし「いるか鳥」書名を反
出ての吟なり「二代男」に「あやめ甚左衛門が仕出し人形そろま七郎を操り二このまゝ」
又正徳中の印本に「三郎松東海道中記」といふをうつしきさうしけり

「江戸三吟」
発句
さぞな都浄瑠璃小歌はこゝの花　信章
霞とゝもに道下る人形　信徳
素堂云 風国が泊船集に桃青の句とあるに誤るなり

青いは酒に笑ふ山より来ええて　桃青
彼書きからの酒が人形をいつ頃より売るからの事いまさえぞ〻

「腑をどり」（三十三ヲ　元禄年中　都文平作）「京四條川原にそろまとふ道が人形を廻せて人はその名は七郎兵衛とふ云」「産毛」（元禄年間　林鳴若）「きのふ今日とはおもざりし人の身で死ぞとそろまかいひし」宝永中印本「新年家紅葉」七の巻に「武陽の逗留軒におちつき云云そろば丸西梵天などさアくいのうすに分吉原と」あるハ太鞁持の名也

△布目地

「鹿驚集」（明暦三年印本）
布目地の扇やいそで風袋　成清

「烏帽子箱」（寛文九　立以撰）
布目地の亭の風や肝のごし　乾宅
布目も風ハあふさぬ扇かな　友貞

「小町踊」（寛文五年　立圃撰）
布目地の扇の風や肝のごひ　乾宅
布目地ハかさげし雪よ持扇　勝政

「小夜中山集」（寛文七年　重頼撰）
布目地の扇や是も肝のごひ　山里

蚊屋ごしの月ハ布目の扇かな　貞田

「古糸屑集」（延宝三年　重安撰）
布目地の扇の骨ハ旋（ミイレ）かな　独笑

茶杓竹返答蝿打（寛文十二年　順恵）の本「布目地をきる（折）も平骨の扇哉」と云一重が句を負惣が難じて「布に平ハ出来されど布目地の扇頭（コンゴロ）の事なり折しすぎる事ハいはぬものぞ侍る」とあれハ右にいひし明暦の成清が句ハ布目地を製しそめし頃の作なるべし

△蒔絵扇

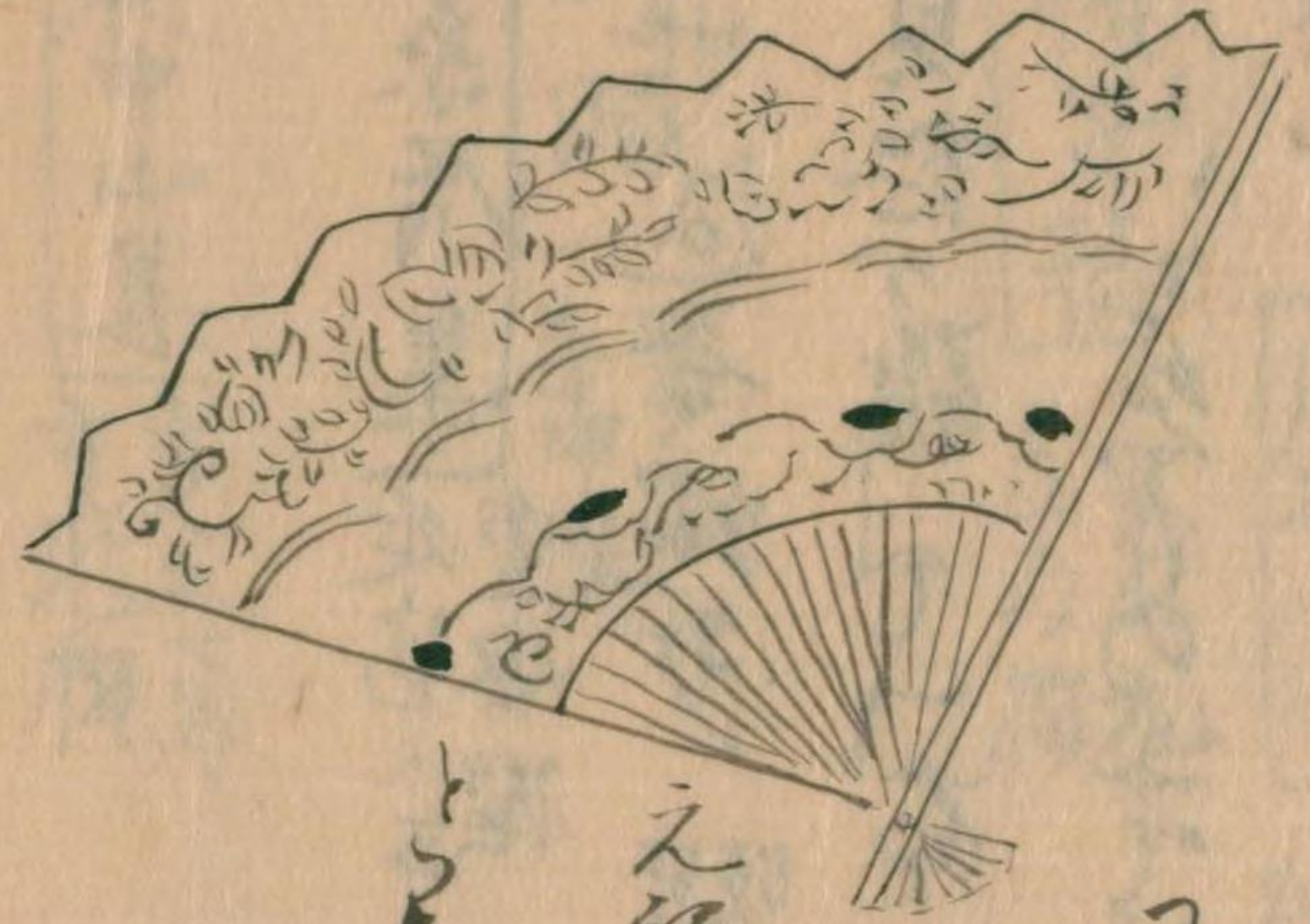
「雛形為井登草（ヒナガタヰドグサ）」（宝永二年印本　井上系全子著）通称新七　下の巻「当元禄十六年の秋仕出し蒔絵扇といへる持扇をしらへ納まる足人と膝を容（イレ）る水酒のたつくを定ぐ為なり地扇を漆にて漆蒔絵等絵をうきさるぬるなり」といふ事見えたるとい作者茶全子なる人京都の蒔絵師文某なり

△南京扇

「子孫大黒柱」（宝永六年印本　北条数人月尋堂著）「昔都大宮通りのすゑに蒔絵師某扇よくなかりし者何とぞ一思案して世を渡らんと工夫して唐風の押絵団の

ガラス使用

極りたる草花づくしなるを仙人唐子なと板下の絵にかきひそかに板行になし唐紙に摺其うへ絵をそれ〳〵の絵の具にて彩色なさしむ十日の仕事を一日に仕まひて然もよきハ一段見ごとなり之是を田舎問屋へおろしてよ猿の形（ホカ）下直なれバ出来次第に買人京屋をはかりて六枚屏風の押絵十二枚にて六匁とハ此細工也　中略　其後又南京模様とて扇の絵に藍（アヰ）摺を仕出し下直二匁五分世間めづらしがりて此扇をもたぬ人なし　中略　右ハ享保二年めに本町角より出て竹子なりまでかへ云〻



柳翁曰宝永より昔よりつゝ延宝天和の頃ゟ仕初し扇也

みな云西鶴か一代男のさし絵をかきしハ吉田半兵衛なりとぞ

此半兵衛と同人か別人か未考

元禄年間ゟ刊行なりける【紋所帳】ニ此図ありたるにて揃

とくべしハ南京焼の染つけより工風せるなるべし

△江戸扇　【東日記】（延宝九）言水撰　波濤石ちる流江戸扇　山夕

柳翁　なる日の扇ますぐより筋をうけて白くあとつけたる扇なども何れも江戸にて仕初し物也

△（大子一ノ四十七ウ　扇の記）売ちら扇　【懐子】　昼月をあやめとさうに何気扇　知常

△袖扇　【犬子】（四十七ウ）

△銀の扇　【七百韻】（延宝四年吟）　さても此絵ハ偽か何の中ら　以仙

うら赤しそれとハ銀の扇也　尾蝿

△（扇のなり）△紅井（つこな）の扇　【七百韻】（延宝年吟）　空ニ日の出の光りを傾城　定祐

なるとりし皆紅井の扇の子　保俊

△（扇地）△朝鮮骨の扇　【延宝二年哥仙】（イ八　五年）　うち除メ白く不彼の閨房　卜宅

旅衣朝鮮骨の扇地や　仝

△ゆきひら骨の扇　【俳諧今】（明暦二）　つらふものもあき骨てことますまの浦

国立国会図書館　タイトル『足薪翁百話 3巻』 請求記号 859-83　ガラス使用

ゆきひら骨の扇かしさよ　康吉

△安扇　［高〈職人〉嗜口記］（正徳三）「安扇の絵柳に泊も武蔵野と富士松なげに帆かけ船

さまざまの書き絵具つらして千枚を二百文下」

△絵扇　△連歌扇　［伊勢貞丈見聞雑抄］　添書「其絵扇の月に雲かゝせばかくしてあひ絵の

△車扇　車扇の百扇ももぶし扇のさかさこひ連歌扇をなてさく」

△えひら扇　［伊勢貞丈家之雑抄］　添書「今ハ扇そう作扇と紀（気）にせよ紅鋼の

えひら扇のくゐ代ゟけて」（元文之保中の作なる扇二又古街のへらしのうへ出入おきけり）

△ちとせあふぎ　△千歳扇（ちとせのあふぎ）　［そゞろ草］「元文の頃京師柳の馬場六角辺に小西八左衛門といへる扇折

今の鯨扇を工夫して都鄙の童とるる扇を其後千歳（ちとせ）扇といひける」

△銀扇　［雨窓閑話］（享保甲辰　水音跋　桃蹊撰）

日　婕妤のてよそろうや銀扇　鏡山

日　灰汁ぬけ出ぬ扇や銀扇　素園

△黄骨　日　あと佐名は清見山の黄骨扇　嵐雪

日　いふ深黄骨の奥翦（マクバ）原の凪　知章

日　遠く人にさも黄骨のかざしかな　八木

△黒骨　日　黒骨や扱ハ二つの銀と黒　柳角

△扇車　日　待ちね鬼扇車の席移忽　泥鰌

△扇占　日　世あてもの待ちてもびれや扇占　魚目

△扇引　日　若気ないしや負ても扇引　老谿

△丁子引　日　惟光よ雪井鹹て丁子引　凡女

△扇の二つ紋　日　声のなき詩作り扇の二つ紋　治寮

△五明扇　判の悩　大諫言　城殿の揚扇男女の手に翻して五明扇の名を借し

△六角扇　△唐扇　角扇ハ百金ハ媚がよくつこひ

△女ハ年よりも扇の文のかゝる事　［簾中旧記］　類従本四百四十三葉オ　女房衆仰

持扇の事　一百八十すぢの扇ばかりにはぼうたん（牡丹）廿すぢめしは稚は扇こそあれあね

ばかりには紅梅　廿八すぢめしは稚は扇つまくれなゐは柳は紅いろをめしともつま

紫の扇ばかりには　柳多雅日源内侍がさらしき扇を持したり源氏の宮ひかへて

なれば昔より女は年によりて扇のとうちなりけるべし　此旧記は東山殿の時代の

さうしなり

一要いれ　むかしは扇の要金銀象牙鹿角の類にて表蛮よりさしとゞむる

物なりしを業入りといふなるよし　「一扇の記」にもえそうゆゑ中もなれは要をせき

てぬけ様しかも常時は要いれといふものはなく今のちうのすげかへにて

つぎの数なるべし

「俳諧雑巾」（延宝九年印本　常矩撰）　かなめ入れ利牙ひとつの社なりけり　直貞

今の餘要を製し出てより此ものなきなれ　餘要の文の頃より製し出せる事

「なぐさみ草」ふるえそうち第ノ二あり

「一代男」（天和二年著）八の巻に「此程京で仕出し人の言葉を成物とて上書に古（こ）

綿と記なりけるとなれは扇の要。目釘竹。針。きぬの糸。餅粘。耳搔。ちゝ歯枝。

七色なりとて代二文」扇の要を売る事前の自由てもし合せたるべし

「向の岡」（延宝八年　不卜撰）　遠国や扇の要ぬけの去　不求

うちうりさしとゞむる要を崖まで見るあるも崖がてあふとろすとる色

「壬生山家」　浊ざらしをんな千来　思ひ扇まだ出ぬさかり　土芳

此頃は扇の要住るひて　卓袋

友禅扇布目紙は扇まんえそうなる扇は類多くて悪くはなるいとま

なるまで進かしてかなふべし

是をまた

「三万歳扇「たうけるささうか」二陸月　芦野子鄰の「春のくれなゐにしみふるひそれを梅や渓をそめさせて

今年五月のまつひとれ　えびすの万歳扇とうたつかひけり（しるびすいダミタルカ彩）

寛延二年　双蝶々曲輪日記浄るり

又あまりけりも宗祇の

古連歌　たとへは連歌師をわむるに宗祇の蚊屋に三年

宗祇の蚊屋

此段骨董集にいへるを補ふ

昔連歌師の自誇りて我は宗祇の蚊屋に三年寝たりといひしが一種の諺となりて今俗にそらごとをいふといふ程の事を宗祇蚊屋といひつる事は「骨董集」にみえたり「西鶴名残の友」に宗祇法師と岡部の宿に相宿して同じ蚊屋に寝たりといひし商人の話を載せるは三年といふを相宿にとりてあらはせる西鶴が曾孫なる「崑山集」は醍醐が刊されはあらず不載

（是此所　清書のとき　宗祇のえへきる）

「前車」（江後芝居ことを全部まとめ）貞徳抄句

同じ蚊屋に寝たるぞりの契にて

常はとふさもあらぬ秋中

貞徳自作

花は世上に宗祇の蚊屋に寝たると不讓候り

「新續犬筑波集」（萬治三年印本）跋に「松永貞徳出自作少逍遙子歌林者尚矣兼巧詠俳諧寝言宗祇蚊屋一傾入山崎油樽其枝已熟」宵文言水撰「鯨の鰭」（元禄十年印本）にはとおもとよけりと有り

「俳枕」（寛文年間　延宝八年印本）幽山撰

都を出る宗祇の蚊屋のまざえけり　露沾

十徳や夏を越して蚊屋のまれ　蝶々子（桃園定輪寺にて）

桃園や三年経ても昔の夏　東風
（柿葉云　桃園は浄蔵寺ゝ宗祇の墓所）
白雨数寄宗祇心を砕くいかき　友吉
数夜紙帳の仮枕して　千春
経てもえん宗祇の蚊屋に名の月　野径

一　花洛六百句（延宝八年印本）

一　東華集（支考撰　元禄十三年印本）
近く正徳四年の印本「祇空庵後の記」に「東山の洞春に「宗祇の蚊屋に三年とは聞くもいひ伝へて是迄をうき世」とて事終る年に行し東風の三年経てもえんの句に寄せらるべし

一　物種集（延宝六　西鶴撰）（此ついでにのせず）
思ひ逢よ夫宗祇の蚊屋頼て
古今の大事伝へられそん　玖世

一　雑巾（延宝九年　常矩撰）
それはそれ宗因の紙帳殺皮風　友梓
宗祇の蚊屋に宗因の紙帳を封とる附なるべし總てむかしの誰にない蚊屋なひ勝手とハいへどもむつましき中をいふなり

十五才　一　乗正語磨（万治元年下巻印本）下巻に「紹巴と一ツ蚊屋の内に寝ようとハ　ふかき連歌の上手いふなるべし」ちかくハ紹巴連歌の名だゝかりし事なれバかく詠しするつし意ハ宗祇の蚊屋に同し

一　江戸弁慶（延宝八年言水撰）
七ケ
桐蚊屋須磨の涼風の味　黄吻

一　七百韻（延宝中印本）
（吉見云　因云桐蚊屋とハ宗祇のことなれバ記すむつまじ蚊屋へ寄ぶなり　桐は　相似　相従　相枕の乳とあつたてもあてるなり）
宗因餞別
桐蚊屋の乳をとられ暗かられ多　似春

一　素堂とく句合　祇空の序
唐詩百人首を閲せしとき
瓢枕宗祇の蚊屋ハなつかしや
素堂がかく吟じけると祇空が序にみえてける百人首ハ別祇空が序と（五日綴とあるも）

一　鱗形（延宝六稀）
懐銭も入て物思ふくさし
ひとつ蚊屋三年経ても面離て　撲者　雪柴

ガラス使用

859
3
83

5606

一 宗祇髭

菊のちり　青柳も宗祇の髭の匂ひかな　その女

とくくの句合　髭無宗祇池に蓮ある心かな

昔の人は髭無を貴てよき男の髭のなきは池に蓮のなきごとしと

いへり宗祇の髭（ヒゲ）は香を留ん為となればよき取合せなる

俳枕

柳髭云のちかひしとおかし案　野上の春髭の句なるべし

手燭や面影の月髭の香　按か